
Infinite Stratos

Re//memories

昼寝人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Stratoss Re/memories

【Nコード】

N1346Q

【作者名】

昼寝人

【あらすじ】

インフィニット・ストラトス 通称IS。女にしか扱ふことのない最新技術の結晶。現行最強の兵器。それが当然の認識だった。そんな中、ISを扱える男が現れる。IS操縦者を育成するために創設されたIS学園を舞台に、少女の青春と恋愛と策略と闘争の日々が今、始まる。

プロローグ or エピローグ

それは、遠い過去の記憶。まだ“少年”が幸せを感じていた頃の、遠い記憶。

まだ“少年”が、“自分”であった頃の風景。

「^{いちか}夏くん……図書室では本を読まなきゃ……」

「いいじゃん。固いこと言っちなよ図書委員。なあ、^{ほしき}簿？」

「私はその図書委員の意見に賛成だ」

「うわ、裏切り者」

放課後。

小学校の図書室で会話する男子二人と女子一人。まだ小学四年生である彼らに、規則という単語はまだ定着しきっていない。

図書委員と呼ばれる少年は、本を読みつつも向かいの席に座る一夏と呼ばれる少年を注意していた。

図書室では読書をする。そんな当たり前のことさえも、一夏は守ろうとしない。

剣道の稽古で疲れたのか、それとも姉とのやり取りで疲れたのか。少なくとも学業で疲れたということはないだろう。授業中でも寝てしまうことがあるのだから。

「帰る時間になったら起こしてくれ。じゃおやすみ……」

「一夏！ お前本気で寝るつもりか！」

箒という名の少女は、自分の隣の席で眠り始めた一夏を怒鳴る。

だが一夏は、既に夢の世界へと入っていた。

「……一夏さんと箒さんって、本当に仲が良いよね……」

「どこがだ!?!」

机に身を乗り出して反論する箒。図書委員の少年は驚き、手に持っていた本で顔を隠す。

しばらくして箒が席に戻ったのを確認すると、顔の前から本を退けた。

よく眠っている一夏と、頬杖をつきながら、横目で一夏を見ている箒。

その箒の顔は、どこか嬉しそうだった。

(……篝さんって、一夏くんのが好きなんだよね?)

少年は、この時間が好きだった。

いつも楽しそうな一夏と篝。そして、それを見ている自分。

いつまでもこの時間が続きますように。

図書委員の少年は、そんなことを願っていた。

「……お前は何時くらいまでここにいる?」

「そうだね……。先生に頼まれてた本の整理も終わっちゃったし、この本が読み終わったら帰るよ。あと十分くらいかな?」

「そうか。じゃあその時に一夏を起そう」

「うん、そうしよう」

数分後、本を読み終えた少年を確認すると、篤は一夏を起こした。

まだ眠そうだったが、これ以上帰るのが遅れると、さすがに怒られてしまう。

特に、一夏の姉は厳しい。

「じゃあ、また明日…！」

帰り道。一夏や篤とは違う道で帰る図書委員の少年は、二人に手を振って離れていく。

それを見た一夏たちは、笑顔で手を振る。

「おう！ また明日な！」

「転ばないように気をつけてな」

箒に注意され、顔を赤くする少年。何も無い場所でさえ躓くことのある少年に対する、優しい言葉。

そのお陰か、その帰り道で少年は久しぶりに転ばなかった。

「また明日……。早く明日にならないかな……」

家の自室にあるベッドの上で、少年は呟く。

そして、少年は瞼を閉じ、眠りに入った。

“明日も一夏くんや箒さんと、楽しく過ごせますように”

少年は願った。誰に祈ったのか、それは本人も分かっていない。

ただ、いつもと変わらない明日がきますように。

祈る。夢の世界へ入る直前まで、ずっと。

そして、少年は眠りに落ちる。

明日の“世界”が、いつもと同じ“世界”であると信じて

今の“少年”は、あの頃の“少年”には戻れない。

もう二度と、戻れない。

第一話 始まりの春

「え……。ぜ、全部、ですか……?」

授業中、このクラスの副担任が声に出して困惑していた。

この記念すべき春の一日。この高校に入学した新しい生徒たちを前にした、初日の授業。その二時間目。

「分からないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

今日入学したばかりの生徒たちだ。まだ緊張していて、質問もし辛いだろう。

この副担任はそう考え、その緊張をほぐすため「私に任せなさい」という感じで胸を張り、教壇の上で笑顔を作っている。

そしてある生徒が手を挙げ、こう言った。

「ほとんど全部わかりません」

その瞬間、笑顔で凍る副担任が誕生した。

クラス内の空気も一瞬にして凍りつき、そして小さな笑いが生まれた。

「え、え」と……」

どうにか再起動を果たした副担任は、他の生徒にも確認をとった。「他に、今の段階でわからないという人はいますか？」と。

その返答は、沈黙だった。

「……え？　ちよっ　、あれ？」

挙手した生徒は困惑していた。こんな難しいこと、みんな理解出来ているのか。

周囲を見渡しても、ただ笑っている生徒ばかりが視界に入ってくる。

そして窓際の列、その一番後ろの席にいる、自分と一番仲の良いクラスメイトに目を向ける。

そのクラスメイトは、笑顔でこちらを向き、親指を立てていた。

(うつわ〜……、裏切り者!!)

笑顔の親友に対して、久しぶりに殺意を覚えたのだった。

高校の入学式といえば、誰でも緊張するものだろう。

小学校、中学校と義務教育を経て、単位というポイントが存在する新たな学び舎。

新しい環境。

新しい空気。

新しい知識。

新しい人間関係。

何もかもが今までと違う、そんな新しい一日が、その入学式から始まるのだ。

「……………」

そして、その一日は静寂から始まった。

クラス分けが発表され、新入生は全員自分のクラス、その教室へと移動していた。

移動が完了すれば、後は担当の教師がショートホームルームSHRを始めってくれるのを待つばかり。その行事を終えて初めて、新しいクラスは誕生する。

「……」

だが何故か、今このクラスを支配する静寂はその部類のものでは無かった。

その静けさの中にあるのは、驚きの感情。その感情を声に出さないよう、ただ黙っているだけ。

そんな中、教室の扉を開け、教師らしき人物が入ってきた。

小柄で黒縁眼鏡をかけ、少々サイズのあっていない服を着た教師。

その雰囲気から、頼りなさも感じる。

「始めまして。このクラスの副担任を務めます、やまたまや山田真耶です」

その教師が教壇に立ち、自己紹介をする。今まで静かだった空間に響くその声は、やはりどこか頼りない。というより、“大人にな

ろつと背伸びした子供”だ。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

そう言って、山田先生は出席簿を広げる。これから自分が関わるクラスだ。教師である彼女の中で、特別な思いも膨らんでいるだろう。

だがしかし。

「一年間よろしくお願いしますね」と挨拶をする山田先生。その顔は笑っているが、明らかに無理をしていた。頬には若干の汗も流れている。

その理由は、やはりこの教室の張り詰めたような空気だろうか。クラスのほぼ全員が緊張しているためか、張り詰め具合はかなりのものだ。

「……」

出席確認が始まる。出席番号順に自己紹介をしていくクラスメイトたち。

しかし、窓際の列、その一番後ろにいる人物は、未だ静けさを放っていた。

その手には一冊の本。教科書ではない、手帳サイズの本だった。小説の類であろうその本を読む人物は、教壇でビクビクしている副担任も、自己紹介をしているクラスメイトの声も全く気にしていなかった。

紙が擦れる音。その音が、その人物の放つ唯一の音だった。

「織斑一夏くん。織斑一夏くんっ」

だが副担任のその声を聞いて、小説の字を追っていた目が別の方向を向く。口元には僅かな笑みすら浮かべていた。

その視線の先にいたのは、先ほど山田先生から呼ばれていた“織斑一夏”という人物が立っていた。何故か山田先生がぺこぺこ頭を下げ、自己紹介を促している。頭を下げられている当の本人も、焦った様子だ。

「えー……えっと、織斑一夏おりむらいちかです。よろしく願いします」

簡潔な自己紹介だった。他のクラスメイトからは「もっと話せ!」という期待を込めた視線が送られている。

本を読んでいる人物は、彼“織斑一夏”を知っていた。その性格も、ある程度は把握している。

彼が簡潔な自己紹介しかしない理由はただ一つ。

このクラス三十一人の内、二十九人が全て“女子”だからである。いや、このクラスだけではない。彼が進学した特殊国立高等学校“IS学園”の生徒、そのほぼ全てが“女子”なのである。

IS

インフィニット・ストラトス。

それは、今から数年前に考案されたマルチフォーム・スーツである。

過酷な宇宙環境での活動を目的に開発された、新しい“宇宙服”となる最新技術の結晶。

広大な宇宙でも自在に移動できる汎用性と機動性。

有害な放射線をカットし、宇宙を漂うデブリなどから操縦者を守る強固なエネルギーシールド。

他の機体とを繋ぐ、強固なコア・ネットワークシステム。

暗く閉ざされた宇宙を見渡し、様々な情報を操縦者へと送るハイパーセンサー。

宇宙開拓のために開発されたソレは、現在も進化を続けていた。

ある“事件”をきっかけに、軍事兵器として。

優れた技術はすぐ兵器へと転用される。それは有史以来、人類が行ってきた定番行事である。

その事件でISは、現存する兵器全てを凌駕するという結果を残した。戦闘機や軍艦、戦車といった現代兵器を開発していた多くの国は、ISの秘めた力に魅入られ、その研究に着手し始める。

そんな中、ある欠陥が判明した。

ISは“女”にしか扱えないという、致命的な欠陥。

その致命的な欠陥は、今日に至るまで改善されていない。だからこそ、世界各国はISの操縦者である女性を少しでも多く獲得するため、様々な女性優遇制度を施行していった。

じょそんだんび
女尊男卑。

現代に於ける、簡単な構図がこれである。

ISを操縦できる絶対的な優位性は、従来の男女勢力図を簡単に覆した。基本的な身体能力は男性の方が優位。だが女性はISを使える。そしてそのISは、現行最強の兵器。最早比較の次元が異なる。

ってしまっ。

今ではスポーツとしての色合いが強くなっているISだが、その存在は、世界に大きな変化をもたらしたのだ。

パン！！

突然の異音。

クラスメイトたちが放つ期待の視線を浴びていた織斑一夏が、後頭部を擦りながら呻いていた。その顔から、かなりの痛みが襲ったと判断できる。

そして、その痛みを彼に贈った人物も確認できた。

一夏の後ろに立っている女性。黒いスーツに包まれた体は、モデルに匹敵するであろうボディラインを誇っていた。身長もあり、長い黒髪が風に揺れる。

だが表情に限っては、かなり冷たい印象を放っていた。狼を思わせる鋭い目には、確固たる強い意志が宿っているかのようにもある。

「げえっ、関羽!？」

パン！！

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

一夏の発言に気を悪くしたのか、容赦なく放たれる出席簿の攻撃。出席簿を持っているということは、この学園の教師だろうか。そんな疑問が、生徒たちの中で生まれた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

山田先生がその女性に駆け寄り、笑顔で話しかける。話の内容から、どうもこの女性こそがクラスの担任であるようだった。出席確認でいきなり躓き、今まで涙声だった山田先生だが、今は少々熱っぽい声を発している。その顔にも、しっかりとした笑顔が確認できた。

「諸君、私が織斑千冬^{おりむらちひゆ}だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

窓際最後尾の席に座っている少年は、本で口を隠しながら笑った。

(教師が言う言葉じゃないような気がしますけどね…)

だが、そんな発言を聞いてクラスから上がった声、それは黄色い悲鳴だった。

「キヤ　　！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

千差万別。十人十色。様々な歓声をあげる女子たちに、織斑千冬は頂垂れた。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

本気で鬱陶しそうだった。だが一度テンションの上がった女子たちには、千冬のその態度ですら元気の素なのだ。

「きゃあああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡して〜！」

性質が悪い。

そんな考えが頭をよぎる織斑千冬。だがその視線は、目の前でこちらを見ている男子生徒、織斑一夏に固定される。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パン！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

短いやり取り。千冬の猛攻に降参した一夏だが、この会話がクラスの女子たちに更なる活力を与えた。

織斑一夏と、織斑千冬。そして先ほど一夏は千冬姉と言った。彼女が兄弟であることを証明するには十分だろう。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

喧しい。千冬は再び頂垂れた。

弟との関係を隠すつもりはない。別にばれようがばれまいが関係ない。だがこつも喧しいのは勘弁願いたい。それが彼女の気持ちだった。

織斑一夏、彼の通うこの女子ばかりの高校“IS学園”は、日本政府によって創設された特殊な教育機関である。

ISの操縦者教育を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。

ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また黙秘、秘匿を行う権利は日本国にはない。

また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し、協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。

また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件で門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

これがIS運用制限条約、通称“アラスカ条約”により定められた、この学園の存在理由である。

ISは元々日本が開発した

正確には一個人だが

技術である。この技術により世界は混乱し、軍事バランスまでも崩してしまった。その代価を払え。それが世界のコメントだ。

日本はその要望に答え、このIS学園を創設。以後、IS運用に関わる操縦者や技術を世界に送り出している。

ちなみに、世界で唯一男でISを動かせる織斑一夏は、このIS学園の試験会場と、本来受ける予定だった私立藍越学園あいえつの試験会場を間違えた。

そのIS学園試験会場にあったISに触れ、そのまま起動。それで彼がISを使える男だと判明し、日本政府が“保護”という名目でこのIS学園に強制入学させたというのが、織斑一夏のこれまでの経緯。

当の一夏がクラスの女子に熱い視線を向けられている中、未だに読書が続いている人物がいる。

先ほどまで一夏と千冬に視線を向けていたようだが、満足したのか興味が失せたのか、その目は再び活字へと向けられていた。

だが今はSHRの最中だ。読書が認められることはない。

「時入。お前はいつまで読書が続いている……？」

その声は読書をしている人物の机、そのすぐ手前で発せられた。

読書に勤しんでいたその手と目が止まり、しおっ 栞を挟んで本を閉じた。そしてその顔が、すぐ目の前にいる織斑千冬に向けられる。

赤い瞳。まるで血液が見えているかのようなようだった。眼鏡をかけているが、その赤色に全てが飲み込まれるような錯覚を、千冬は覚えた。

だが、その赤い瞳を向けていくる人物の顔は、笑っていた。

「……いえ、皆さんすごく楽しそうだったので、私も楽しんでみようかと……」

パン！

「本を読んで楽しむのは結構だが、状況を考え、理解して行動しろ。馬鹿者」

「……了解です、織斑先生」

頭に出席簿の一撃を食らった人物は、その直撃を受けた場所を擦りながら言った。

そして、それまで騒ぎ立てていた女子たちが、いきなり静かになる。

おそらく、気付いたのだろう。

その人物もまた、自分たちとは違うということ。

「先ほど、誰かが織斑のことをこう言ったな。『世界で唯一ISを動かせる男』と……」

女子の一人が頷き、視線を千冬の前の席に座っている人物に向けた。他の女子たちも同じ行動をとる。

その行動を見て、その人物は起立した。

身長は一夏と同じくらいだろうか。だがそのスラリとした体格は、見る人によっては女性とも思ってしまうだろう。黒い髪は長く、首の後ろから一本に束ね、腰の辺りで毛先が動物の尻尾のように揺れている。そして前髪だけが部分的に白く、メッシュになっている。

「見ての通りだ。織斑だけがISを使える男ではない」

織斑千冬はそう言うと、起立した人物を睨みつけ、自己紹介を促した。睨まれた人物は苦笑しながら、クラス全域を見渡せるよう、体の角度を変える。

「時入神楽ときいりかくらです。織斑くん同様男子ではありませんが、何卒よろしく
願います」

笑顔で挨拶をするその男子を見たクラスの女子たちは、密かにガ
ツポーズを決めていた。

一時間目の授業が終了し、短い休み時間が来た。この学園で二人
しかない『男』こと織斑一夏と時入神楽は、窓際最後尾である神
楽の席で休憩していた。

一夏が神楽の席に座り、神楽は窓縁に腰掛けている。これは教室
の中央列、しかもその一番前にある一夏の席よりも、この一番後ろ
にあり、かつ窓際であるこの席の方が落ち着くという一夏の判断だ
った。

その“目立つ席”に居た一夏を労うため、神楽は自分の席を譲っ
ている。

「……ダメだ。この状況はダメだ。マジでダメだ」

「ダメと何回も言わないでください。私まで気が滅入ってくるじゃ
ないですか」

彼ら二人は入学以前からの知り合いだ。中学では一夏と神楽、そして彼らの友人である五反田弾ごたんだたんの三人はよくつるんで遊んでいた。といつても、馬鹿をする弾とそれに巻き込まれる一夏、それを遠くから観察している神楽と、距離感が掴みにくい関係だった。

中学時代につるんでいた友人はもう一人いるのだが、彼女は今、この国にはいない。母国である中国に帰ってしまったためだ。

そして一夏の姉である千冬とも、神楽は面識がある。

まるで自分の弟のように接してくれた千冬を、神楽自身は嫌いじゃない。その強引な性格だけは、なかなか慣れることが出来ないでいるが。

だが、当の織斑千冬は最近ほとんど家にいなかった。たまに帰ってきていたようだが、まさかこんな場所で会うとは一夏も神楽も想像していなかった。

「それ以前に何故、君は授業中終始挙動不審なのでしょう？ 山田先生だからいいものの、これが織斑先生の授業なら君は二十回以上叩かれてますよ。あの出席簿で」

「いや、それには触れないでくれると助かる……。ていうか、お前はアレを見ても何とも思わないのか？ 本当に俺の気持ちがわからないのか？ この耐え難き感覚が……」

そうやって一夏は教室の外、廊下を指差す。そこには他のクラスから偵察に来ているのだろう女子たちが、こちらを見て笑っている。

その視線に込められている感情は、おそらく好奇心。

ISを使える『男』ということは、自分たちと対等の立場にいる『男』ということだ。

今まで彼女たちがどうという男に遭遇したのか、それは彼女たちには分からない。

だが目の前にいる二人は、その男の誰とも違う。

(……ウーパールーパー?)

それは昔、この日本で流行った珍獣らしい。神楽自身はその珍獣を見たことがない為、詳しい姿形は知らない。ただ情報として知っているだけだ。

教室内の女子たちも、廊下の女子たち同様の視線を送ってきている。だが神楽や一夏が女子たちに視線を向けると、その視線を一気に逸らす。

「……一夏。ちょっとだけ君の言いたいことがわかりました」

「そうか。よかったよかった」

苦笑しながら一夏の意見に同意する神楽。一夏はため息を漏らしながら机に突っ伏す。

神楽は上着のポケットから小説を取り出すと、読書を始めようと栞を挟んだページを広げた。

だがその作業は、異常事態発生により中断せざるを得なくなる。

「……ちよつといいか」

「え？」

突然、女子の一人が一夏たちの元に歩いてきて声を掛けてきたのだ。

その瞬間、クラス内に「先を越された!？」というざわめきが生まれた。その反応からして、クラス代表で声を掛けてきたという訳ではないらしい。

長い黒髪のポニーテールに鋭い目つき。何かスポーツをしているのか、その身体はどこか鍛えられている印象がある。

そんな女子を見た一夏は、少し不安そうな声でその女子に問いかけた。

「……おかし箒？」

「……………」

一夏を無言で睨む。だが否定をしないということは、一夏の言った『箒』という人物で合っているのだろう。

そして、箒と呼ばれた少女は神楽を見た。その目は先ほど同様鋭いが、どこか困惑の色があるのを神楽は感じた。その困惑が何に對してなのか、それはわからないようだが。

「ええっと……、何か顔に付いてますか？」

神楽は箒に質問するが、質問された箒は先ほどよりも険しい表情になる。まるで、馬鹿にされていることに憤りを感じている子供のような、そんな顔だった。

一夏はそのやり取りを見て少し焦っていた。その様子を見てなのか、箒は「廊下でいいか？」と提案を持ちかけ、廊下へと向かった。

「悪い、ちよっくら行ってくる」

その箒を追うように、一夏は席を立つ。

神楽は笑顔で手を振って送り出すと、先ほどから手に持っている小説を開き、読書を再開した。

だが、神楽の脳裏には、先ほどの“箒”という少女の表情が浮かぶ。

「……先ほどの彼女、私の事を知っている様子でしたね……」

先ほど箒がこちらに向けた視線。それが気になって仕方がない。

一夏は何かに気付いたようだったが、それをこちらに悟られないようにしていた。

（…… また、“私”を知っている人に会ってしまった……）

もう、出会いたくはなかった。

ようやく全てを突き放し終わったと、そう思っていたのに。

（………三年経っても、まだ私を縛り続ける。いや、まだ三年しか経っていないからか……）

三年前のあの日から、世界の全てに霧がかかっていた。その霧は、もう一生晴れることはないのだろうか。

そして、この呪縛はあと何年続くのだろうか。

思考の最中、休憩時間の終わりを告げるチャイムが響く。

一夏が教室に戻ってきた時、神楽が持っていた小説は、一夏が廊下に出て行ってから一ページも捲^{めく}られていなかった。

パン！

「とつとと席に着け、織斑」

「……………ご指導ありがとうございます、織斑先生」

教室の入り口で立っていた一夏の頭頂部を、織斑千冬の一撃が捉えた。

そしてその一撃の音を合図に、神楽は小説を閉じ、座っていた窓縁から離れ、席に着いた。

小説は、制服のポケットへと沈められる。

今まで考えていた物事、その全てと共に……

(あゝあ…、まさか本当に手を挙げるとは…)

入学初日の二時間目。ISの運用に関わる基本的な部分が書かれた教科書のページを広げ、神楽は笑っていた。

理由は簡単。彼の友人である織斑一夏の行動が、自分が予測していたものよりも面白かったから。

授業の内容がわからない、というのは、一時間目の授業態度を見ていてわかった。

だがまさか、そのことをこうも簡単に暴露するとは思っていなかった。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

(あゝ…、あの数百ページのアレですか)

神楽の手元にも、その参考書は届いた。最初はその厚さに驚きもしたが、元々読書好きの彼である。読み始めれば止まらなくなり、半日で読みきってしまった。

もちろんただ読むだけではなく、わからない部分は辞書やパソコンで調べ、理解しながら読み進めていた。

その成果か、授業でわからないという部分は今のところ皆無だった。

パン！

一夏が千冬に叩かれた。どうやら彼は、古い電話帳と間違えて捨ててしまったらしい。

赤い字で必読と書いてあったような……。

そんなことを神楽が考えていると、千冬は神楽の方を向く。その目はいつも通り鋭い。

「時入。お前は大丈夫だな？」

「はい。今のところ問題ありません」

「よろしい」

一夏が恨めしそうに神楽を見た。鬼気迫るその表情に、神楽は苦笑しながら手を振る。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やねと言っている」

「……はい。やります」

一夏が千冬に勝てた事例はない。仲が悪い兄弟という訳ではないので、兄弟喧嘩すらあまりない筈だが、あつたとしても一夏に勝ち目はないだろう。口でも、そして腕力でも。

それに、千冬の行動は正しい。ISのその驚異的な性能は、この学園の学生が遊び半分ですべて使っていないものではない。

しっかりとした知識を学習し、それを理解して運用しなければ、最悪の事態を招くことすらあるのだ。

IS。それはそれだけの性能と危険性を持ち合わせた“兵器”なのである。

「え、えつと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張つて？　ね？　ねっ？」

山田先生が一夏の手を握り、そう申し出た。本当に生徒のことを想っている教師なのだろう。その表情は真剣だ。

「はい。それじゃあ、また放課後によろしくお願いします」

その申し出を受諾する一夏。その最中、織斑千冬が神楽の方へと歩いてくる。

そして席の隣に到着すると、身を屈め、その形の良い唇を神楽の右耳に近づけた。

「すまんが、あいつの勉強を見てやってくれ。もちろんお前が暇なときだけで構わん」

その顔は、弟を心配する姉のものだった。学園では教師として一夏には振舞っているようだが、そう簡単に姉という顔が隠れるわけではないようだ。

「わかりました。一夏は元々勉強が出来ないというわけではないですし、なんとかかなると思いますよ。実際、藍越学園の試験を受けていれば、結構難関なあ的高校でも合格できた筈ですからね」

一夏は、中学二年の終わりから中学三年の受験前にかけて猛勉強をした。それはその勉強に付き合っていた神楽だからこそ、どれだ

け大変だったかわかる。

そのときの彼の顔は真剣で、「絶対受かってやる！」という決意が見えていた。だからこそ神楽も、彼の勉強には一日と欠かさず付き合った。

「よろしく頼む」

「はい、了解です」

短いやり取りだったが、神楽の返事に満足したのか、千冬は教室の後ろ、その隅にある椅子へと戻っていく。

一夏と先ほどまで会話をしていた山田先生は、なぜか顔を赤くしてモジモジしていたが。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら……」

どうやら、かなり邪な妄想まがまがをしているらしい。生徒と放課後に二人つきり。確かにシチュエーションとしてはありそうだが、彼女が想像している“そんなこと”は起こらないだろう。

というよりも、織斑一夏にそんな甲斐性はない。

「あー、んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

千冬の咳払いで思考が霧散したのか、一気に現実へと引き戻される山田先生。今まで居た一夏の前から教壇に戻ろうとして、そして

（あ、コケた）

クラス全員の考えが一致したとき、山田先生は「いたたた……」
と言って、教壇へと戻っていった。

二時間目の授業が終わった。これからまた、短い休憩時間が入る。

一夏は再び神楽の席へと向かうべく、席を立つ。

「ちょっと、よろしくって？」

だがその行動は、つい一時間前に起こったのと同様の手順で中断

された。

呼ばれた一夏は「へ？」という声を出し、声を掛けてきた人物へと向く。

そこに居たのは、明らかに“お嬢様”という空気を纏った女子だった。綺麗な金髪は、僅かにロールがかかっている。瞳は鮮やか青色で、まるで宝石のようだった。

だがその目は、一夏のことをあまり良く思っていないという感情を映し出していた。

この時代、男は基本的に女の従者、悪ければ奴隷に近い扱いを受けることがある。

この目の前の少女も、そうした扱いを一夏にするつもりなのか。

遠くから見ていた神楽はそんなことを思いながら、一夏の元へと歩み始めた。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

話し方もその腰に手を当てた立ち姿も、高貴な印象を放つ。だがそれは、一夏が最も苦手とするタイプの人間に多いものだった。

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

やっぱり。

一夏は心の中でそう肯定すると、目の前の少女に視線を固定した。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

その言葉は、その少女の不機嫌度を上げてしまったようだ。先ほどよりも更に見下したような口調で声を発した。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

代表候補生。その言葉に神楽は反応する。

(くえ〜…、この子が…………)

神楽は知識を持っているので、なぜ彼女がここまで高飛車たかひしやなのかはなんとなく納得できた。

だが当然、その知識を一夏は有していない。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

その瞬間、クラス内で何人かの女子がコケた。今まで聞き耳を立てていたのだろう。一夏のその無知っぷりには、多くの女子が驚かされた筈だ。

先ほどから一夏の隣にいる神楽ですら、頭を抱えている。

(一夏…、君は地雷を踏むのが好きですねえ…はあ…)

そう、今のは明らかに地雷を踏んだ。セシリアと名乗った少女も、わなわなと拳を震わせながら一夏を睨んでいる。

「あ、あ、あ……」

「『あ？』」

「あなたっ、本気でおっしやってますの!？」

「おう、知らん」

「……………」

セシリアは呆れたのか、先ほどまでであった怒りが抜けてしまっている。クラスの女子たちも、笑いを堪えているようだった。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

またさっきと同じ口調。人を馬鹿にするような、そんな口調に戻っていた。

ちなみにこのクラスには、一夏や神楽と同じ日本人もいる。彼女の今の発言は、そういう日本人全員を敵に回してしまうような発

言だった。

気の短い女子がいたら、間違いなく掴み掛かってしまっただろう。

だがこのクラスに、そこまで気の短い子はいないようだった。ただ一夏の表情が少し険しくなった程度である。

「で、代表候補生って？」

一夏がその表情のままセシリアに話しかける。セシリアも一夏の問いに答えようと口を開こうとした。

だがそれは、一夏の隣にいたもう一人の男子、時入神楽の介入によって止められてしまう。

「代表候補生とは、その名が示す通り、国家代表のIS操縦者になる資格を与えられた者が名乗れるものです」

セシリアは、自分がわざわざ説明してあげようとしていたことを横取りした人物を睨む。

神楽はそれを見ると、その赤い瞳でセシリアを見る。眼鏡を掛けているが、その視線は力強いものだった。セシリアはその視線に耐えることが出来ず、視線を逸らしてしまう。

その行動に驚いたのか、神楽は笑う。そんなに怖い顔をしていた

のだろうか、と考えながら。

「国家代表IS操縦者とは、その国で最強のIS操縦者であるという称号。適正だけでなく、どんな戦況にもすぐさま対応する“判断力”。相手の戦術、その全てを見透かすことの出来る“戦術眼”。相手を寄せ付けることすら許さない圧倒的な“技量”。そして、確実に勝利を手にするという“決意”。この全てが揃っているからこそ、彼女たちはその称号を背負えるのでしょねえ…」

うんうんと、勝手に頷く神楽。その隣にいる一夏も、「へえ〜」感心している。

セシリアもご満悦らしく、先ほどよりも機嫌は良さそうだ。

「そんな“国家代表”になる素質を持つと国に認められているのです。彼女、オルコットさんはかなり優秀なのでしょう。簡単に言うてしまえば、エリートということになります」

「そう！ エリートなのですわ！」

セシリアが突然、一夏を指差しながら言い放つ。一夏は驚くが、神楽はただ笑っているだけだった。

だが彼女の高説は、まだ終わらないらしい。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

セシリアの言葉。それはどうしても一夏には引っかかるものだった。

確かに、今の世界で女は強いのかも知れない。

だが、それを理由に男を、そして周りの人間を見下すのは間違っている。そんな権利は、誰にもないのだから。

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？ 大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一……ではなく、数少ない男のIS操縦者だと聞いて、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね。まあ、そちらの方に關しては、少々知識はあるようですね……」

「それはそれは、ありがとうございます」

「俺に何かを期待されても困るんだが。っーかコイツと比べないでほしい……」

神楽は笑顔でお礼を言うが、隣の一夏は頂垂れた。

神楽と比べられて、勝てたことなど一つもないのだ。テンションが一気に下がってしまった。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

そう言って、その青い瞳を一夏と、そして神楽にも向けた。

(目は口ほどにモノを言うってやつですか)

その視線に秘められた感情は、哀れみの感情。

あまり、向けられたくないものだった。

「ISのことではわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試で“唯一教官を倒した”エリート中のエリートですから」

ふふん、と言いながら胸を張るセシリア。その大きな胸は、セシリアの自信の表れなのだろうか。

少なくとも、一夏や神楽の悪友である弾だんがいたならば、その胸に引き寄せられてしまっただろう。あの男はそっという男だ。

だが、神楽はここで一つの違和感を覚えた。

先ほど、セシリアは“唯一教官と倒した”と言った。だが確か…

「一夏。君も教官を倒したとか言ってませんでしたか？」

「ああ。確かその筈なんだけど…」

「は……？」

そう、何を隠そうこの織斑一夏も、入試の際に行ったIS同士の模擬戦闘で教官を倒している。

その事実には驚いたのか、セシリアが「信じられない」という顔で硬直している。

(いきなり突っ込んできたからそれをかわしたら、勝手に壁にぶつかってそのまま動かなくなっただけなんだけどなあ…)

一夏はそう考えつつ、目の前で硬直を続けているセシリアに目を向けた。

ようやく動けるようになったセシリアは、目を見開きながら会話を続けた。

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子の中では、ということでしょうか…。私たち二人はイレギュラーですし…」

神楽の言葉に、再び言葉を失うセシリア。彼女の世界、そのどこかが崩壊したのか、何かが崩れる音が教室の中を駆け巡った。

一夏が教官を倒したという話題は、他の女子も驚いているようだ。

それもその筈。このIS学園の教師たち、すなわち教官たちは、優れた技能を有している一線級の操縦者だ。それを倒したということだけでも、とんでもないことなのだ。

「つまり、わたくしだけではないと………？」

「いや、知らないけど」

「あ、あなたも教官を倒したって言うの!？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!？ たぶんってどついつの意味かしら!？」

「まあまあオルコットさん。落ち着いてください」

「こ、これが落ち着いていられ」

セシリアが暴走しだしたその時、三時間目の開始を告げるチャイムが鳴り響く。次の授業は織斑千冬が担当だ。このまま会話を続けたら、あの出席簿による頭部強打決定だ。

そのことを理解したのか、セシリアは未だ荒い呼吸を落ち着かせ、一夏を睨みつけた。

「つ……! またあとで来ますわ! 逃げないことね! よくって!？」

セシリアのその力の籠った言葉に、一夏はただ頷くしななかつた。

ここで余計なことを言えば、また怒られる。恐らくそう判断した

のだらう。

「モテモテですねえ……」

「ほっとけ!!」

茶化してくる友人に向かって、一夏は突っ込みの言葉を贈った。
それを受け取った神楽は笑いながら、自分の席へと戻っていく。

これからの日々、退屈はしなさそうだ。

今まで“篝”という少女のことで頭が一杯になっていた神楽は、
ふと、そんなことを思っていた。

第二話 始まりの終わり

目を開けた時に見たのは、白い天井だった。

自分が何処にいるのか、どういう状態なのか、それを理解する事も出来なかった。

ただ息をして、目を開けているだけの“塊”。

しばらくして、その目が動いた。

自分の周りを見渡し、そして自分の状態を理解しようと、目と思考を動かした。

先ほどから動こうとしない自分の身体は、ベッドに寝かされている。

そして、そのベッドの周りには、いくつかの機械が置かれている。その内の一つから一定のリズムで電子音が鳴り響く。

腕には針のようなモノが刺され、その針に付いている管がベッドのすぐ隣に置かれた袋に繋がっている。その袋の中には液体が入っており、それ管を通して少しずつ、腕に刺さっている針へと向かっていた。

そして気付く。

自分の周りにいる“人間”という存在に。

その人間は、ベッドに横たわる“ソレ”に視線を送っていた。

その視線に込められた感情は“悲しみ”と“安堵”。

周りにいる人間は二人。

片方は女。黒く長い髪を揺らしながら、その鋭い目をこちらに向けている。

もう片方は、その女性よりも身長が低い男。ベッドの上の人物が目を見ましたのが嬉しいのか、その表情には笑顔かおがあった。

「　　っ！　起きた！　おい　　」、　大丈夫か！？」

小学生だろうか。その少年の顔は幼い。だがそれだけ純粹なのだろう、目を覚ました人物に近づき、明るい声を掛けてくる。

「一夏、少し落ち着け。まだ　　」は状況を把握しきれていない」

姉弟だろうか。背の高い少女は、一夏と呼ばれた少年を窺^{たしな}める。

姉の言葉に頷き、一夏はベッドの上の人物から少し距離を取る。それを見た姉は、素直な弟の頭の上にそっと手を置いた。

「　　」。今の状況は理解できるか？」

少女が声を掛ける。

だが、寝たきりの人物は反応しない。

先ほどから姉弟に目を向けているが、全くと言っていいほど反応していないのだ。

「おい、 “ ” ? 大丈夫か？」

女性の方が珍しく心配そうなトーンで声を発する。

そして、ようやくその人物の口が動き出した。

「…………… “ ” ? ナニ？」

その声は幼かった。おそらく、女性の横に立っている男子と同年代ぐらいだろうか。

だが、ようやく発した言葉は、その姉弟にとって嬉しいものではなかった。

「な、なに言ってるんだよ？ “神楽” ってのは、お前の名前だろ？」

少年が、笑った表情のまま凍りついていた。横にいた少女も、困惑の表情を作り始める。

「……………おまえの、ナマえ？」

ベッド上の少年は、無垢な瞳で姉弟を見る。その瞳は、鮮やかな赤色をしていた。

だがその瞳に映る姉弟は、ただ呆然とした表情でその少年を見つめている。

「……………キ…み、だ……………レ？」

今まで笑顔を保っていた少年の顔が崩れ、今にも泣き出しそうな表情へと変貌する。隣にいる姉の左手を、自分の右手で力一杯握る。

「……くそっ……」

弟の手を握り返し、視線をベッドの上の少年へと集中させた。その目は依然鋭いが、弟同様、彼女も混乱しているようだった。今まで冷静だった彼女の言葉は、ただ無力な自分を呪うものになっている。

「……ダレ？ ナニ？ どこ？ ナゼ？」

“神楽”と呼ばれた少年は、視線を姉弟から白い天井へと戻す。そして、まるでうわ言のように疑問の言葉を呟き始めた。

「誰？ 誰？ 誰？ 誰？ 誰？ 誰？ 誰？ 誰？ 誰？ だれ？」

ボクハ

ダレ？

その日。一人の少年が、十二年という短い人生を終えた。

「それではこの時間は、実践で使用する各種装備の特性について説明する」

高校入学初日、その三時間目が始まった。

教壇に立つ一人の教師、織斑千冬へと視線と意識を集中させているのは、今日入学したばかりの新生三十一名。その殆どが女子であり、男子はたった二名のみ。

教室最前列、その中央の席に着いているのは織斑一夏。ISを動かせる二人の男、その片割れ。そして、教壇に立っている織斑千冬の弟でもある。整った容姿と黒い髪は姉と似ているが、性格は姉のそれとは違い、誰にでも優しい。だが自分の信念を貫く強さを持っているという部分は、姉弟揃って同じだ。

窓際最後尾の席に座っているもう一人の男子、時入神楽。黒く長い髪をしており、首の後ろから腰まで束ね、その髪先は動物の尻尾のように揺れている。だが“先天性色素欠乏症^{アルビノ}”の影響により前髪の一部が白く、そして、血液に似た鮮紅色を瞳に宿している。優しい笑みと丁寧な口調が印象的な好青年だが、その真意は誰も理解できない、と親友である一夏は語っている。

「……………う」

教壇に立つ千冬と、小難しい単語がこれでもかと並べられているテキストを交互に見て唸る一夏。

「……………」

事前学習の賜物か、その小難しい単語の悉くを理解していて余裕の神楽。

それに気付いた千冬は、心の中で大きな溜息をついていた。だがその溜息は表に出ることなく、千冬は授業を始めようとする。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

広げかけた教本を閉じ、千冬は教室内を見渡した。所々で「代表者？」という疑問の声が生まれている。その音量はかなり控えめだが、千冬の耳にはしっかりと届いた。

それに、今自分の目の前にいる弟も理解できていないようで、困惑の表情をこちらに向けている。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

教室内でざわめきが生まれた。つまりこのクラス代表というのは、そのクラスの看板になる人物でなければならぬらしい。下手に決めてしまうと、後でいろいろ面倒な事が起こりそうである。

千冬はもう一度一夏を見た。当然、理解していない顔をしていた。

(……………)

千冬はもう一度、心の中で大きな溜息をつく。自分の弟は今の時点でクラス最大の問題児と化していた。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

そんな中、数人の女子が手を挙げて発言する。その内容は、一人の男を驚かせるには十分だった。まさか自分の名前が出ると思っ

ていなかった一夏は、手を挙げた女子の方を向いた。その顔は驚きを隠さず、汗までかいている。

だが、手を挙げた女子はそんな一夏の心境など無視して笑顔でこちらに手を振っている。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「先生っ！ 私は時入くんを推薦します！」

「右に同じくです！」

嫌な予感はしていたのか、神楽は苦笑しながら女子の方を見る。目が合った瞬間、その女子は顔を赤くして目を逸らしてしまった。

「では時入神楽も候補者に決定。他はどうだ？」

流れるままに決定されてしまった一夏と神楽。当然そのまま引き下がる訳もなく、一夏は起立した。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないならこの二人の内、どちらかにやってもらうことになるが」

一夏が喋り出す前に、千冬は一夏を睨んで口を塞がせる。一夏はその鋭い眼光に一瞬硬直するが、それでも引き下がらなかった。

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った」

一夏の精一杯を、千冬は切り捨てる。

だが神楽の方も焦っているようで、手を挙げて発言する。

「織斑先生。私たちに拒否権は」

「ない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「……ですよね」

一刀両断。神楽も笑ってはいるが、口の端は痙攣している。

神楽の意見を一瞬で排除すると、千冬はもう一度教室を見渡す。どの女子も満足そうな表情であり、これ以上候補者はいないと判断

しかけた、その時だった。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

机に手の平を打ちつけ、席を立つ女子がいた。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットである。

彼女は一夏と神楽を一瞥すると、教壇の上で腕を組んでいる千冬に目をやる。千冬の眼力に対しても物怖じしないのは、さすがエリートといったところか。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

その言葉に、一夏の表情が変わっていく。先ほどの困惑した表情から、怒りの顔へと。

神楽は相変わらず苦笑。落ち着いているというより、最早呆れているのだろう。そして一夏の表情の変化に気付いたのか、やれやれと溜息をこぼす。

だがセシリアの話はまだ終わらないらしい。胸の上に右手を置き、左手を腰に添えて、いかにも「わたくし、威張ってます！」という体勢を作っていた。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サカスをする気は毛頭ございませんわ！」

セシリアはただ自分の気持ちに素直なのだろう。その言語一つ一つに迷いはない。だからこそ始末に悪いのだが。

先ほどから一夏表情が更に険しいものになっていく。神楽もそろそろまずいと思い出したのか、今まで読んでいたテキストを閉じる。今まで脳内個人授業をしていたらしい。どこまでもマイペースだ。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

ついに一夏が反撃してしまった。一夏は無意識に言ってしまったらしく、嫌な汗をかきながらフリーズ。そして恐る恐る後ろの席にいるセシリアへと顔を向ける。

そこには、顔を真っ赤にしたイギリス代表候補生がいた。

(あらまゝ……)。ゆでタコ様もびっくりですねアレは。あはははゝ)

硬直している一夏と、顔を赤くして怒りを露にしているセシリア。その二人を交互に見比べ、神楽は口を手で押さえて笑った。自分でもこの場面で笑っていいと思っていないが、一夏のあの「やっちまった」的な顔を見ると、何故か笑いがこみ上げてきてしまう。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

セシリアは机を手で叩き、その鋭い眼光を一夏に浴びせる。だが一夏もやってしまった事は仕方ないと覚悟を決めたのか、それを真正面から受けた。

「決闘ですわ!」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりもわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
いえ、奴隷にしますわよ。ついでに、そちらの男も!」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない。な？ 神楽」

（……ちよつと待ちなさい。先ほどから私は何も言っていないし、干渉もしていないのですよ。何故そこで二人して私の名前を出しますか？ しかも決定済みときましたね？）

セシリアは神楽を指差し、一夏はこちらに話しかけてくる。当然神楽は笑顔のまま硬直している。顔を汗が、それも滝のように流れていた。

ついでで奴隷にされたら嫌だなあと、神楽は心の中で呟く。

「ちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

セシリアはそんな神楽の心境などいざ知らず、勝手に話を進めている。一夏も一夏で神楽には触れず、腕を組んで何か考えている。

そして考えがまとまったのか、一夏がセシリアに声を掛けた。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいかなーと」

しばしの沈黙。

そして、教室の中は笑い声で溢れた。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

一夏は気付いた。彼女たちが言うように、今の男は女より弱い。それは肉体的という訳ではないが、ISを使えると使えないでは、既に天と地ほどの差が生まれてしまっている。

それに例え一夏がISを使用できるとしても、訓練すら受けた事もない。それに比べて、セシリアは本国でも厳しい訓練に耐えてきた“代表候補生”だ。ISを使った訓練も相当している筈。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

自分の発言が間違いだと悟った一夏は、悔しそうな顔でセシリアに言い直す。それを聞いたセシリアの顔には嘲笑が浮かび上がる。

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

一夏は黙り込んでいた。実際一夏は、IS同士の戦闘など過去の映像記録で少し見ただけ。姉である千冬は元日本代表IS操縦者ではあるが、本人は一夏や神楽にIS関係の事を教えなかった。

だから、代表候補生がどれだけの技量を持っているかなど、皆目見当もつかない。

「さて、織斑とオルコットの話し合いは済んだな。試合は一週間後

の月曜。放課後、第三アリーナで行う。だがその前に」

一夏とセシリアの試合を承諾した千冬だが、その目は突然神楽の方へと向く。ただでさえ一夏とセシリアの十字砲火を食らってダメージを負っている神楽だ。顔は笑っているが、実はもう半泣き状態である。

「神楽。お前もオルコットと戦え。そして勝った方が、織斑と戦うんだ」

「……あの、これまた拒否権は」

「ない。やれ」

「はい」

瞬殺。

笑ったまま泣けそうだと神楽は本気で思っていた。いや、心の中ではすでに小さな神楽が笑いながら号泣しているわけだが。

「時人とオルコットの試合は　　そうだな、三日後にしよう。ちようど放課後、第一アリーナが空いている。時人は今日の放課後、

訓練機の使用申請書を職員室まで書きに來い。いいな？」

「……………了解です……………」

「なお、オルコットと時入の試合は無観客試合とする。織斑に有利な情報が流れるのは面白くないのでな」

もう、どうにでもなれ。

心の中の小さな神樂は、自分の流した涙の海で溺れていた。

IS学園、学生寮。

その一室で、ある少女がシャワーを浴びていた。

「……………ふじ」

しののほのほ
篠ノ之箒。

今日このIS学園に入学した新入生の一人であり、一夏の幼なじみ。

そして、ISの生みの親、その妹である。

「六年ぶりか……。覚えていてくれたのだな、一夏……」

そう呟く筈は頬を紅潮させ、珍しく笑顔を形作る。

シャワーを浴びている彼女の身体は、とても魅力的だ。剣道で嫌えられたその身体に無駄はなく、そのスタイルはクラスの中でもトップクラスだろう。

そんな身体を温水が伝っている。その肌の色はどこか赤くなっていた。

「元気そうだったな……」

小学四年のある日、彼女は突然の移住を強要された。

理由は簡単、彼女の姉“篠ノ之束”^{しののたはね}が、世界初の第一世代IS“白騎士”^{しんし}を開発してしまったからである。それにより筈の生活は滅茶苦茶になり、一夏とも離れ離れになった。

だからだろうか。筈は束に対して、憎しみに近い感情を抱いている。

「……………」

だが、今この瞬間は、その憎しみも消えていた。

“IS”。それは確かに箒と一夏の繋がりを一度断ち切った。

だがその“IS”が、今度は箒と一夏を繋げてくれた。

この学園で一夏と再び巡り会えたのは、“IS”が存在していたからなのだ。

「ん？」

思考の最中、部屋のドアが開く音が浴室に届く。

誰か入ってきたのだろうか、箒はそう考えると、シャワールームを出て、洗面所兼脱衣所にあったバスタオルで濡れた身体を包む。

普段ならこんな格好で人前に出ない箒だが、このIS学園は女子校だ。教員や用務員も全て女性で成り立っている。もし誰か入ってきていても、同姓なら気遣う必要もない。

濡れた髪をもう一枚のバスタオルで覆い、脱衣所のドアに手をかける。部屋の奥にこのシャワールームは設置されており、脱衣所と部屋はドアで繋がっている。

「誰かいるのか？」

篤はそう言うと、ドアを開けてシャワー室を出た。そこには確かに、誰かがいるようだった。

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

入寮の際、学園側から「同居人がいる」という説明は受けていた。今までその事を篤は忘れていたようだ。この部屋に入ってすぐシャワーを浴びてしまったので、二つあるベッドや机を見落としていたらしい。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之

」

だが、彼女はある重大な事も忘れていた。

この“IS学園”が、今年から“女子校”でなくなってしまうという、最も大切な事柄の一つを。

「篤」

「……………」

頭を覆っていたバスタオルを手に持ち、箒は硬直していた。

目の前にいるのは、織斑一夏。先ほどシャワーを浴びながら考えていた人物、その人である。

「い、い、いちか……？」

「お、おう……」

短いやり取り。だがそれは、箒のフリーズした思考を復旧させるには十分だったのだろう。その顔が見る見る赤くなっていく。

そして箒は気付く。今の自分が、裸にバスタオルという最悪な格好だということ。

「っ……！？ み、見るな！」

「わ、悪い…」

一夏は箒に怒鳴られ、顔を横に向けた。だがその顔は赤い。見るところはしっかり見てしまっているらしい。

一生の不覚、そう筭は心の中で思った。だが今はそんな場合ではない。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる……？」

潤滑油が足りていない機械の如く、不自然な動きで一夏に問いかける。両腕で身体を隠してはいるが、逆にその行為で豊かな胸が強調されてしまっている。

「いや、俺もこの部屋なんだけど」

その言葉を聞いた瞬間、筭の中で何かが弾けた。その鍛え抜かれた両脚で地を蹴り一気に加速。部屋の壁に立てかけられていた自分の木刀を手にし、一夏の頭部へと狙いをつける。

「うおおっ!?!？」

その鬼気迫る筭を目にして、一夏も素早い動きを見せる。今までいた場所から一気に離れ、部屋を出るべくドアへと向かう。その後ろからは、木刀を持つ裸に近い格好の鬼が迫っていた。

一夏はどうにかドアに辿り着くと、部屋を出る。そしてそのまま背中ドアを押して閉めた。背中に痛みが走る。

「助かつ

」

ズドン！

助かっていなかった。

閉めた木製のドアに全体重を預けて休憩していた一夏だが、顔のそのすぐ隣に木刀の切っ先が出現した。

その切っ先は数秒で部屋の中へと吸い込まれていく。一夏は筭が諦めたのだらうと思い、溜息をつく。

ズドン！

「って、本気で殺す気か！ 今のかわさなかつたら死んでるぞ！」

その切っ先は再び現れた。しかも先ほどまで一夏の頭があった部分から突き出している。先の一撃で一夏の位置を把握したのだらう。その狙いにズレはない。

「……なになに？」

「あつ、織斑くんだ」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！ いい情報ゲット〜！」

騒音を聞きつけた女子たちが集まってくる。同じ寮にいるのだから、この音が聞こえない筈はない。

しかも、その女子たちは皆ラフな格好だ。明らかに下着が見えているような子までいる始末である。そんな女子に免疫のない一夏は顔を赤らめ、切っ先の飛び出ているドアへとへばり付く。

「……………箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。というか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

頭の上で本気の合掌。命からがら逃げてきた鬼の巣窟だが、今は唯一の防空壕。ただその中に入りたいという気持ちが一夏を支配していた。

その願いが通じたのか、切っ先が部屋の中へと戻っていき、そしてドアが開いた。そこには剣道着を身に纏った箒が仁王立ちしている。

「……………入れ」

のは、彼女の実家が神社だからだろうか。ちなみにその神社は剣術道場も兼ねている。

箒は顔を赤くし、一夏を見た。指をなにやらモジモジさせている。

「お、お、お……」

「お？」

「お前から、希望したのか……？ 私の部屋にしろと……」

恋する少女の顔をした箒。この発言もかなり勇気がある筈である。

だが、相手が悪い。

「そんな馬鹿な」

その発言を聞いた箒の顔は、鬼神のそれと変わる。未だ手元にあった木刀を手にすると、一夏の頭部めがけて一気に振り下ろす。

一夏はその攻撃を両手で受け止めた。真剣白刃取り状態である。

だが、その状態になっても箒は力を緩めない。むしろ木刀に体重を乗せて押し切ろうとしている。その顔は鬼神のままである。

「馬鹿……馬鹿だと？ そうかそうか……」

箒は本気で一夏を斬ろうとしていた。木刀ではあるが、この一撃は真剣の一太刀と同威力かもしれない。そんな考えが一夏の脳裏をよぎる。

「わあ……篠ノ之さん、大たーん」

「抜け駆けしちゃダメだよー」

「織斑くん総受けて言うのもいいわね……」

その地獄は、鍵の掛かっていなかったドアを開け、縦一列に顔を出している女子五名の声で終わりを告げた。その後ろから複数の声がかかるという事は、他の女子たちも廊下で聞き耳を立てているという事なのだろう。

しかし、縦一列に五つの頭が並んでいる風景は少し怖いものがある。というより、その女子たちの器用さに脱帽である。

「なっ、ななっ……！？」

いきなりの外野出現に驚く筈。一夏から離れ、口をパクパクと動かしている。一夏はそれを見て安心したのか、全てが抜けるような大きな溜息をついた。

「あれー？ 終わっちゃったー」

「いい感じだったのよねー」

外野がクスクスと笑っている。筈は顔を赤くしたまま外野が顔を出しているドアへと近づき、それを閉めた。今度はしっかり鍵も掛ける。先ほどの木刀による攻撃で、穴だらけではあるが。

その行動を見ていた一夏は、今度は殺されてしまうのではとビクビクしている。

「……一夏」

「はい、なんですか？」

「なんて顔をしているんだお前は……」

「？」

箒に声を掛けられ、一夏は何故か心が開放される気分だった。もう死ぬことを受け入れているかのような、そんな顔である。

その顔に気付いた箒は、また溜息。今日だけで何度溜息をついたのだろうか。

「まあいい。それで、今の状況についてだが

」

そう言っつて箒は話をまとめ始めた。現在の状況を、自分自身が再認識する為に。

数分後、箒と一夏は、状況把握は終えていた。

箒は機嫌の悪い顔を隠さず出しており、一夏は頭部をさすりながら涙目である。

理由は簡単、一夏が地雷を踏んだのだ。

部屋のシャワー使用時間から始まり、そしてトイレの話になった。元々IS学園は女子校のようなものであり、その寮であるココに“男子トイレ”は不要。つまり、男子トイレがないのである。それを知った一夏は、最悪女子トイレを使うという事を声に出してしまっ

た。

当然、箒は怒りだした。再び木刀をその手に召喚し、一夏に振り下ろす。だが一夏も学習したらしく、それを防御しようと箒の荷物であるうポストンバツクに刺さっていた竹刀を引き抜いた。

ここで問題が起きる。その竹刀にある布が絡まっていたのだ。それは俗に言う“ブラジャー”である。しかも複数。

箒は顔を赤くし、手に持っていた木刀をベッドに放り投げてそれを回収した。一夏はいきなり的事で状況認識を出来ないでいたが、少しずつ理解していったのか、真っ赤な顔で睨んでくる箒に、一夏はこう声を掛けてしまった。

「ブラジャー、付けるようになったんだな」

その直後、一夏の頭部を瞬速の一撃が捉えた。その結果が今の状況。完全な自滅である。

「痛い…マジで痛い……」

「ふんっ！」

箒はベッドに腰掛けながら、不機嫌全開である。一夏はそれを見て、溜息をつくしかなかった。

だが、ふと箒の表情が変わった。何かを思い出したような、そんな顔だ。

「……………一夏」

「なんだよ？」

声を掛けられた一夏は、頭をさすりながらベッドに腰を下ろす。丁度箒と向き合う状態になっていた。

箒は横に向けていた顔を正面に向け、一夏を見た。一夏はその顔が真剣なものであると悟り、表情を固くする。

「……………あの時入神楽は、私の知る“あの”時入神楽か？」

「……………やっぱり、気付くよな」

一夏は、その質問がいつか必ずくると思っていた。箒が時入神楽の“変化”に気付かない筈がない。何故なら“織斑一夏”と“篠ノ之箒”、そして“時入神楽”は

「当たり前だ。私たち三人は“幼なじみ”なのだから……………」

そう、幼なじみなのである。小学二年の頃からの、大切な。

(……………)

一夏は頭を抱えた。どう説明すべきか、それは本人からではなく、俺から説明していいのか。

そして、それを知った篤がどういう態度を取るのか、それが不安だった。

もう中学の時のような思いを、神楽にさせたくないから。

「一夏」

だがその思考は、篤の一言、そしてその表情で霧散した。

篤の顔は、そして瞳は真剣そのものだった。言葉にも力強い何か
が混じっている。その視線は、本気で友を心配するものでもあった。

(……………そうだよな。篤なら、大丈夫だ)

そう確信した一夏は、口を開く。時入神楽の変化、その理由を伝

えるために。

そして“時入神楽”という存在を、もう一度受け入れてもらうために。

「ふう……」

一人の少年が、寮の一室、そのベッドの上で寝転んでいた。

時入神楽。このIS学園に今日入学した、“男でISを使える”人物である。

「中学の時よりは楽でしたね。いや、そうでもないか……ハハハ……」

自嘲する神楽は、ふと部屋の中を寝転んだ状態のまま見渡した。

本来二人で生活するための部屋なのだから、当然広い。奥にはシヤワーもあり、一人一つの勉強机、小さなテーブルも備わっている。さすが日本政府直営の学園、使われている資金も半端ではない。

「しかし、まさか一夏と別の部屋とは……。そんなに部屋が余っているのでしょうか？ だとしたら、ものすごいお金の無駄遣いです

ねえ」

ベッドでくつろぎながら笑う。だがすぐに身を起こすと、部屋の隅に置かれていたポストンバックへと歩き出す。

一週間は自宅から通学してもらう、と政府から説明を受けていた神楽。だが今日になって突然の入寮である。本来ならこうして荷造りが出来ている筈はない。

実はこの荷物、織斑千冬が手配しておいてくれた物である。

放課後、セシリア・オルコットとの試合で使用する訓練機の使用申請書を書くべく職員室を訪ねた神楽。必要な書類を揃えて待っていてくれてた千冬のおかげで、その作業はスムーズに進んだ。

申請書の記入を済ませて職員室を出ようとする神楽だったが、そこで千冬に呼び止められ、この入寮を知ったのである。

「荷物は私が手配しておいた。まあ、生活必需品だけだな」

その言語通り、ポストンバックの中には衣服や携帯電話の充電器など、必要最低限の物しか入っていなかった。

「これだけあれば困りませんね……。あ、本が一冊も入っていない……………」

神楽にとって生活必需品である“書物”は、一冊も入っていない。神楽もがっかりしたのか、小さな溜息をつく。

その数秒の硬直時間を終え、神楽は衣服類を部屋に備え付けられていたクローゼットへと詰め込む。小物類もベッドの横にある小物入れへと収納した。

制服の上着をハンガーに掛ける。完全に着替える気はない。ワイシャツの裾をズボンから出し、そしてネクタイを緩めた。自室で堅苦しくする必要はないだろう。

小さな引越、完了。

そう呟くと、神楽は部屋の奥側にあるベッドへと腰掛け、窓の外を眺めた。外はすっかり暗くなっている。

「……………篠ノ之、第」

眼鏡を外しながら、神楽は呟いた。その鮮紅の瞳は、ただ外を眺めているだけ。なんの感情もないかのような、そんな瞳。

「もし彼女が“時入神楽”の関係者だった場合、また昔のような対応をすれば良いのでしょうか…。そうならない事を願いたいものです。それに、また一夏や千冬姉さんに怒られてしまう」

神楽にとって、一夏と千冬は家族のような存在だった。だからこそ、あまり迷惑は掛けたくない。

「難しいですね……」

クスリと笑う神楽。彼の表情は基本的に笑顔だが、やはり奥底にある感情は読めない。

「……やめましょう、この事を考えるのは。明後日の試合の方が厄介ですし」

篠ノ之箒の事を思考の片隅に置いた神楽は、千冬に渡された書類を鞆から出す。そこには第二世代IS“ラファール・リヴァイヴ”、そしてその武装に関するデータが記載されていた。

このISが、明後日の試合で神楽の使う訓練機である。フランス製のISとしては最も有名な機体であり、第二世代でありながら世界第三位のシェアを誇る名機。それがこのISだ。

訓練機としてこの学園にも複数機が配備されているらしい。だが機体数は多くないため、明後日を過ぎればしばらく使えない。他の学年が使用するからだ。

神楽が選んだ武装は、中距離戦を想定したものだ。六十一口径アサルトカノン“ガラム”二丁に、一応近接戦用ブレードも一振り量子変換してある。

「さてさて、これでどこまで太刀打ちできるか……。オルコットさんは代表候補生、つまりは最新型のE.S.を与えられている筈。対してこちらは第二世代、しかも操縦者である私は実戦経験なしのド素人これ、完璧に虐めの構図ですよ？ 千冬姉さん」

勝ち目はない、そう神楽は思っている。だが、やれるだけやってみたいという気持ちがない訳ではない。何でも実践あるのみだ。

「とりあえず、使えそうな技術テクニクでもテキストから探してみますか。戦闘機動にもいろいろあるでしょうし……」

ベッドから立ち上がると、鞆を持って勉強机へと向かう。

知識だけで勝てるとは思っていない。だが、知識がなければ何もできない。

だから、今は知識という力を磨いておこう。

いつの日か、その知識が最大の武器になると信じて。

神楽は真剣な眼差しで、テキストを読み漁った。

勝つために。

『過去』と『現在』

IS学園。日本政府が創設した、IS操縦者育成を目的とする国立高等学校。

その校舎の一室、生徒会室と書かれた部屋で、一人の生徒が“ある資料”を見ていた。

「織斑一夏くん……。それに、時入神楽くん……。か」

その資料を見ていた生徒は、当然女性だった。その少女が着ている制服、そのリボンの色は黄色であり、この学園の二年生である事を示している。

ISは女性にしか扱えないのだから、このIS学園に男子生徒がいる筈はない。

だが、その考えは昨日の入学式で覆された。二人の“男”が、この学園に入学したのである。

「入試会場にあったISを偶然起動させ、それを監督の教師に目撃された。そのまま政府へと連絡が行き、日本政府は二人を“保護”した……」

資料に書かれた項目を声に出して音読する。その顔には、うっすらと笑みが浮かんでいた。

「んふふ。今年は面白くなりそうね」

生徒会室、その奥にある一つの席。それは“生徒会長”のみが座る事を許される、至高の場所。

そこに座る少女は、やはり笑いながら手に持つ資料を捲っていく。

「ん？……んふん」

興味深い、というような声を出し、ある項目を目で追っていく。

それは、今年入学した“男でISを使える人物”の一人、時入神楽のデータだった。

「中学での成績は上の上、運動神経も抜群。運動部の助っ人として何度か大会にも出場。全校生徒からの支持は相当なもので、生徒会長に圧倒的票数で当選」

ハイスペックだった。頭脳明晰で運動神経も問題ない。生徒から

だけでなく、教員からの支持も十分。

しかし、少女の持つ資料には、まだ続きがあった。

「中学一年の頃、一部の生徒を一方的に拒絶。その後、その生徒たち数名が“彼”に暴行、怪我を負わせた。だがその事件が公になる事はなく、粛々と処理された」

それは、通常の“資料”ではなかった。粛々と処理された事件すら載っているのだ。おそらく、中学から送られてくる資料とは別物だろう。

「その後は特に問題なく、か」

資料を机の上に放り投げ、少女はクスリと笑いながら椅子に座ったまま薄青の髪を揺らし、赤い瞳を天井に向ける

「いいね、なんだか興味が出てきたよ……………。ふふっ」

暴行事件があったのなら、その後問題が起きない筈がない。この“時入神楽”という少年が、何か特別なアクションを起こしたのだろう。

そしてそれは、その暴行を加えた生徒たちに“首輪”を付けるだ

けの効力があるものだった。

資料にある時入神楽という少年の顔写真。その顔は優しそうな笑みを形作っていた。

しかし、椅子に座っている少女の目にはしっかりと映っていた。

彼の瞳の奥、その深淵を。

「時入神楽くん。そして、織斑一夏くん。さあ、これから一体どうなるかな？」

このIS学園の生徒会長、そして、このIS学園で“最強”という称号を持つ少女“更識楯無”さらしきたてなしは、天井を見上げたまま、小さな笑いを零していた。

朝七時。

まだ学園内に生徒の姿はあまりない。いるとしても、それは部活の朝練組ぐらいだろう。そんな時間帯だ。

「ふふふん」

その学園の校舎内にある図書室、その受付席で本を読む一人の少女がいた。リボンの色から二年生と判断できるその少女は、図書委員の朝当番としてここにいる。

IS学園の図書室、その蔵書量はかなりのものだろう。広い空間一杯に配置された本棚には、様々な国の書籍が所狭しと並んでいる。

IS学園だけに、IS関係の技術書類も保管されている。当然、機密に関わるものはないようだが、それでも相当貴重なものも並べられているようだ。

「朝はいいな。気持ちいいし、静かだし。やっぱり読書はこういう空間でしたいものよね。」

金髪のショートカットに、少し青の入った瞳。少なくとも日本人ではないだろう。そんな図書委員の少女は、理想の読書タイムを満喫していた。

「そもそも、昨日が騒がし過ぎたのよ！ まあ確かに、男子二人が入学したとなれば分からなくもないけどさ……。」

昨日はこの学園の入学式だった訳だが、今年のそれは特別なものだった。ニュースで話題になった“男でISを起動できる”という二人が、二人揃ってこのIS学園に入学したのである。

それを知った各学年、各クラスの女子たちは、その二人がいる一年一組の教室へと偵察兵を放ち、情報収集に勤しんだ。

そのおかげか、昨日一日はまるでお祭り騒ぎのようだったのだ。落ち着いて本を読む事すらままならない。

「でも、さすがに今日は静かでしょ。毎日アレじゃあ、さすがにね」

この図書委員の少女も、一応男子二名に興味はある。偵察に赴いたクラスメイトから情報もしっかり仕入れている。そこは年頃の少女である。

「さて、続き続きと」

図書委員の少女は手に持っていた小説を読み出す。既に半分ほど読み終えており、今日中には読み終えたいと考えていた。じゃないと、以前買った本に手を出せないからだ。一冊読み終えたら新しい本へ、というのがこの少女のスタンスらしい。

そして、少女の読書タイムが始まるうとした、その時。

早朝の図書室に、まさかの異音が鳴り響いた。

バターン!!

「え?!」

それは、図書室のドアが開けられた音だった。

だが、その音に少女は困惑する。

(ちょっと! この図書室のドアって自動だよ?! 何今の「バターン」って!?)

そう、この図書室のドアは自動だ。本来人感センサーが働き、人がドアの前に近づくだけで開くようになっていて。なのに、今の音は明らかに人力で開けられた音だ。

少女は焦りながら受付席から入り口のドアを見た。受付から入り口まではさほど遠くない。少女の目でも、そこに誰がいるのかは十分確認できた。

「……………え?」

入り口にいる人物を確認した少女は硬直した。確かに確認できたのだが、その人物があまりにも意外だったのだ。

だが、その顔がいきなり驚きの表情を作り出した。

(え？　なんでこっちに来るの?!)

突然、神楽が受付に向かってきたのである。まさかの事態に混乱する少女だが、それに構う事なく神楽は足を動かし続ける。

この図書委員の少女は、男に対する免疫が殆どない。小学校は共学だが、中学は女子校だったのだ。しかも“本が好き”という性格上、外に出るといふ事もあまりしていなかった。

「あの、すみません。少々お聞きしたい事があるのですが……」

「ひ、ひゃい!!　なんででしょうか?!?!」

受付に着いた神楽は、そこで混乱し続けていた少女に声を掛けた。声を掛けられた少女は少女で、声が完璧に裏返っている。

「ISSの技術書や教本などを探しているのですが、どの辺りにありますか？」

「あ、はい!　少々お待ち下さい!」

裏返った声ではないが、それでも緊張はしているらしい。声の音量がいつもよりかなり大きくなっている。神楽も目の前の少女が動揺している事に気付いてはいるようだが、あまり深く突っ込まないようだ。

受付席に備えられた端末で検索をかける少女は、チラリと神楽の方に目をやる。

前に織斑一夏の写真を見た少女は、目の前にいる男子の制服が織斑一夏の物と異なるという事に気付いた。上着のデザインが違うのだ。彼はネクタイをしているため、襟の部分が女子の制服と類似している。裾も長くされており、全体的にコートのような形状だ。この学園の制服はカスタム自由という特殊な物だが、それは男性用にも適用されるらしい。

「……………」

「……………」

少女の視線に気付いた神楽は小首を傾げる。気付かれた少女は顔を赤らめて視線を逸らした。なんとも微笑ましい光景である。

「……………」
「……………」
「……………」

顔を赤らめたまま、神楽に保管場所を説明する少女。先ほどに比べれば顔の赤らみも薄くなっているようだ。

「なるほど……。ありがとうございます」

「い、いえ……」

説明を理解した神楽は、端末が示していた場所へと向かう。笑顔でお礼を言われた少女は少女で、手を軽く振って見送っていた。というか、その状態のまま再硬直していた。

「……………いい」

何がだろつか。それは、顔を赤らめてうつすら笑みを浮かべているこの少女にしか分からない。

入学二日目、その二時間目。

神楽は教科書を読みながら、脳内で様々な事を考えていた。

(……やはり、相手が近接戦型の方がやりやすい。が、もし遠距離戦型だった場合、一番厄介だ。近接戦型ならこちらの射程内に勝手に入ってくる。攻撃を避けつつ、こちらの攻撃を当てればいい。でも遠距離戦型は射程外から攻撃してくる。当たり前だ、相手の獲物の方が射程距離は長いのだから……)

明日に控えたセシリア・オルコットとの試合。その試合の為に、予行練習を頭の中でやっているようだ。

(その遠距離戦型が鈍足なら、ラファールの速度で追いつけるなら被弾覚悟で近づけばいい。でも、相手のスピードが一枚上手だったら完全に勝られる)

今朝読んだISの技術書と教本。ある程度の知識は得ることが出来たが、その知識によって生み出された答えは、やはり喜ばしいものではなかった。

セシリア・オルコット、彼女はイギリス代表候補生だ。資料を見た限り、彼女のような存在には“試験機”に近いISを与えられる事が多いらしい。つまり、相手が現行最新鋭である“第三世代IS”を所有している可能性が極めて高いのだ。

世代が全てを決める訳ではないだろう。それらは操縦者次第で幾らでも覆る。だが覆すだけの“技量”を、神楽は有していない。

(……はあ)

頭を抱える。だが、こうした行為をしながらでも神楽は授業内容をしっかりと理解していた。彼の特技のようなもので、複数の物事を効率よく処理出来るのだ。中学で生徒会長をしていた時は、かなり役立っていた。

「という訳で、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これは心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ

授業を行っているのは山田真那だった。教室の後ろには織斑千冬も控えているようだが、山田先生の授業に口出しする事は殆どない。山田先生の思考が暴走し、授業が脱線しそうになった時に咳払いをする程度だ。

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中を弄られているみたいでちょっと怖いんですけども……」

山田先生の説明を聞いていた生徒の一人が、手を挙げて質問した。その質問内容に同意したのか、何人かの生徒は頷き、山田先生へと目を向けている。

山田先生は「うん」と首を傾げている。何かいい例えがないか考えているようだ。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはいないわけです。もちろん、自分に合ったサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが

」

そこまで言っつて、山田先生は固まった。目の前で説明を聞いていた“男”、織斑一夏が存在に気付いたのだらう。一夏を見た直後に山田先生は窓際最後尾の席へと目を向ける。当然そこに居るのも“男”である時入神楽、彼も乾いた笑いで山田先生の視線に答えていた。

「え、えっと、いや、その、お、織斑君や時入君はしていませんよね。わ、分からないですよ、この例え、あは、あははは……」

山田先生の誤魔化し笑いが響く教室内。女子の殆どが腕組をする振りをして、自分の胸を隠していた。

（いや、分からなくもないんですけどね。一応、知識としては知っていますし……）

そんな事を考えながら、女子の微妙な視線の対応に困る神楽。一夏もこの空気は落ち着かないようで、神楽の方へと視線を向けてい

た。神楽はその視線をスルーしているようだが。

「んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

その微妙な空気を破壊したのは、教室の後ろに待機していた織斑千冬だった。それに驚いた山田先生は教科書を落としそうになったが、なんとかそれを回避し、授業を再開する。

「そ、それともう一つ大事な事は、ISにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話 つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています。それによって相互的に理解し、より性能を引き出せる事になる訳です。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

神楽はその説明を聞きつつ、前もって学習しておいた知識と照らし合わせた。

（ISの意識……ですか。様々な書物を漁りましたが、こればかりはよく分かりませんでしたね。ISのコア、その存在そのものが完全な“ブラック・ボックス”なのですから、仕方ないと言えば仕方ないのでしょうか……。これを開発した“篠ノ之束”という人は、

本当にすごい)

神楽は目だけを一夏と同じ最前列にいる一人の少女、篠ノ之箒へと向けた。

(篠ノ之箒……。彼女は篠ノ之博士の関係者なのではよか?)

頭に浮かんだ小さな疑問だが、今は必要のない知識だ。神楽はその考えを一時的に退かし、山田先生の授業を聞きつつ、脳内シミュレーションを再開した。

「先生、それって彼氏彼女のような感じですかー?」

「そ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないので分かりませんが……」

一人の女子が投げかけた質問を聞き、赤面して俯く山田先生。この雰囲気はさながら“女子校”である。俯く山田先生を尻目に、クラス的女子たちは男女関係についての雑談を開始していた。

(……確か第三世代ISには、特殊な兵器が装備されているのではたね。その場合の対処方法としては……)

だが神楽はその会話を流しつつ、脳内演習を続けている。

そんな中、授業の終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

「あつ。えっと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

山田先生は顔を少し赤らめたまま、教科書をまとめて教室を出て行く。IS学園の休憩時間は十五分と少し長めではあるが、こうしてイチイチ職員室まで戻らなければならないというのは、少々面倒だ。

「ISの空中制動、ですか。今の状況では有り難い……」

様々な資料を見てある程度の知識を得ているとはいえ、所詮それは“文章”としてまとめられたものだ。実際に動かした事のある人の説明よりも、やはり鮮度は落ちてしまう。

「神楽、助けてくれ……」

一夏がよろめきながら神楽の席へとやって来た。相変わらず、授業の内容についていけないようだ。

「一夏……、織斑先生に再発行してもらったアレ、ちゃんと読みました？」

“アレ”とは、電話帳三冊分の厚さを誇るIS学園入学前教材の事である。昨日のうちに千冬が一夏に渡している筈である。

「単語を覚えても、理屈が全然分からない……」

単語だけでも膨大な量だが、その根本まで理解するにはやはり時間が掛かるのだろう。この学園に入学した女子の大半は、中学の段階でそういった知識を学んでいるらしい。

「ねえねえ、織斑くんに時入くんさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

そんなグロッキーな一夏と、その一夏を見て溜息をついていた神楽の元到大勢の女子が殺到する。入学二日目という事もあって、神楽たちに話しかける決意が出来たらしい。

「いや、一度に訊かれても」

一夏は困ったように呟く。神楽はそれを見て苦笑すると、おもむろに顔を横へと向ける。

そこに、何かの整理券を配っている女子がいた。神楽と目が合ったその女子は、満面の笑みで親指を立てる。

「繁盛してますか？」

「ばっちり!!」

「それは良かった」

入学二日目。神楽はこのクラスの女子たちの対応を会得していた。笑顔で女子の即答をスルーできる程に。

そんなやり取りをしている中、一夏は女子たちの質問の波に飲まれていた。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!？」

「え。案外だらしな」

目を輝かせて質問してくる女子。その質問に答えようとする一夏だが、その瞬間、彼の後ろに一つの影が浮かび上がる。

パン！

そんな音と共に。

「痛っ！！」

「休み時間は終わりだ。散れ」

その影は、このクラスの女王にして担任である織斑千冬だった。その手に持つ出席簿から放たれる一撃は、脳細胞五千個を死に追いやる威力を持つとされている。

（一夏曰く、対喧しい奴用戦略兵器……でしたかねえ）

そんな核兵器を落とされた一夏は、その爆心地である頭を摩っている。その状況を見ていた女子たちは、顔色を変えて自分の席へと戻っていった。当然、先ほど商売をしていた女子もである。

千冬はそれを見て一つ溜息をつく。

「全く……。このクラスは本当に喧しいな」

そう呟くと、自分の近くで未だ頭を摩る自分の弟と、その隣で苦笑している弟のような存在に目を向けた。

「織斑、それと時入。お前たちのISだが準備まで時間が掛かる」

「へ？」

「は？」

千冬の突然の一言に、一夏と神楽は気の抜けた声を漏らした。一夏は先ほど受けた一撃の痛みを忘れてしまっているらしく、今まで摩っていた手が止まっている。

「明日時入が使用する訓練機だが、それも明日だけだ。それ以降、お前たちの機体は用意できない。だから、少し待て。学園側で新たに専用機を用意するそうだ」

教室内が一気に静まる。状況を理解していない一夏はただ硬直しているだけだが、千冬の言葉、その全てを理解した神楽は、専用機提供の理由を考え始めていた。

そして、黙っていた女子たちのテンションが、一気に頂点へと達した。

「専用機！？ 一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって政府からの支援が出てるって事で……」

「ああ……。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

騒ぎ出す女子。一夏は女子たちの突然の反応に驚き、目を白黒させている。完璧に状況を理解していないようだ。

「織斑。教科書六ページ、音読しろ」

「え、えーと……」

現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現

在世界中にあるIS四百六十七機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作る事を拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引する事はアラスカ条約第七項に抵触し、全ての状況下で禁止されています

「つまりそういう事だ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前たちの場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意される事になった。理解できたか、織斑？」

「な、なんとなく……。あれ？俺だけ？」

「君だけです」

神楽は笑顔で言い放つ。説明の対象が自分一人だったという事に少なからずショックを受けた一夏は、自分と神楽の間にある壁を再認識して頂垂れていた。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なのでしょうか……？」

一人の女子が手を挙げ、千冬に向かって口を開く。

今まで専用機の話で夢中になっていたクラスの女子たちだが、その質問が出た瞬間、殆どの視線が千冬へと向かう。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

その瞬間、再びテンション最高潮である。授業中にも関わらず、クラスの女子たちは篝の元へと群がり始めた。おそらく、先ほど一夏たちが受けた質問の波状攻撃を敢行するつもりだろう。

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ」

どうやらこのクラスの女子は、こうした情報を餌にして元気を得ているらしい。中にはメモ帳を取り出して篝の発言を待っている女子までいる始末だ。

(ああ……、これは何か不味いのでは？)

一夏とその様子を見ていた神楽は、篝の顔色が変わっていくのを見逃さなかった。机にしている手も、先ほどから握り締められている。

「あの人は関係ない！」

数秒後、神楽が予想していた通りの事態が起きた。篝の大きな声が、教室の中を一瞬にして支配したのだ。篝を取り囲んでいた女子全員が呆然とその場で固まり、神楽の隣にいる一夏も硬直している。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるような事は何もない」

視線を少しだけクラスの女子たちに向け、謝罪の言葉を述べる。だが、その行動が終われば視線は窓の外へと移ってしまった。彼女の席は窓際最前列、顔を左に向ければ、その先には誰もいない。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

篝の態度が気になる山田先生ではあるが、気持ちを切り替えて授業を始める。

(あ、いたんですね、山田先生)

そんな失礼な事を思った神楽も自分の席へと戻り、自分の教科書を広げ始めた。

いつの間にか、昼休みになっていた。

神楽は頭の片隅で明日の試合に向けて脳内演習を繰り返していた。授業中もひたすら。

数分前、その試合の相手であるセシリア・オルコットが神楽の元を訪れて、いつもの偉いぞオーラ全開スタイルで一言告げていった。

「明日は手加減して差し上げますわ!」

その一言は教室内を駆け巡った。クラスの女子たちは「当然か」と納得してしまっていたようだが、一夏の反応は違った。いつもより険しい顔でセシリアに近づき、何かを言おうとした。

だが、それを神楽は止めた。そしてセシリアに一言、こう告げたのだ。

「ありがとうございます」

その一言にセシリアは驚き、そして一夏も驚いていた。だが神楽本人はいつもの笑顔を崩しておらず、また読書へと戻ってしまった。

セシリアは何か言いたそうだったが、言葉がうまく見つからなかったのか、少し不機嫌そうに教室を出て行った。一夏も神楽に声を掛けようとしたが、それを察知した神楽に笑顔を向けられ、苦笑して何処かへ行ってしまった。

そんな数分前の一幕。

神楽は脳内演習と教科書にあるIS基本動作、基本技術の照らし合わせが一段落すると、教科書を机の中へと収め、席に座ったまま背伸びをする。朝からひたすら本を読んでいた為、体の節々が音を鳴らしていた。

「第」

「……………」

「篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ」

一夏の声に反応し、神楽は自分のいる列、その最前席へと目を向けた。そこには先ほどクラスメイトたちの質問に怒鳴ってしまった篠ノ之箒と、そんな箒に話しかける一夏の姿があった。

このクラスの中で、箒は少し浮いた存在になっていた。先ほど怒鳴ってしまったのも効いているのだろうが、それ以前に、彼女はクラスメイトの誰かが声を掛けても、最低限の返事しかしないのだ。

無愛想。この言葉が、篠ノ之箒という人物を表す最適なものになってしまっているようである。

「他に誰か一緒に行かない？」

「はいはいはいっ！」

「行くよー。ちょっと待ってー」

「お弁当作ってきてるけど行きますー！」

だが、そんな存在である箒も、一夏とセットならある程度は受け入れられているらしい。三人の女子が一夏の声に反応し、手を挙げている。

が、箒の顔は険しいままだった。一夏の方へ一度視線を送るが、それもすぐに逸らす。

「……私は、いい」

箒はそう告げると、窓の外へと顔を向けてしまう。

「まあそう言っな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいつ。私は行かないと　　う、腕を組むなっ！」

そんな箒を前にしても、一夏は動じなかった。箒の腕を無理やり掴み、そのままその腕と自分の腕を組む。完全に逃がす気がないようだ。

箒はそんな一夏の行動に顔を赤くする。他の女子から見れば、それはかなり羨ましい光景だろう。一夏本人は全く気付いていないようだ。

「なんだよ歩きたくないのか？　おんぶしてやるっか？」

「な………！」

一夏の爆弾発言に、箒の顔は更に赤くなる。

困惑して動きが止まった筈。それをチャンスと見た一夏は、組んでいた腕を力強く引き寄せる。このまま学生食堂まで連行するつもりなのだろう。

「は、離せっ！」

「学食に着いたらな」

「い、今離せ！ ええいつ」

席を立たされた筈は、自分の言っているをスルーする一夏に対して実力行使に出た。

組まれていた腕に力を入れ、もう片方の腕で一夏の腕に力を加える。一夏は痛みで一瞬表情が曇るが、その瞬間で一夏は教室の冷たい床の上に投げ飛ばされる。

「ほう……。。合気道の一種でしょうか？」

それを見ていた神楽は、投げ飛ばした筈を見て、感嘆の声をあげた。

「痛つてえ……。腕上げたなあ」

「ふ、ふん。お前が弱くなったのではないか？　こんなものは剣術のおまけだ」

床の上で背中を摩りながら箒に目をやる一夏。その顔は笑っているが、結構痛いらしい。その目尻には、うっすらと涙が溜っている。

箒は内心、やりすぎたという感情はあるようだ。投げ飛ばした瞬間には「やってしまった」という顔をしていた。だが、どうも素直になれない。

「え、えーと……」

「私たちやつぱり……」

「え、遠慮しておくね……」

昼食に同行する予定だった女子三名は、箒の方をチラチラと見ながら後ずさっていく。“無愛想”だけでなく“凶暴”というタグも追加されてしまった。

一夏はそれを見て肩を落とす。一夏は箒の為にクラスメイトを食

事に誘ったのだろう。箒を受け入れてもらう為に。

制服に付いた埃を落としながら立ち上がると、箒を睨む。箒はそれを見て「私は悪くないぞ」と言いたげな顔でそっぽを向いた。

「箒」

「な、名前で呼ぶなど

」

「飯食いに行くぞ」

険しい表情のまま、一夏は箒の手を掴む。

箒は再び顔を赤くするが、まだ抵抗していた。手を掴まれている事もかなり恥ずかしいのか、振り解こうと必死だ。

だが、一夏はそんな箒の気持ちはいざ知らず、教室を出ようとドアへ向かう。

「お、おいつ。いい加減に

」

「黙ってついてこい」

「む……」

一夏の迫力に負けたのか、筭は観念した様子で引っ張られていく。顔は赤いままだが。

そんな中、一夏は何かに気付いたような仕草をして、もう一度教室内へと目を向けた。

「神楽ー！ 飯行こうぜ！」

「私ならここにいますよ？」

「うわっ！」

どうやら神楽の事を誘おうとしたらしい。神楽の席は、今一夏たちがいる位置からかなり遠い。一夏はそれを踏まえて声を大きくしたようだ。

その神楽本人は既に教室を出て、廊下で待機していたようだが、ついでに

「ていうか、その周りの人たち、誰だ？」

「はっはっはっはっは　　誰でしょうね？」

男子という餌に群がっていた、他のクラスの女子たちも一緒だった。

学食に着いた一夏、篝、神楽の三人は、食券を手にカウンターに並んでいた。既に多くの学生で賑わっており、座れる場所があるかも分からない。

「篝、何でもいいよな。何でも食うよなお前」

「ひ、人を犬猫のように言っな。私にも好みがある」

「ふーん。あ、日替わり二枚買ったからこれでいいよな。鯖の塩焼き定食だったよ」

「話を聞いているのか、お前は！」

「聞いてねえよ。俺がさっきまでどんだけ穏和に接してやっけると思ってたんだ馬鹿。台無しにしゃがって。お前、友達できなかったら

どうすんだよ。高校生活暗いとおまんないだろ」

「わ、私は別に……頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ」

先ほどから、一夏と箒はこんな感じである。教室での一件から、一夏はかなり機嫌が悪い。箒も箒で、素直になれていないようだった。

「一夏、早く注文しないと……。ついでに私の日替わりもお願いします」

「おう。おばちゃん、日替わり三つで。食券ここでいいんですよ？」

そんな二人を後ろから観察しているのは神楽だ。一夏と箒の会話を聞いて、常に笑っている。何が面白いのか分からないが、この表情が彼のデフォルトのようだ。

箒の顔は未だ赤い。それもその筈、一夏の左手が箒の手を未だに掴んでいるのだ。逃亡阻止の為だろうが、これは箒にとってかなり恥ずかしい。

「いいか？ 頼まれたからって俺はこんな事、普通しないぞ？ 箒だからしてるんだぞ」

「な、なんだそれは……」

「なんだもなにもあるか。おばさんたちには世話になったし、幼なじみで同門なんだ。これくらいのお節介はやらせる」

「……………」

一夏と箒。うまくかみ合っていないように見える二人だが、これはこれでバランスが取れているのだろう。それが神楽の見解だった。

その時、箒が目を一夏に向ける。決心がついたのか、何か告げようと口を開く。

「そ、その……ありがとう」

「はい、日替わり三つお待ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、美味そつだ」

「美味そうじゃないよ、美味いんだよ」

タイミングが悪かった。

箒は一夏に礼を言おうとしたようだが、それは鯖の塩焼き定食によって阻まれた。

「……篠ノ之さん、そんなに塩焼き定食を睨まなくても」

「……………」

「箒、テーブルどっか空いてるか？」

「……………」

箒は一夏に握られていた手を振り解くと、定食を受け取り、不機嫌そうな顔を隠そうともせず、スカズカと空いているテーブルへと歩いて行く。

それを見て、一夏と神楽は肩を竦める。

「面白い人ですね、彼女」

「……いや、面白くはないだろ」

そんな会話をしながら、一夏と神楽は箒の後を追う。テーブルに向かう途中、学食にいる女子のほぼ全員が彼らに目を向けていた。一夏はまだ慣れないようで、極力周りに目を向けないようにしている。神楽は定食を右手に持ちつつ、ポケットから取り出した本を読んでいた。歩きながらの読書は神楽の日課であり、障害物にぶつかるといふ事は殆どない。

少し歩くと、既に箒はテーブルに着いていた。その右隣に一夏が座り、左隣に神楽が座る。

「……………じゅる」

そんな音がしたのを、神楽は聞き逃さない。音がした方向を見ると、女子が涎を垂らしながらこちらを見ていた。よく見ると、他にも同じ状態の生徒が見受けられた。

「羨ましい……………」

この学園に二人しかいない男子を、箒は一人で独占しているのだ。そう思う女子もいるだろう。箒にそんな感情はないようだ。

「そついやさあ」

「……なんだ」

会話を切り出したのは一夏だった。鯖の身をほぐしながら箒に声を掛ける。

対する箒は味噌汁を飲みながら返事をする。まだ不機嫌そうだが、それでもまだいい方だろう。こうして一夏の声に反応しているのだから。

「ISの事、教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

「それをなんとか、頼むっ」

箒の冷たい言葉に負けず、一夏は箒に手を合わせて懇願する。が、箒はそれを無視して、ほうれん草のお浸しを啄んでいた。

「いや、私なんて明日ですよ？ そもそも私は何もしていないの

に、いつの間にかオルコットさんと試合をする事になってましたしね。」

「……神楽、お前もしかして怒って」

「自分で考えなさい」

「すまん。すみません。ごめんなさい」

神楽はいつもの笑顔で鯖を食していた。時折「あ、美味しい」と言っているが、その身から滲み出ているオーラは明らかに黒い。それも空間が歪むほどに。

一夏はそれを見て、冷や汗をかきながら平謝り。神楽を怒らせるかどうか、それを知っているからこそその対応だった。

「ねえ。噂の男子って、君たちでしょ？」

神楽のオーラにビクビクしている一夏に、突然話しかけてくる女子がいた。制服のリボン、その色は赤。つまり三年生を表す。くせ毛なのか、少し外側に跳ねている髪が特徴だ。三年だけあって、雰囲気は大人びている。

「あ、多分そうだと思います」

神楽が箸を止めて対応する。それを見た三年の女子は笑顔になり、神楽の隣に座る。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」

「ええ、本当です」

会話中、神楽は黒い視線を一夏に向ける。その視線を感じ取った一夏は「ビクッ」と肩を震わせていた。

その行動に若干疑問を抱く先輩だが、気に留める事なく話を続けた。

「でも君たち、素人だよな？ IS稼働時間いくつくらい？」

「そうですね……二十分程度ではないかと」

「それじゃあ無理よ。ISって稼働時間がものを言うの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？ だったら軽く三百時間はやってるわよ」

稼働時間云々と言われて理解できるのは、箒と神楽だけだろう。
一夏は理解できておらず、引き攣った笑みを浮かべている。

「でさ、私が教えてあげよっか？ ISについて」

先輩は神楽に顔を寄せて提案してきた。神楽は少し唸りながら考え始める。だが、一夏は余り考えずに反応した。

「はい、是非」

「結構です。私が教える事になっていますので」

そんな一夏の言葉を、箒が断ち切る。手にある箸は鯖を解体しているが、その迫力は相当なものだ。

「あなたも一年でしょ？ 私の方がうまく教えられると思うなあ」

先輩の目が箒へと向く。そして箒のリボンの色を見て、余裕の笑みを浮かべていた。

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」

「篠ノ之つて

ええ!？」

だが、箒が躊躇いながら口にした言葉、それを聞いた瞬間、先輩の余裕は消えた。篠ノ之束の名前は、それだけの威力を誇る。しかもその血縁者ともなればその威力は数倍になる。

「ですので、結構です」

箒はそう言うつと食事を再開し、先輩はしびしび立ち去っていった。

それを見た一夏は、少し驚いた表情で箒へと目を向ける。それに気付いた箒は箸を止め、一夏を睨む。

「なんだ？」

「なんだつて……いや、教えてくれるのか？」

「そう言っている」

それを聞いた一夏は、少し嬉しそうな顔をした。問題の一つが解決したからだろう。後は訓練あるのみである。

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。一度、腕が鈍ってないか見てやる」

「いや、俺はISの事を」

「見てやる」

「……わかったよ」

一夏の表情が一瞬で曇る。ISの訓練に入る前に、かなり面倒な壁があるようだ。

「そちらの話は終わったようですね」

だが何故だろう。一夏よりも危険な状況に追い込まれている神楽は、いつもの笑顔をキープしていた。彼の試合は、もう明日だと言うのに。

「ていうか、お前は大丈夫なのか？ 試合、明日なんだろ」

一夏はその疑問を解消すべく、神楽に質問を投げかけた。

だが、神楽の回答は、一夏の想像しているものとは違った。

「私は、勝つ気なんてありません」

「は？」

そう、彼はもう諦めているのだ。

「当然、何もせずに負ける気はありませんよ。ただ、勝つ気はありません。先に得ておいた知識、それを実践し検証する為の試合。その程度とを考えてください」

そこまで言うと、神楽は食事を再開した。笑顔のまま。

呆然とする一夏。だが、一夏と神楽に挟まれる形で座っている筈の表情は、みるみる険しくなっていく。

「まあ、勉強すれば勝てるかもと入学初日は思いましたけどね。知識を得ていくにつれ、勝つ自信なんてなくなりました。先ほど先輩が仰ったように、あちらは既にベテラン、こちらはドが三つ付くような素人。勝てる訳が」

「ふざけるなっ!!」

箒が突然、席を立ち怒鳴る。一夏は箒の行動に驚くが、それは神楽も同じようだ。食事の手が止まり、見開いた目が箒を見ている。

「勝つ気がないだと？ 勝てる訳がないだと？ 何をふざけた事を言っている!!」

神楽の襟首を掴み、自分の顔に引き寄せる。神楽はフリーズ状態から既に脱しており、いつもの笑顔に戻っていた。

「ふざけてませんよ。これが真実であり事実です。覆しようがありません」

「何か出来るだろう！ お前は頭が良いのだろう!!」

「頭が良いだけで、IS戦闘は強くなれない。それは貴女も知っている筈ですよ。篠ノ之束博士の妹さん？」

「お前はっ!」

神楽の言っている事は全て本当の事だ。ISは頭が良いだけで上手く扱える訳ではない。そして、身体能力が高いからといって、ISで速く動ける訳ではない。それは、この学園で学ぶ事以前の問題だ。

神楽は相変わらず笑顔だった。

どんな事もすぐに受け入れ、それに抗おうともしない。

力があっても、何もしようせず、ただ諦観しているだけ。

「お前は昔からそうだ!! 出来るクセにやるうともせず、ただ周りに合わせているだけだっ!!」

その言葉を聞いた神楽の表情が、突如変貌した。

今までの笑顔から、何も無い表情へと変わったのだ。

そして筈は気付く。自分が“神楽の昔”を語ってしまったという事に。

「……一つだけ確認します。私と貴女は、この学園で初めて会った

それに間違いありませんか？」

「っ！」

その声は、ただ冷たかった。今までの暖かな声とは正反対の、そんな声。

「間違いありませんか？ 篠ノ之箒」

「ま、間違いな」

「違いますね……。知っているでしょう？ 私の前で“嘘はつけない”という事を」

襟首を掴んでいた箒の手を神楽が振り解く。乱れた服装を整え始める神楽を見て、一夏は昔の神楽を思い出す。

（駄目だ……。これじゃあ、中学の時と同じじゃないか!!）

数年前の神楽を思い出し、それを振り払おうと頭を振る一夏。

そんな一夏を見て神楽は溜息を一つ。そして、箒へとその赤い瞳

を向けた。

「知っていますよね？ “時入神楽”を」

「わ、私は」

「知っていますよね？ 私の“能力”を」

「私は、ただ」

「知っていますよね？ 私の“過去”を」

「か、過去……」

「知っていますよね？ あの“事故”の事を」

神楽が無表情で続けている。箒もその豹変に驚いたのか、言葉が続かない。箒の隣にいる一夏の顔にも、緊張と発汗が見られた。

そんな二人に構う事なく、神楽は口を動かし続けた。

「知っていますよね？ 私が」

周りにいた筈の女子たちは、いつの間にか消えていた。それを確認して、神楽は告げた。

「過去の“記憶”を、失っているという事を……」

神楽はただ、淡々と語っていた。

それは、過去の自分を知る者への配慮ではなく

ただの、警告だった。

第四話 蒼き雫、疾風の再誕

ああ、めんどくさい。

小学校にある一室、その名は職員室。

教育機関なら、この部屋の名前を見る事が多いだろう。

未来の人材を育成する為の、そして、優れた“大人”を生む為、この機関は存在している。

「ですからっ！ “あの子”が私の子供を殴ったんです！！」

その職員室の一角、一つの机を囲んで座っているのは、三人の大人と、二人の子供。

一人の子供は顔に大きなガーゼをテープで固定し、その隣には大人の女性が付き添っている。

その反対側に座っているのは、もう一人の子供。その顔に怪我はない。あるのは、面倒という単語を具現化したような表情だけだ。

そして、その隣にいるのは、一人の女性。

隣に座っている子供と同じ黒い髪、整った顔。それを見る限り、二人が親族という可能性は高い。

その四人の間で困ったような顔をしている男性は、この小学校の教師だろう。先ほどから一方的に言霊を撃ち出す女性に目を向け、どう対処すべきか、そして、この女性をどう納得させようか考えているようだ。

ここで一つ、訂正をしておく。

この机を囲っているのは三人の大人と、二人の子供。

これは間違っている。

正確には“二人の大人”と“三人の子供”だ。

「 申し訳ありませんでした」

そう頭を下げているのは、怪我をしていない少年の隣に座っていた“少女”だった。

この近所にある中学、その生徒が着用している制服を身に纏っている。

この少女“織斑千冬”は、まだ中学生だ。今回起きた子供同士の

喧嘩で、相手の顔を殴ってしまった少年“織斑一夏”の姉である。

「謝れば済むと思ってるの？ この子の怪我が治ると思ってるの！？」

頭を下げている千冬に向かって、被害者側の母親はただただ罵声を浴びせる。

「そもそも、何故“子供”がここにいるのよ！ 私が呼んだのは、その子の“保護者”なのよ！？」

「お、落ち着いてください。先ほども説明しましたが、織斑くんのご両親は」

母親に一夏と千冬の両親の事を説明する教師だが、その説明は母親の耳に届いていない。

「親じゃなくても、後見人ぐらいはいるでしょう！ 私をからかっているの！？」

「んんん。」

大声で怒鳴り続ける物体を見て、一夏は溜息を一つ。

だが、この行為もまた、相手の母親を興奮させる要因になってしまっ

「ちょっと！ あなた反省してないでしょう!？」

「……………すみませんでした」

少年の気が抜けた声で紡ぐ、気の抜けた謝罪。

それを聞いた母親は、遂に限界へと達した。

「もういいわ!! そちらがその気なら、私も容赦しません!!
警察へ連絡させてもらいます!!」

「それはお待ち下さい!! ほら、織斑! ちゃんと謝れ!!」

母親の行動に不味いと感じたのか、教師は一夏に再度謝罪を要求した。

だが、一夏はその要求に応えようとはしない。

俺は、間違った事をしていない。

そもそも、この事件の原因は相手なのだ。

何故、謝らなければならない。

何故、千冬姉が謝らなければならない。

一夏は、そう心の中で呟いた。

放課後、一夏は教室の掃除をしていた。

本来数名のクラスメイトと共同でやるこの作業、今日の参加者は、たったの二人。

一夏と、もう一人のクラスメイトだけ。

そのクラスメイトの名は“篠ノ之箒”。

一夏が現在通っている剣術道場の娘にして、同門でもある少女。

そして、今朝の朝練でも胴への一撃で一夏を沈めた張本人である。

(あーくそー……。勝てねえかなあ……。勝ちてえなあ……。)

そう考えながら掃除を続ける一夏。視線を篠ノ之箒へと向ければ、そこには無表情で掃除を続ける箒の姿があつた。

だが、気付いた時には既に、箒を三人の男子が囲んでいた。

「おい、男女。今日は木刀持ってないのかよ」

「……竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな」

「……………」

「喋り方も変だもんな」

それは、陰険な虐めだった。

一人の少女に対して、三人で罵声を浴びせる男子。

少女はその男子たちの言葉に反応する事なく、掃除を続ける。

男子たちはそれを見て面白がり、更に罵声を浴びせる。

その行為を、一夏は見過ごせなかった。

「……うつせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ?」

そうして、一夏は男子たちを止めに入った。

しかし、相手はそれすら面白がり、一夏の事をも馬鹿にした。

「へっ。真面目に掃除なんかしてよー。バツカじゃねーの。おわっ!?!?」

だからこそ、箒は我慢する事が出来なかったのだろう。

一夏を馬鹿にした男子の胸ぐらを掴み、その男子を睨みつける。

「真面目にする事の何が馬鹿だ? お前らのような輩よりは遥かにマシだ」

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」

一夏を庇う形となったその反撃。締め上げられている男子が必死にもがくも、日々の鍛錬を欠かしていない筈の前では、その抵抗も無駄だった。

だが、その一人を除いた残りの男子二名の顔は、先ほどよりもにやついている。

「あー、やつぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチヤイチャしてるんだろ」

朝からイチヤイチャ、というのは、おそらく朝練の事だろう。こうついた事を言われる事自体は珍しくない。一夏も既に慣れてしまっている。

それ以前に、一夏は本物の“夫婦”を知らない。両親に捨てられたのだから、それは当然だろう。つまり、一夏にこの手の嫌がらせは全く通用しない。

一夏がそんな事を考えているその瞬間も、男子たちは一夏と筈を指さして笑っていた。筈に締め上げられていた男子も解放されたようだ。だが、そんな事にめげる事なく、その男子も他の二人と同様、笑っていた。

笑っている三人を見て、めんどくさそうに溜息をつく一夏。彼らを見無視して掃除を再開しようと、手に持っていた清掃用具を持ち直す。

だが

「だよなー。この間なんか、こいつりボンしてたもんな！ 男女のくせによー。笑っちま」

男子が全ての言葉を発する前に、一夏は動いていた。

「ぶじっ!？」

まず、顔面へのストレート。その後、数発の拳を連続で同一箇所へと打ち込む。

「笑う？ 何が面白かったって？ あいつがりボンしてたら可笑しいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？ 何とか言えよボケナス」

男子を殴った態勢のまま、他の二人へと視線を逸らす一夏。その目には、怒りの炎が灯っていた。

「お、お前っ !! 先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前らは全員ぶん殴る」

一夏はそう宣言すると、箒同様に鍛えられたその肉体に力を入れる。

三対一、上等！

呆けている箒を尻目に、一夏は一方的に男子三人を叩き伏せる。

その喧嘩は、騒ぎを聞きつけてやってきた教師たちが一夏を止めるまで続いた。

「……………ふう」

冷たい廊下に座る、一人の少女がいた。

篠ノ之箒。

一夏が今、職員室で面倒な事になってしまった原因の一端

それを自覚しているからこそ、彼女は職員室の前でこうして座っ

ている。

「馬鹿者め。自分から面倒事を起こしてどうする……」

そう呟く。だがその顔にある表情は、一夏を心配するものだった。

織斑一夏。自分の家で剣術を習う少年。

あまり話した事はない。そして、話そうと思った事もない。

そんな存在 その筈だった。

「似合ってた……か」

床の上で体育座りをする筈。その右手には、男子たちが笑っていたリボンが握られている。一夏が“似合っていた”と豪語したものだ。

その場面を思い起こすと、筈の顔が赤くなる。

うう、なんだ、これは。

体育座りをしていた筈。抱えていた足を更に引き寄せ、顔を沈める。今まで経験した事のない感情に、小学二年生の少女は戸惑って

いた。

彼女には姉がいた。その姉にもよく“可愛い”と言われるが、その感じとはまた違う。胸の奥がむず痒く、そして、一夏の顔を思い出すだけで顔が赤くなる。

「あ、あの……………」

いや待て落ち着け、そつだ落ち着け。

「え〜と…………あの……………」

日頃から鍛えているのは何の為だ！ そつだ、こついつ時こそ冷静にならなければ…………。

「あ、あの！ 篠ノ之さ」

「うるさい！ 黙れ！…」

「は、はいっ！？ し、しめんなさい！…」

その時、篝は初めて自分の意識が別世界へと飛んでいた事を知っ

た。

そして、目の前にいた一人の少年が、怯えた目でこちらを見つめているのも、今知った。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！！」

その少年は、座っている箒にひたすら謝り続けていた。先ほどからずっと話しかけられていたようだが、箒はそれにすら気付かなかったようだ。

「い、いやっ……こちらこそすまない。少し考え事をしていた」

頭を何度も下げてくる少年に対して、箒は謝罪の言葉を紡いだ。座ったままでは失礼と判断したのか、しっかり立ち上がっている。

そして、箒はその少年を舐め回すように見つめた。

「……お前、私と同じクラスの男だな？」

そう箒が告げると、先ほどまで怯えていた少年の表情が驚きへと変わり、そして少し遠慮したような笑顔を形作る。黒く長い髪は、何故か前髪部分だけが白い。そして、その長い前髪の向こうにある赤い瞳が箒を見つめていた。

「うん、よく分かったね……僕、まだクラスの皆に覚えてもらえてないのに……」

そう言うと、今度こそ少年は嬉しそうな笑みを浮かべる。自分を覚えてくれていた事が余程嬉しかったのだろう。

だが、そこで篤は気付く。目の前にいる少年が、何かを抱えている事に。

そもそも放課後のこの時間帯に、まだ校舎にいるという事も気になっていた。

「……あ、これ？」

篤の視線に気付いた少年は、抱え込んでいた“黒い何か”を篤の前に移動させた。

「……ビデオカメラ？」

「うん」

黒い物体は、どうやらビデオカメラのようだ。少々古い型のよう

で、今世間で流通している物よりも大きく、重い。側面にはこの小学校の校名が印字されたシールが貼られている。どうやら学校の備品らしい。

「ところで……えっと……お、織斑くんは、まだ中にいるの？」

そう言つと、少年は自分の背後にある職員室の扉へと視線を逸らす。箒はそれを確認すると、少し警戒心を強め、少年を睨む。

「そつだが……。なんだ、お前も奴らの仲間か？」

今回の騒動。被害者と名乗る男子は三人いる。今回は代表として一番怪我の酷かった男子とその親が学校に来ているが、残り二人もまだ自分のクラスで待機している。この後、その二人の親も来る予定だ。

睨まれた少年はその鋭い眼光に驚いたのか、少し後ずさる。だが、少年は箒の問いに首を横に振って答えた。

「ち、違うよつ！ 僕は……その……えっと……ごめんなさいっ
！！」

突然、少年が頭を下げて謝ってきた。つい先ほどもこんな光景を見た箒だが、その謝罪の理由が分からず混乱していた。

「な、なんだ突然……奴らの仲間じゃないなら別に謝らなくても……」

「ううん　　僕は、謝らなきゃ……ごめんなさい」

少年の謝罪を聞き、更に混乱する箒。その慌てた様子を見た少年は、何かを決心したかのような面持ちで回れ右。職員室の扉へと近づく。

「……………し、失礼しますっ！」

箒は覚えている。この時の、この少年の後ろ姿を。

そして、この少年の瞳を。

憶えている

朝の図書室。

未だ校舎内が静かな時間帯。そんな中、ここに一人の男がいる。

「……………」

時入神楽。それがこの男性の名前。

今から数年前に“生まれた”人物だ。

「……………ふう……………」

昨日の昼食時、親友である織斑一夏の幼なじみである少女“篠ノ之箒”と、入学して初めて会話をした。

そして、彼女が“時入神楽”を知っていると分かった時点で、その会話は終わった。

その後一夏に怒られ大変だったが、それも既に慣れている。中学入学の時には、そうした態度をクラスメイトのほぼ全員にしたのだから。

それに比べれば、今回はたった一人だ。

「たった一人……か。これで全て終わったのでしょうか」

読んでいた本を机の上に置き、椅子の背もたれに全体重を預ける。その態勢のまま、神楽は顔を天井へと向けた。

「全く、面倒な事を残してくれたものですね。“時入神楽”くん？」

天を仰いだまま呟く。その顔にはいつもの笑顔ではなく、自嘲するかのような笑みを浮かべていた。

自分で自分の事を呟くというのも、相変わらず不思議なものですね。

初めて自分に語りかけたのは、小学六年の時だった。

場所は病室。体の至る所に包帯が巻かれ、腕には点滴の針が刺さり、左に顔を動かせば、自分の心拍数を電子音で奏でる機械。

そして、そこが“時入神楽” 生誕の場。

そこから、今の彼は始まった。

あの“事故”で死んだ“時入神楽”ではなく、今の“時入神楽”が始まったのだ。

「やれやれ。今日の放課後にはオルコットさんとの試合だというのに、テンション落ちますね……」

天井を見ていた神楽の瞳が突然動く。動いた視線の先には本棚があるようだが、彼が見ているのは、その更に向こう。

「あゝ、何か御用で？」

「はわっ!?!?!」

本棚の向こうから聞こえたのは、少女の素っ頓狂な声だった。

神楽がこの図書室に来た時には誰もいなかったのだが、数分前から本棚の向こうに隠れていた。何故かは分からないので、神楽は気付いても放置していた訳だが、やはり独り言を聞かれたくはないらしい。

本棚の影から出てきたのは、図書委員の女子だった。金色の髪が窓から入ってくる朝日を浴びて光っている。

「え、えっと……。お、おはよう、ございますっ!」

「はい、おはようございます」

アタフタと慌てる少女を見ながら苦笑し、読んでいた本を閉じる。その仕草を見て、図書委員の少女は申し訳なさそうな表情になった。

「あ、すみません……。邪魔、しちゃいました？」

「いえ、大丈夫ですよ。これ読むの、実は三回目なんです」

今日の試合、その参考として選んだのがこの本だった。どこの国家代表操縦者が著者であるその教本は、説明も分かりやすく、そしてすぐに実践できそうな内容だった。

本棚のすぐ近くにいた少女が、神楽の座っている席に近づいてきた。そして机の上に置かれた本を見て、何故か驚いている。

「これ！ 私も一年の時によく読んでました！ 分かりやすいですし、説明の表現が少し面白いですよね！？」

「そうですね。表現が面白いのは、多分これを書いた人が説明の文章化に慣れていないからでしょう。著者に関しては詳しく書いてありませんが……」

「でも、やっぱり生の声が反映されているのはいいですよね。私た

ちに伝わりやすいつていうか、自然と体に浸透する感じがあって

」

そこまで言つて、少女は自分の態勢に気付く。

机に置かれている本の表紙に左手を置き、顔は神楽へと向いている。少し屈んで、座っている神楽と同じ目線になる感じだ。しかし、その態勢が非常にまずい。

そう、近いのだ。主に顔が。

それはもう、両者の吐息がお互い当たるぐらい。

「！！ わ、わわわわわわわわっ！！」

「わ？」

気付いた少女が一気に後ずさる。口をパクパクと開けたり閉じたり、腕を上下に振って大慌て中だ。神楽はその行動を見て頭の上に疑問符を五つほど浮かべている。

その様を見て、少女はとりあえず落ち着こうと深呼吸。三回ほどして落ち着いたのか、また少し神楽に歩み寄る。

「い、ごめんなさい。取り乱してしまって……」

「いえ、別に私は……」

神楽の回答に、笑顔が溢れる少女。

それから少女は、神楽と様々な話をした。

少女の名前は“ナオ・フィーレンス”という事。

出身はアメリカという事。

彼女の家族はとても仲が良く、女尊男卑などという単語とは無縁だという事。

彼女の祖父が日本人であるという事。

そして、彼女が二年の中でも“落ちこぼれ”であるという事。

「元々、私って適正が低いんです。でも、本を読むのが好きだから、ISの技術書をたくさん読んで、知識だけは人一倍蓄える事ができて、それでまあ、ここにいる訳なんだけど……ね？」

「ふむふむ……」

机を挟んで反対側の席に座っているナオの話を真剣に聞く神楽。

手を顎に添えながら何度も頷いている。一見真面目に聞いていないように見えてしまうのが玉に瑕だ。

「ISの適正って、入学前に測るアレですよ？ AやらBの……」

「そう、私はランクCなんです。まあ、あまり気にしてませんけどね、あははは……」

少し恥ずかしそうに笑うナオ。だが、その笑顔の奥に少し暗いものがあるのを神楽は見逃さない。そして、彼女がついている“嘘”も見逃さない。

だが、それを神楽は指摘しなかった。無意味だと、そう判断したからだ。

「あっ！ ごめんさない。さっきから私、自分の事しか話してませんでしたね」

「いえ、私は」

机に身を乗り出して、神楽に顔を近づけるナオ。最初こそ神楽と話すだけで顔が赤くなっていた彼女だが、数十分話しただけで、こうして打ち解けている。

しかし、神楽が口を開くと同時に予鈴が鳴る。朝のSHRの時間だ。

「すみません、私はこれで……。ウチのクラス、担任が厳しいので」

「ああ、織斑先生だもんね。お気の毒さま」

「いや全く」

机を挟んで笑う二人。

窓の外は明るい。今日は一日太陽が主役の天気だ。

朝日を浴びた鳥たちが、気持よさそうに囀っていた。

篠ノ之箒は悩んでいた。

理由は簡単、昨日の昼に起きた神楽とのすれ違いだ。

「……はあ」

「どづした箒？ 溜息ばかりついて」

「お前にだけは言われたくない」

幼なじみである織斑一夏と共に学食に来た箒。だが、ここにくると、どうしても昨日の神楽が頭に浮かんでくる。あの時の顔は正直、千冬のそれに似ていた。

そして、あれから神楽と一度も会話をしていない。朝も話しかけてみようとしたが、巧く逃げられてしまった。休憩時間も全てだ。そして、この昼食の時間も逃げられてしまった。

箒はもう一度溜息をつくとき、目の前にある焼き魚定食に手をつける。

「一夏。お前はどづやってアイツとの関係を維持したんだ？」

「ん？ ん〜……」

箒の問いかけに、口の中にある食料を噛みながら考える一夏。

神楽は、自分の過去を知っている人物全てを拒絶する。一夏から前もってそれを聞いていた箒だが、これほどとは思わなかった。

そして、同時に一つの疑問が浮かんだ。

一夏はどうやって、彼と親友になったのか。

「俺の時も、最初は拒絶されちゃったんだ。アイツをアイツとして見てやれなかったっていうか、やっぱり“昔の神楽”と“今の神楽”を重ねちゃってさ…。アイツに『近づくな』とまで言われたよ」

最初こそ笑いながら話した一夏だが、後半は少し沈んだ表情になっていた。魚を弄っていた箸も、今は完全に停止している。

「アイツさ、俺にこう言ったんだよ。『みんな、今の私を殺そうとしている』って。昔の自分は別人で、その別人の事を自分に押し付けて、そして今の自分を消そうとしている。なんて言うのかな……。周りの人間は全て敵、って感じだったな」

「全て…敵」

信じられなかった。昔の神楽は人見知りが激しく、他人との会話も少なかった。今の神楽はその真逆だ。誰とでもすぐに打ち解け、いつも笑顔を絶やさない。

そんな彼が、全てを拒絶する光景。それが想像できなかった。

「アイツは記憶を失った。そして“人格”すら失った。今の神楽は、アイツが自分自身で再構成した神楽なんだ。本を読んで、テレビを見て、ネットを見て、人と人の会話を聞いて……、そうして創られた、新しい人格^{アイツ}」

一夏と篝の箸の動きは、完全に止まっていた。周りの女子たちが話す声すら、二人には届いていない。

ふと、一夏が窓の外を眺める。本当に、今日はいい天気だ。

「俺は最初、昔のアイツに戻って欲しいと思った。だからアルバムとか、ビデオとか、日記とか、色々病室に持って行ったんだ。でも次の日には、全部ゴミ箱に入ってた。俺がいくら怒鳴っても、アイツは本を読み続けてた」

小学校の帰りに、神楽の病室を毎日訪れていた一夏。だが神楽は、そんな一夏を見ようとすらしなかった。その視線はずっと、手に持っている本へと注がれていた。

「そんな時、千冬姉が病室に来てさ。神楽と普通に話してるんだ」

千冬が話しかけると、神楽はしっかりと反応した。体の具合を千冬が尋ねると、神楽は素直に答えた。しかも笑顔で。

「なんでだろうって、ずっと考えたんだ。授業中も、寝る前もずっと考えた」

そして、一つの答えに行き着いた。

「……お前は、自力でその答えに行き着いたのだな」

未だその答えに行きつけない自分。それが恨めしいのか、篝の顔には自分に対する怒りが現れていた。

そんな篝を見ながら一夏は苦笑すると、話を続ける。

「俺がそれに気付いた後、千冬姉に聞いたんだよ。なんで教えてくれなかったのかってさ」

その時、千冬はこう言った。

自分で気付かなければ意味ないだろうが、馬鹿者。

「やはり、そうなのだろうな……」

「ああ。でもね」

再び箸を握り、食事を再開する一夏。だが、白いご飯を口に含む前に箸へ一言、こう告げた。

「箸なら気付けるって、俺はそう信じてる」

その日、箸は授業中もひたすら悩み続けた。

千冬の出席簿による攻撃を何度も受けた事も、一応報告しておく。

ついに、この時が来てしまいましたか……。

その日の放課後、神楽はIS学園第三アリーナのBピットに来ていた。

そう、もうこの時間が来てしまったのだ。

イギリス代表候補生、セシリア・オルコットとの試合が。

「何をボーツとしている馬鹿者。とつとと準備せんか」

パン！

聴き慣れた音が神楽の耳に入り、そして慣れた痛みが神楽の後頭部を襲う。千冬の出席簿による攻撃だろう、神楽は後頭部を擦りながら回れ右、後ろにいる千冬へと体を向けた。

今から使うこのアリーナと呼ばれる施設は、その名の如く、IS同士の試合を行う為の特殊施設である。中央のアリーナ・ステージの直径は二百メートル。その両端にあるのがピットと呼ばれる待機場所であり、神楽がいるのはその一つ、Bピットだ。反対側のAピットにはイギリス代表候補生であるセシリアが待機している筈だ。

このアリーナ、当然観客席も存在する。IS同士の戦闘を行うのだから流れ弾なども当然あるが、観客席とこのアリーナの上空、その全方位に強固なシールドが展開されている為、観客席に弾が行ったとしても、そのシールドがある限り観客に被害は出ない。

今回の試合は無観客試合、ギャラリーは一人もいないのだが。

「準備ですか？ ISスーツは着用してますけど……」

神楽はそう言うと、自分の体に目をやる。

彼が今着ているのは“ISスーツ”と呼ばれる特殊素材で作られたものだ。通常このISスーツは女性用であり、形状はレオタード

やワンピースなど様々。

神楽が今着ているISスーツは特注品であり、当然女性用のものとは異なる。全身をカバーした、ダイバーの着る全身水着のような感じだ。データ収集の為らしいが、そうした情報は神楽に与えられていない。

「ISスーツで戦う気かお前は。コレを装着しろと言っている」

千冬が自分の後ろにある物体を手の甲で叩く。

ラファール・リヴァイヴ。フランス最大のIS企業“デユノア社”が開発した、第二世代最後期IS。その性能は、初期第三世代に匹敵すると言われている名機だ。

機体カラーは濃紺。四枚の多方向加速推進翼が特徴的であり、武装換装により全距離に対応する事ができるこの機体は、世界七カ国でライセンス生産され、十二カ国で制式採用されている。今神楽の目の前にあるリヴァイヴには中距離戦用装備として六十一口径アサルトルカノン“ガラム”が二丁装備され、一応、近接戦用ブレードも量子変換済だ。

「装着方法は分かっているな。武装もお前の要望通りにセットしてある。後は、お前次第だ」

千冬はそう言うと、神楽に背を向けて歩き出す。山田先生の待機

している管制室に行く気なのだろう。アリーナでの試合時には基本、この管制室に教師が待機している。

神楽は千冬の背中を見て苦笑すると、リヴァイヴを見上げて深呼吸を一つ。

「……さて、この試合のみではありませんが、よろしくお願いします。ラファール・リヴァイヴ」

リヴァイヴに背を預け、セットアップを開始する。

システム最適化、開始。

ハイパーセンサー、同調開始。

センサー精度確認。

レーダー、全レベル問題なし。

スキンバリアー 皮膜装甲展開終了。
スラスタ 全推進機正常動作を確認。

「……はて？」

リヴァイヴを纏った神楽。システムの最適化は無事済んだよう
体には違和感はない。だが一つ、疑問が浮かぶ。

「試験会場で起動させた時より、情報量が少ないような……」

高校の入試会場。そこで初めてISに触れた時、まるで濁流のよ
うな情報が頭の中に入ってきた。それは一夏も同じだったようだが、
今回それが無いのだ。

確かに、ある程度の情報は流れてきている。だが、あの時ほどで
はない。

「一度経験してしまえば、アレは必要ないのでしょうか……。不思
議ですね〜」

顎に手を添えて唸る。だが、この無駄な時間を千冬が許す筈もな
い。

『何を唸っとるか。とっとと行け、馬鹿者』

こんな有難いお言葉が管制室から飛んできたりもする。

リヴァイヴのハイパーセンサーを使い、アリーナ・ステージ上を見る。そこには既に、セシリア・オルコットが専用ISを纏い、ホバリング状態で待機していた。

無意識に使用したハイパーセンサー。自身の全周囲を見る事が出来るこのセンサーは、本来宇宙空間での使用を想定して開発されている。見ようと思えば数キロ先まで簡単に見渡せるこのセンサーも、現在は機能制限が掛けられた状態だ。それでこの性能なのだから恐れ入る。

そして神楽は今、眼鏡を掛けていない。ハイパーセンサーがあるのだから、そんな物は必要ないのだ。

「試合時間は三十分。この時間を有意義に使いたいものです」

体を前方へ傾けると、リヴァイヴが浮遊しつつ前進する。そのままピット・ゲートへと向かい、また深呼吸。

「では 行きます」

ゲート開放と同時に、神楽はピットから飛び出す。

その顔には、いつもの笑顔が浮かんでいた。

アリーナの管制室。

そこで今、二人の教員が現在行われている試合を観戦していた。

一人は山田真那。IS学園一年一組の副担任であり、かつて日本代表候補生と呼ばれていた優秀なIS操縦者である。その温厚な性格と柔らかい物腰からクラスの女子たちからあだ名を付けられる程慕われている、というより、親友だと思われる。そんな生徒同化型教師だ。

そして、もう一人は織斑千冬。IS学園一年一組の担任教師にして、IS操縦技術を世界規模で競う国家間大会“モンド・グロツソ^{ブリュンヒルデ}”、その第一回大会総合優勝者。つまり人類最強クラスのIS操縦者として世界に認知されている人物である。

黒く長い髪に、鋭く黒い瞳。冷静かつ冷徹な性格。そして圧倒的な技能。副担任である真那も、千冬に勝る男前は存在しないと断言している程だ。その為か、毎年彼女目当てでIS学園に入学してくる女子も多く存在する。

そんな二人が見ている試合。それは今年入学してきた一年、イギリス代表候補生“セシリア・オルコット”と、男でISを起動できる稀有な存在“時入神楽”、この二名の試合だ。

「……………」

「……………ははは」

ひたすら無言を貫く千冬。そして困ったような笑みを浮かべる真那。

試合開始二十分。今の経過を簡潔に報告しよう。

「時入くん、当たってばかりですね……………」

「そして、一発も当てていないな」

セシリア・オルコットが優勢だった。というよりも、完全に虐めと化している。

セシリアの駆るイギリス製第三代型IS“ブルー・ティアーズ”。蒼い装甲とスマートな成り立ち。どこか西洋の騎士を思わせるそのISは、神楽のフランス製第二代型IS“ラファール・リヴアイヴ”を全く寄せ付ける事なく、ただ一方的に攻撃を加えている。

ブルー・ティアーズは遠距離ないし中距離射撃戦を想定して開発されたISである。六十七口径特殊レーザーライフル“スターライトmk?”を主兵装とし、第三世代兵器と呼ばれる特殊兵装も装備

している。現時点で第三世代兵器は使用していないようだが、これはハンデのつもりなのだろう。

神楽のリヴァイヴが装備している武装は六十一口径アサルトカノン“ガラム”。信頼性が高く、IS用兵器として高い評価を得ている実弾系銃器だ。

だが、神楽の未熟さもあるのだろう。リヴァイヴの右手に装備されたそれから放たれる弾丸は、一発もブルー・ティアーズに直撃していない。

逆にスターライトの一撃はリヴァイヴを容易に捉え、一撃一撃を的確に当てていく。稀にリヴァイヴの初期装備プリセットである物理シールドで防げているようだが、それも数回程度だ。

「技量の差は歴然ですね。さすが代表候補生です」

「それ以前に時入が弱すぎる」

「あはははは……」

椅子に座ってモニターを見ている真那は誤魔化すような笑いを零すと、ブルー・ティアーズのデータを正面大型モニターに展開する。

「イギリスの第三世代型IS。イメージ・インターフェースを導入

した特殊兵器を実装した最新鋭機ですね。今のところそれは使用していないようですけど、これってやっぱり……」

「余裕のつもりだろう。負ける筈がない、そう確信しているようだからな」

「織斑先生も、やっぱりそう思います？」

「ああ。小娘が偉そうに」

相変わらずストレートな物言いだ、と真那は心の中で呟く。

そして、そんな会話をしている中でも試合は続き、リヴァイヴのシールドエネルギーが減っていく。いわば、それはヒットポイントの減少だ。IS同士の試合では、このシールドエネルギー残量が勝敗を決する。

シールドエネルギーとは、IS表面に展開されているバリアーのエネルギー残量だ。そのバリアーを攻撃が抜ければISそのものにダメージが通り、装甲剥離などの実体ダメージとして現れる。そして、更にそれを攻撃が抜けてしまった場合、今度は操縦者保護の為に“絶対防御”という機能が働く。これはシールドエネルギーを多くに消費して操縦者保護を最優先にするものであり、絶対防御発動イコール敗北、という公式が成り立ってしまう。

「あ、また当たった……」

モニターの向こうでスターライトの直撃を受けているリヴァイヴ。エネルギー残量は更に減ってしまふ。

「まだ飛行にも慣れていないみたいですね。あっちへフラフラ、こっちへフラフラ。生まれたての小鹿みたいですよ」

「アイツの事だ、どうせ教本に書いてあった『自機の前方に角錐を展開』というのを真に受けているのだろう。その概念が邪魔をして、自分なりのイメージが構築出来ていない」

ブルー・ティアーズの戦闘機動は実に優雅だ。それに比べてラフアール・リヴァイヴの戦闘機動は雑すぎる。何とか浮いている状態と言っても過言ではないだろう。

神楽に対して容赦ない千冬の発言。椅子に座っている真那は、恐る恐る後ろを振り向く。

(……あれ?)

だが、そこにあつたのは千冬の不敵な笑み。

真那と違って立ち見をしている千冬は、腕を組んだまま、何故か

笑っていた。

「……山田先生。時人の動きを見て、何か感じるか？」

「え？」

真那は視線をモニターに戻し、リヴァイヴの動きを観察する。

未だフラフラ状態の機動。狙いの定まらない射撃。

だが、何か違和感を感じる。

「あ」

そして真那は気付く。その違和感の理由^{ワケ}。

「動きに無駄が多いっていうか……、わざと無駄な動きを入れてますね」

「正解だ」

無駄な動きが多い、それは最初から感じていた。

だが、神楽の行う“無駄な動き”は、明らかに“する筈の無い動作”なのだ。

「右手のガラムを左手に持ち替え、必要ない場面で物理シールドを展開、急速上下機動、急速停止……。まるで“復習”しているみたいですよ」

「知識は使わなければ意味がない。時入はおそらく、自分の持っていた知識をこの場で“実践”しているのだろう。次の段階に移行する為にな」

「次の段階？」

「“応用”だよ。基礎が成り立っていないければ、それより次の段階には進めない。例えば次の段階に行けたとしても、必ずどこかで躓く」

そんな会話をする二人の教師。だがその時、リヴァイヴの動きに変化が生じる。

「機動、安定しましたね。フラつきが無くなりました」

「覚えたのだろうな、基礎を。さて 山田先生、試合の残り時間

は？」

「あと四分です」

それを聞いた千冬は、モニターに目を向ける。

「そうか、では　　そろそろだな」

真那は千冬のそんな言葉を聞くと、モニターに映るリヴァイヴを見つめる。

先ほどまで、神楽の顔に笑顔はなかった。

だが今、まるで子供のような純粋な笑みが、そこに在った。

「やっと慣れましたね。意外と時間が掛かってしまいましたか…」

神楽はそう呟くと、機体コンディションの確認に入った。

エネルギー残量百三十。ガルの残弾四十四。実体ダメージは

無し。物理シールド一つが使用不能、一つは使用可能。ただし、強度は落ちている。

機体ステータスの確認を終えた神楽は、遙か上空で狙撃態勢を維持しているセシリアに目を向ける。

「あと四分。倒せるとは思いませんけど、まあ、やるだけやってみましょうか。このまま負けたら千冬姉さんに怒られる」

それだけは避けたい。そう苦笑すると、神楽は準備に入った。

今まで右手に持っていたガラム、それと同型であるアサルトカノンを左手に展開、グリップを握る。そして今まで接地していたリヴアイヴをほんの少し浮き上がらせ、意識を集中する。

相手は動いていない。こちらの変化には気付いている筈だが、持ち前の余裕が判断を鈍らせているのだろう。

「あのブルー・ティアーズは近接戦闘向きではない。そして、オルコットさん本人も近接戦は苦手のご様子。先ほど私が近付いた時、彼女は近接戦による“迎撃”ではなく、距離を稼ぐ事を優先した」

更に意識を集中。目標は上空に佇む“蒼い雲”。

ブルー・ティアーズ。

「そしてあの長銃。威力や射程が長い分連射が出来ない。先ほどからアレしか使用していないところを見ると、兵装はアレと、未だ使用していない第三世代兵器のみ」

リヴァイブの背部にある四基の加速推進翼スラスターに光の粒子が集い、徐々に光を増していく。

「そして私が懸念していたスピード。例え敵が遠距離型だろうと、スピードで勝ってさえいれば相手の懐に入れる」

加速推進翼スラスターの出力を限界まで引き上げ、そして身を屈める。まるで跳躍の準備段階のようなその姿勢のまま、神楽は不敵な笑みを浮かべた。

「ラファール・リヴァイブ。その名、伊達ではない事を信じます」
“疾風の再誕”。

そして、ラファール・リヴァイブは跳んだ。

『つー！』

オープン・チャネル
開放回線から聞こえる、セシリアの声。

その声と同時に、ブルー・ティアーズは射撃姿勢を解き、急速後

退を始めた。

だが、もう遅い。

神楽は既に、セシリアの苦手とする距離に侵入していたのだから。

「おっと…」

『そんなっ！
イケンニッション・ブースト
瞬時加速?!』

イケンニッション・ブースト
瞬時加速。機体背部に装備された加速推進翼で行われるエネルギー
スラスト
排出、吸収、放出という一つの過程によって生じた慣性エネルギー
ー、それを利用した超高速移動である。

初めて使用した事もあつてか、神楽は軌道計算を少し間違えたら
しい。ブルー・ティアーズの真正面で停止する筈が、少し右に逸れ
ていた。

しかし

「十分ですかね」

両手に持っていたガラム、その引き金を絞る。六十一口径から放
たれる弾丸は先ほどまでと違い、ブルー・ティアーズへと正確に突
き進む。
トリガー

二丁のガラム、その弾丸の雨を浴びつつセシリアは距離をとるべく旋回し、機体を加速させる。

「ここまで近づけば、そろそろ離されませんよ」

神楽はセシリアを追跡しようと出力を上げる。

だが、忘れてはいけない。セシリア・オルコットは“エリート代表候補生”。そして、彼女はまだ、本気を出していないのだから。

『いいですわ……、貴方に見せて差し上げましょう。』
『ブルー・ティアーズ“蒼き雫”を』

神楽に追跡されていたセシリアのブルー・ティアーズ。その背中に装備されていた四枚のフィン・アーマーが分離し、リヴァイヴに襲いかかる。

そのフィン・アーマーこそ、イギリス第三世代型IS“ブルー・ティアーズ”に実装されたBT兵器である。そのBT兵器の実験機として開発されたのがセシリアのブルー・ティアーズであり、そのISの名こそ、このBT兵器の名前。

フィン・パーツに直接備え付けられた特殊レーザーの銃口に光が集い、総勢四基のビットが神楽のリヴァイヴを取り囲む。

「……ちょっと待ってください。手加減はどうしたんですか、手加減は?!」

『しておりますわよ! ええ、しておりますとも!』

「いやいや、思いつきり本気に見えますがっ!?!」

ビット四基からレーザーが発射され、リヴァイヴに注がれる。

『さあ、朽ちなさいっ!』

「お断りします!」

試合時間は、まだ二分もある。

今この場面で負ければ、その二分が無駄になる。

まだ私は、全てを“実践”していない。

そう。私はまだ、戦える。

神楽はビットの動きをハイパーセンサーを駆使して追いかける。

四基のビット。一つ一つが小型砲台となっており、敵を包囲殲滅する事が可能。ブルー・ティアーズのハイパーセンサーと同期する事で狙撃も可能。ある意味、射撃兵装としての一つの到達点だ。

正確無比な全方位からの射撃。初めてこの兵器に遭遇したIS操縦者はその対応を練るだけで時間を取られ、その隙にシールドを削られる。

「くっ」

四方から襲い来るレーザーの雨。ラファール・リヴァイヴを操りそれを回避しようとする神楽だが、ビットを視界に捉える事が出来ない。例え出来たとしても、回避ではなく物理シールドによる防御が限界だった。

『私は代表候補生。貴方のような素人に、負ける筈ありませんわ！』

「ですよ。それは重々承知です」

使い物にならなくなった物理シールドを破棄し、両手にあるガルのトリガーを絞る。一定間隔で吐き出される弾丸がブルー・ティ

アースに迫るが、セシリアはそれを難なく避けきる。

そして、ガルムの銃口から光が失われる。弾切れだ。

『さあ、そろそろ終わらせましょう。試合時間も残り少ないですし』

試合時間、残り一分弱。

だが、まだゼロではない。

『…？ 何を笑っておりますの？』

神楽は笑っていた。機体ダメージは大きく、実体ダメージもある。銃は弾切れ。残りシールドエネルギー四十一。だがそれでも、神楽はいつもの笑みを浮かべていた。

そして、リヴァイヴの腕が突然動き出す。

「てい」

『ちよっ！？』

ガルムが、飛んだ。

弾切れのガルムをブルー・ティアーズに投げつける神楽。セシリアは一瞬驚いたようだが、すぐにビットを展開、ISの馬力で投擲され、かなりのスピードで迫るガルムに狙いをつけ、迎撃する。

四基のビットから放たれたレーザー、そしてブルー・ティアーズのスターライトの攻撃を受け爆発するガルム。だがそれは罠であり、神楽はセシリアの隙について距離をとっていた。

ブルー・ティアーズはアリーナの遙か上空で浮遊を続け、神楽のリヴァイヴは地上スレスレで浮遊。だがこれでも、スターライトの射程からは逃れられない。

そして今リヴァイヴの手に握られている武装は、近接戦用ブレードのみ。相性が悪すぎた。

『もう一度瞬間加速で距離を詰める気？ でも残念。この距離なら、イグニッション・ブースト例え瞬間加速でも私には届きませんわよ？』

そう、イグニッション・ブースト今瞬間加速を使ってもブルー・ティアーズには届かない。距離が開き過ぎている。だがセシリアの獲物ならば、スターライト動かずとも神楽のラファール・リヴァイヴを狙撃できる。

そして、一撃でもリヴァイヴに当てさえすればセシリア・オルコットの勝ちだ。

「困りましたね。咄嗟に下がったのはいいものの、手詰まりですか」

苦笑しつつ、自分の右手に握られているブレードへと視線を移し、同時にブルー・ティアーズのデータを意識下に展開する。バックグラウンド

「…ブルー・ティアーズの残りシールドエネルギー残量は三百弱。先ほどの攻撃で少しは稼げましたか」

最初の瞬間加速。イグニッション・ブースト その奇襲によって、半分近くシールドを削る事が出来た。だがまだ、相手のシールドエネルギーは約半分残っている。

「最後にもう一度、瞬間加速で距離を詰めてみますか。物理シールドもあと一発ぐらいは耐えられるでしょうし…」

そう呟くと、神楽は再び瞬間加速の準備に入る。イグニッション・ブースト 近接戦用ブレードを左の腰に添えているその姿は、まるで居合を使う侍のようにも見えた。

『何度も同じ手は食いませんわよ!』

その様子を見ていたセシリアが動き出した。手に持つスターライトを構え、ハイパーセンサーと同期、狙撃態勢に入る。ビットは待機状態に入っているようで、ブルー・ティアーズ本体とドッキング

している。

放たれるスターライト。強力無比な一撃が、神楽のラファール・リヴァイヴへと迫る。

だが、神楽は動かない。残っていた物理シールドを展開し、スターライトを防ぐ。その直後物理シールドは碎け散ったが、神楽の顔を見ると、時間は稼げたようだ。

『っ！！ 何を笑っておりますの?!』

「いえ 特に」

リヴァイヴが動く。背中にある四基の加速推進翼スラスターに光が集まり、そして爆ぜた。瞬時加速イクゼンション・ブーストを使用したのだ。アリーナ・ステージの地上部から、セシリアのいる上空へと一気に駆け上がる。

が、奇襲が成功するのは一度きり。セシリアはビットを再展開すると、迫り来るリヴァイヴの軌道データを算出、ビットに指示を送る。

動き出したビットは、セシリアの前面に展開され、神楽を阻む形となった。そのまま銃口に光が灯る。

『無駄ですわね。これだけの距離、例え瞬時加速イクゼンション・ブーストでも詰め切れませんわ』

ラファール・リヴァイヴの失速ポイント。ビットはそこへの攻撃を開始しようと、銃口の光を更に強める。

そして、ラファール・リヴァイヴのイグニッション・ブースト瞬時加速が終わる。ブルー・ティアーズとの距離は、まだ半分も詰められていない。

光を失うリヴァイヴのスラスタ加速推進翼。

速度が急激に落ち始めるラファール・リヴァイヴ。

リヴァイヴに迫る、ビットのレーザー。

勝利を確信したセシリア・オルコットの笑み。

そして、時入神楽の笑み。

『っ!?!?』

突然、リヴァイヴが再加速を始めた。光を失った筈のスラスタ加速推進翼に、再び光が灯っている。

その光は徐々に光を失い、また失速。

そして、再び加速を始めた。

「 届けっ！」

セシリアのブルー・ティアーズの眼前に迫る神楽のラファール・リヴァイヴ。居合の型、それを維持したまま一気に詰め寄る。

さすがのセシリアも焦っているのか、スターライトを構え、ビツトを再展開。弾幕を張り始める。

『 ああもうっ！ 何なんですの！？ 』

今までセシリアが使っていたビツトは四基。だが今、彼女はブルー・ティアーズの腰に装備されていた“ミサイル型BT兵器”を使っていた。つまり、彼女は本気だ。

その弾幕を何とか回避しつつ、セシリアに迫る神楽。加速推進翼スラスタから再び光が失われるが、また光り始める。

これが、最後の一手。

神楽は手に力を込め、近接戦用ブレードを振るう準備に入る。あと一度加速すれば、ブルー・ティアーズに肉薄できる。

「…………おや？」

だが、最後の加速は始まらなかった。加速推進翼スラスターに集まっていた粒子が霧散し、失速する。

神楽の意識下に、リヴァイヴのステータスが表示される。そこには赤い文字で、こう示されていた。

『エネルギー残量、十一』

ガス欠である。

そして、目の前で突然失速した敵をセシリア・オルコットが見逃すはずもなく。

スターライト、そして六基のビットによる集中砲火によって、神楽のラファール・リヴァイヴは沈んだ。何とも呆気無く、簡単に。

そして、アリーナ・ステージの地上部に落下したラファール・リヴァイヴ。その大きなクレーターの中心で、時入神楽は目を回しながら

「…………きゅっ」

伸びていた。

第五話 Nameless

「…………ふああ〜」

七月。

少々暑めな陽気の中、一人の少年が欠伸を一つ。

「夏ってこんな感じなんだな。本当に暑い」

ここは病院の一室、一人の患者が入院する為に作られた個室だ。大きめに作られたベッドにいるのは、先ほど欠伸を一つしたベッドの大きさと比例しない小柄な少年。

彼の名は“時入神楽”。四ヶ月前に入院した、小学六年の男子。

長く黒い髪、その前髪部分だけが白くなっているのは、彼が“先天性白皮症”^{アルビノ}だからだろうか。よく見れば、その瞳も鮮やかな赤色をしている。肌も常人に比べて白い。

「冬は寒いって聞いたけど、どうなんだろう…。暑いよりいいと思うけど…………」

ベッドで上半身を起こして本を読んでいる少年は、ふとそんな事を考えた。この夏が彼にとって初めての“夏”であり、まだ“冬”も経験した事がない。自分の肌の性質上、直射日光が弱い分まだ冬の方が過ごしやすいだろう、少年はそう考えた。

時刻は午後一時。今日の診察は午前中に全て終わっており、今は自由時間だ。

「今日は何をしようか……。とりあえずランニングをして、後はいつものメニューでもこなそうかな」

入院したのが今年の三月。それから二ヶ月ほどベッドの上から動けずにいた為、体の筋力が衰えてしまっている。それを取り戻すべく、少年は毎日欠かさずリハビリに励んでいる。

まあ、担当医から「アスリートにでもなるつもりか？」と言われるようなリハビリだが。

「今日は千冬姉さん、来るのかな。あの男の子は……来ないで欲しい。面倒」

苦笑し、顔を左に向ける。窓の外は蒼穹で、鳥たちが気持よさそうに飛んでいる。本当にいい天気だ。

手に持っていた本へと再び視線を戻す。今読んでいるのは最近話題になっている“IS”についての専門書。少し前にテレビでやっていた“IS”の技術に関する特番を見て、少し興味を持ったのだ。「すごいな、こんな技術を確立させてしまう人がいるだなんて。この“PIC”なんて、普通思いつかない。重力制御と似たような技術なのかな…」

とても小学六年の発言には思えない。そして、入院直後には会話すらままならない状態だったとも思えない。

彼の入院理由は“怪我”、そして“記憶障害”。

今年三月の事故。少年は怪我を負い、そして“記憶”を全て失った。それまで生きていた証とも言える“記憶”を。そして、それは日常会話すらままならない状態へと彼を追いやった。

言語が安定せず会話が出来なかった。思考が安定せず、何を考えられているのか誰も分からなかった。

だが、少年はそんな状態から立ち直った。それも、二ヶ月という驚異的なスピードでだ。医者も「奇跡だ」と喜んでいたが、その少年を事故以前から知っている者たちは、素直に喜べなかった。

神楽は、違う人物へと変貌していたのだ。

姿や声は同じ。だが、口調や思考が全く異なる存在になっていた。

今の“時入神楽”は、過去の“時入神楽”を全否定している。自分の過去を知っている者に対して、拒絶という反応を示していた。

そして、多くの大人が彼の前で“嘘”をついていた。

少年には家族がない。全員、神楽が遭った事故で死亡している。両親のそのまた両親も既に他界しており、両親の兄弟もいない。

神楽の父親は脳神経学の研究者で、母は科学者だった。そして、どちらも“権威”と言われる程有能な人材だったらしい。国家からの支援も受けており、海外にもよく行っていた。

そんな二人は、神楽に莫大な資産を残した。

だからだろう。その資産を狙って、様々な大人が神楽の病室を訪れた。言い分は全員同じ、神楽を引き取りたいというものだった。

中には本気で神楽を心配した者もいたのかもしれない。だがその殆どは、神楽の両親が残した“財産”目当ての大人たち。彼らは神楽に笑いながら近寄り、いつも耳元で「大丈夫だ」と言った。

だから、神楽はそんな大人たちにこう言った。

嘘つき　と。

神楽は、ある感覚のみが異常な発達をしていた。

その赤い瞳で相手の瞳を覗き込むだけで、その人物が“嘘”をつ

いているか否かを瞬時に判断する事が出来た。特定条件下ならば、その人物の思考を“読み取る”事も可能。それはある種の“超能力”と言えるかもしれない力であり、昔、周りの人間から“化け物”と呼ばれたりもした。

今の神楽にその頃の記憶は無いが、病室を訪れた“嘘つき”たちは全員、そう言って病室を後にしていた。

そんな中、ある女性が現れた。“織斑千冬”である。

神楽が“昔の神楽”だった頃、彼女とその弟である“織斑一夏”とは親しい関係だった。神楽の両親も、彼女たちに良くしていたそう。神楽は千冬や一夏と同じ剣術道場で鍛えていた同門であり、一夏の親友でもあった。

だが、神楽は織斑一夏を“拒絶”した。理由は簡単、一夏が“昔の神楽”を求めたからだ。今いる“時入神楽”ではなく、もう存在しない“時入神楽”を、自分に求めてきたから。

「……織斑、一夏」

例え呟いても、その名前で思い出す事など何も無い。当たり前だ。

夏の風が神楽の頬を撫でる。病院の四階にあるこの部屋からの眺めは最高だった。開け放つている窓から入る風もまた格別だ。風の吹く音を心地良く思いながら、青空へと視線を注いだ。

そして、神楽は気付いた。

風の音に混じって、何か別の音。重量のある物が風を切り裂いて
いるような、そんな音。しかも少しずつ、こちらに近づいてきてい
る。

神楽はとりあえず本を閉じ、眼鏡を掛けてもう一度青空を見る。

「……あ」

その数秒後、ミサイルのような物体が視界に入る。ミサイルはこ
ちらに向かいつつ、何故か先端部を上下に開けた。そこから小型の
物体が、まるで二段ロケットの如く神楽のいる病室へと向かってく
る。

そして

「やほー！ あっそびに来た　ぶべしっ！！」

窓から猛スピードで侵入してきたソレは窓縁につま先を引っ掛け、
奇声を発しながら顔面スライディングという形で着地。病室の出入
口付近の壁に激突して、完全に停止した。

が、そこからの復活は素早い。「イタタタ…」と顔を手で擦り、
立ち上がるその物体。それは間違いなく“人間の女性”であり、ミ
サイルの類ではない。

青と白のワンピースは、まるで童話の中に出てくる少女“アリス”を彷彿とさせる。長い髪は黒というよりも濃紫に近いだろうか。そして何故か、その頭には“ウサミミ”が生えている。年齢は十代半ば位だろうか。

「いや〜失敗失敗。おのれ窓縁めー、取っ払うぞー！」

のんびりとした口調でそう言い放つと、その“少女”は体を神楽のいるベッドへ体を向ける。そして、柔らかい笑みを浮かべた。

神楽もいつもの笑顔で対応する。

「……………どちら様でしょうか？」

「爽やか笑顔でナースコールを握っちゃやーなの！ グツジョブ！」

会話にならない。

神楽は心の中で呟く。

神楽は不法侵入者に笑顔向け、ナースコールを右手に握っている。親指を押しこめばナースセンターで音が鳴り響き、すぐ誰かがやって来る筈だ。

それを見た不法侵入者の“少女”は若干焦りはするものの、右手の親指を立てて神楽に笑顔で向けてくる。ナースコールを握る神楽の右手の真似でもしているのだろうか。

「おやおや元気が無いねー。ハッスルハッスル!」

「……ハッスルハッスル」

「よく出来ましたー!」

「それはどうも」

「で、何か御用かにゃん?」

「……どちら様でしょうか」

「ハッスルハッスルー!」

「……ハッスルハッスル」

「よく出来ましたー！ ぶい！」

「……ぶい」

「で、何か御用かによん？」

「振り出しに戻ってます……」

盛大な溜息を零す神楽。それを見てクスクスと笑う少女は歩を進め、神楽のいるベッドへと近づき、そして腰掛ける。そして神楽の顔へと自分の顔を一気に接近させた。少女の吐息が神楽の顔に届く距離だ。

「あつなたーのおーなまーえ、なんてーの？」

「……知らずに来たんですか、貴女は？」

「君の口から聞きたいんだよー。教えてちょーだい」

目の前にいる少女の瞳、それを神楽は覗き込むが、そこに“嘘”は無かった。その事に少し驚きつつ、神楽は自分の名前を紡ぐ。

「神楽。 “時入神楽” です」

「神楽くんかー！ よし、かーくん決定ー！」

「何がですか？」

「君の名前！」

「勝手に改名されてますね、私……」

これだけ疲れる会話をするのは何時以来だろうか。 とりあえず疲れる。

神楽の苦笑を見て少女は笑い、そして自分の頬に左手の人差し指を当てる。

「私は篠ノ之束だよー！ “らぶりい束ちゃん” って呼んでね！」

ニコニコ笑顔で神楽を見ている少女“篠ノ之束”。 その名前を聞いた神楽はチラリと枕元に置いてある数冊の書物へと視線をやる。 その中にあるISに関する技術書の一つ、その内容を少し思い出していた。

「篠ノ之、束……。ISをたった一人で開発したっていう、あの“篠ノ之束”さんですか？」

「らぶりい束ちゃん」

「……“らぶりい束ちゃん”さんですか？」

「そっだよー。私って有名人だね！ いやー困った困った！」

いや、困っているのはコチラだ。

篠ノ之束。その名を知らない人はいないと言っても過言ではない、超の付く有名人である。世界最強の兵器と言われるIS インフイニット・ストラトス の開発者であり、現在絶賛行方不明の天才。それが今、自分の目の前にいる。対処に困るのは当然だ。

「いやー、ここまで来るの大変だったんだよー？ 途中で戦闘機に撃墜されかけたしー」

さっきのミサイルもどきか。

笑いながらとんでもない事を話している束を見て、神楽は引き攣った笑みを浮かべるしかなかった。

でも何故だろう。

彼女と話す時間は表面的な疲れとは真逆で、とても心地良かった。

とても、とても

IS学園に異例の”男”が入学して、数日が経った。

一部の女子たちは未だ浮かれているようだが、それでも入学式当日と比べれば静かな方だろう。廊下にパラッチよろしく軍団がないだけマシだ。いや、完璧に死滅してはいなのだが。

「…ふああ
」

セシリア・オルコットとの試合を終えた次の日。時入神楽は久し

ぶりに清々しい朝を迎えていた。心配事の一つが減ったのだから、それも当然だ。

「よく眠れた。久しぶりに」

寝起きだというのに、寝ぐせは少ない。そういう毛質なのだろうか。朝日を受け、白い肌が強調されている。鮮赤の瞳が窓の外を見つめ、飛んでいる小鳥を追う。

「昔の夢を見たような気もするけど……まあいいか」

大きく背伸びをすると、ベッドから抜け出す。ジャージというラフな服装だが、これが彼の寝間着である。

少し顔を左右に振り眠気を飛ばすと、神楽は着ているジャージを脱ぐ始め、クローゼットから上下セットの服を取り出す。着るのは先ほどの物とは違うものの、またジャージだ。

「ランニングも久しぶりだな。どの程度走れるやら……」

苦笑しつつ、灰色のジャージに着替え終わる神楽。ベッドの横にある小物入れ、その上に置いてあった眼鏡を掛けて、その隣に置いてあった“ペンダント”を首にかける。これで準備は整った。

長い髪は束ねていない。髪を整えるのはランニング後にシャワーを浴びてからだ。

手にタオルを持ち、部屋のドアを開ける。現在時刻午前五時。まだ誰も起きていないようで、寮内は極めて静かだ。そしてよく考えれば、こんな静かな寮内は入学して初めてではないだろうか。

クスリと笑い、寮内の廊下を歩く。

IS学園のグラウンドはかなり広い。ISによる訓練も想定されているのだから当たり前と言えは当たり前だが、このグラウンドを十週とか言われた日には、かなり悲惨な目に遭うだろう。

「タイマーは一時間つと。しかし無駄に広いな、ココ」

携帯のタイマーをセットし、ポケットに突っ込む。しっかりと整備されたグラウンドに小石や雑草は全く無く、部活動にも活用されている。

白いスタートラインに立ち、クラウチングスタートの姿勢を取る。

「 よーい」

自分で眩き、腰を上げて静止する。

「ド」

そして、走り出す。

その走りを見ればこの学園の陸上部も黙っていないだろう。それだけの能力を神楽は有している。入院時代から千冬が組んだりハビリメニューをこなし、退院後もこうして自己鍛錬を欠かしていない。神楽自身、自分がどの程度まで能力を上げる事が出来るのか知りたかったというのも理由の一つだ。

「少し、体力落ちたかな」

走りながら苦笑し、走る速度を上げる。落ちた体力を早めに取り戻したいのだろう。千冬に再度メニューを組まれたくはない。否応なしにステップアップしてしまいそうだからだ。いや、してしまうだろう。千冬はそういう性格だ。

少し速度を上げてみる。呼吸は安定しており、まだ問題はない。

「」

昨日の試合を振り返る。習得した技能の実践は出来たものの、未だ完全ではなかった。特に最後の瞬時加速、これの完成度は極めて低いものになってしまった。

「まあ、適当に瞬時加速を連発しただけだし…。当然か」

あの時、ブルー・ティアーズとの距離を詰めるには瞬時加速を使うしかなかった。が、一回の加速だけでは足りない判断した神楽は、スラスター四基を個別でチャージさせ、それを順番に開放した。

結果、従来の瞬時加速より長い距離を詰める事には成功したものの、最後のスラスター開放が上手くいかず失速、そのまま攻撃を受け続け、敗北した。

「あの後千冬姉さんには怒られるし、オルコットさんには爆笑されるし、散々な一日だったな…」

全力で走りつつ溜息をつくという何とも変な図ではなるが、それだけ昨日は大変だったのだろう。実際、彼が自室に戻ったのは夜九時。本来なら校則違反コースである。

「負けたのは私だし、仕方ないと言えばそれまで…か」

その眩きが終わる瞬間、ジャージのポケットから音が鳴り響く。走る前にセットしておいたタイマーだろう。考え事をしている内に一時間が経過してしまっただらしい。

神楽はポケットから携帯を取り出し、タイマーを止めるべくタッチパネルに指を添える。

「ふう……。一時間はまだ余裕みたいだ」

「へえ、すごいね。あれだけのスピードで一時間も走っておきながら、まだ余裕あるんだ？」

何故貴女がここに居る。

タオルで汗を拭いていた神楽の隣に、一人の女性が立っていた。この学園の制服を着ているという事はココの生徒なのだろう。リボンの色は黄色、つまり二年生だ。

「あ、いきなりごめんね。ささ、私の事は気にせず気にせず」

「気にします」

はあ、と本日数発目の溜息をつき、もう一度神楽はその女性へと視線を向ける。青い髪に赤い瞳、整った容姿をしたその少女は、人懐っこい猫を彷彿とさせるような笑みを浮かべている。そして片手には、何故か扇子が握られていた。

神楽の視線に気付いたのか、いきなり顔を近づけてくる少女。その顔は先ほどの笑みで固定されている。神楽は苦笑でその笑みに応えていた。

「ん〜……君、本当に男の子？ 女装とかしてみない？」

「しません。それから、私は正真正銘の男です」

「そっか、残念だな〜」

近づけていた顔を離し、扇子を広げて口元を隠す少女。その奥にある口が笑みを形作っているのは簡単に想像出来る。

「……おはようございます。更識先輩」

苦笑から笑顔に表情を変えた神楽は、目の前で笑っている少女“更識楯無”へと朝の挨拶を贈る。それを聞いた少女はクスクスと笑っていた。だがその声は誰かを不快にさせるようなモノではない。そして、その身に纏う空気はどこか神秘的だ。

「うん、おはよう。少し早めに目が覚めちゃってね。少し散歩をしていたのよ」

(…………お年寄り?)

パン！

「んふふ……。今、失礼な事考えなかった？」

「…痛い」

笑顔のまま神楽の前頭部に閉じた扇子の一撃を加えた楯無。その一撃はかなり痛かったらしく、神楽は笑顔のまま前頭部を両手で摩っている。

「そうそう、織斑先生からの伝言。今日の放課後から特訓開始、だそうよ」

「分かりました」

神楽は頷くと、部屋に戻る為にとってきた荷物をまとめ始めた。

「いや、今日の放課後が楽しみだね！。」

「……お手柔らかにお願いします」

「それはどうだろうね。織斑先生が許すかな？」

「無理でしょうね」

「んふふ〜」

さらば、私の平和な日々。

今までの生活で、放課後とはすなわち“読書タイム”だった。が、今後はそれも難しいだろう。スパルタティーチャー千冬と、目の前にいる純粹愉快犯楯無。この二人による特訓なのだから、地獄に一直線なのは考えるまでもない。

「それじゃねー。逃げちゃダメだぞ」

笑みのまま固まっている神楽を見て小さな笑みを零す楯無。そのまま彼女は神楽の隣を通過し、校舎へ向かって歩いて行った。

「……逃げたい」

神楽はそう言って笑うと、荷物を片手に部屋へ戻るべく歩を進める。

神楽の首にかけられた銀色のロケットペンダントが、朝日を浴びて光り輝いていた。

セシリア・オルコットとの試合が終了し、ピットに戻った神楽を待っていたのは、仁王立ちした織斑千冬だった。

「……………」

「……あははは」

無言に千冬に睨まれ、そのまま説教が始まる。最初のフラフラ飛行から始まり、射撃精度の低さ、弾道予測の甘さ、反動制御、戦況予測などなど、ダメ出しされた部分はかなりの量だった。というか、ほぼ全てである。

そんな説教が一時間以上続き、最後の方ではセシリア・オルコットが神楽のいるピットまで来ていた。千冬に説教食らっている神楽を見て笑っていただけだったが。

そのセシリアも数分後には消えており、それから更に数分が経過した今でも説教は続いている。

「最後の瞬時加速、あれは何だ？ 出来もしない事を堂々と披露するな、馬鹿者が」

「…仰る通りです」

一時間以上正座をさせられていた神楽だが、足の痺れなどは特に無かった。これも日々の鍛錬の賜物だろう。それ以上に千冬の睨み攻撃の方がよっぽど威力がある。それこそ、人を殺せてしまうのではないかという程に。

そんな睨みを受け続けている神楽。そのタフさは相当なものだ。

「お前の頭は空っぽか？ いつも読んでいるのは白紙のノートか？」

「返す言葉も御座いません」

「何か返せ、馬鹿者」

「パン！」

「…痛い」

正座している神楽を持つている書類でバシバシ叩く千冬。それを遠くから見ていた真那は終始オロオロしっぱなしである。だが流石は元日本代表候補生、すぐに頭を切り換え、千冬に近づく。

「お、織斑先生。そろそろ本題に入らないと。“彼女”も持たせてしまっていますし……」

そう、まだ本題に入っていない。その本題を終わらせなければ、何時まで経っても神楽は正座のままだ。

「……まあいい」

「はあ……」

仁王立ちを解き、神楽に背を向ける千冬。神楽も安心したのか、気の抜けた溜息を零す。

「最後に一言、言うておく」

「はい！」

突然こちらに振り向いた千冬。表情まではよく見えないが、神楽はそれを確認するまでもなく姿勢を正す。

それを見た千冬は小さい溜息をつくが、そのまま続けた。

「試合最後の数分間は、よくやった」

「……は、はあ？」

千冬 of 言葉は依然鋭い刃物のようだが、その内容は先程と違い、神楽を褒めるものだった。

………明日は世界滅亡？

そんな失礼な事を考えている神楽だが、それを表には出さない。正座のまま固まっているが。

千冬は言いたい事全てを言ったらしく、手に持っていた書類を真那に預け、代わりに手渡された端末の画面に目を向ける。神楽は硬直から回復すると正座を解き、千冬の目の前で直立。ちなみに服装は未だISスーツのままだ。

「さて、本題に移る。明日の放課後から、お前にはISを用いた訓練を受けてもらう。拒否は許さん。反論も許さん」

千冬は端末の画面を見ながら説明を続ける。隣にいる真那も千冬と同じ端末を見ており、その表情は真剣そのものだ。授業中生徒にからかわれて赤面している教師には見えない。

その話を真剣に聞いている神楽だが、一つの疑問が頭に浮かんだ。だが千冬の説明が続いているので、それは後回しだ。今質問したら、話を最後まで聞け馬鹿者攻撃がくるに違いない。

「訓練はデータ収集を兼ねている為、私か山田先生が付く。基本第四アリーナを使用するが、明日は第六アリーナを使用する。覚えておけ」

「はい」

千冬の言葉をしっかりと記憶し、頷く。忘れたら悲惨な事になるだろう。

そんな中、突然ピット搬入口が開き始める。斜めに噛み合う防壁扉、その奥から一つの大型コンテナがゆっくりと運び込まれてきた。そのコンテナの隅には、黒いペンキでこう書かれていた。

“Nameless”と。

千冬は端末から一度目を離し、体をコンテナへと向ける。それに合わせて真那と神楽も体を動かした。

「時入。今日ISを装備してみて、どうだった？」

「最初は戸惑いましたけど、慣れれば問題ありませんでした。自分の体と同様に動かせる、そんな感じでしょうか」

「…そうか」

神楽を一瞥した千冬は、端末の画面へと目を向ける。その画面には、あるISのステータスが表示されていた。そしてその端末を操作した瞬間、コンテナが開いていく。

そこにあっただのは、白銀の鎧だった。いや、鎧というよりは装甲をゴテゴテ付けただけの装甲服といった印象だ。だが、神楽には分かった。

それがISだという事が。

「今朝方学園に届いた。お前の専用IS“無銘”むみょうだ」

「無銘……」

神楽の頭の中にあつた疑問、その一つが訓練で使用するISの事だつた。目の前に鎮座するこの白銀のISが神楽の専用機ならば、訓練はこれを使用する事になるのだらう。疑問の一つが氷解した。

そして、先程のコンテナに書かれていた文字 “Nameless” の意味も理解した。

「なるほど……名無し、ですか」

「ああ。どうしてこの名前なのかはよく知らんが、何とも妙な名前だ。名付けた奴は馬鹿だな」

そう断言する千冬を見て苦笑する神楽。それに気付いたのか、千冬が視線だけを神楽に向けた。睨まれた神楽は少しビクつくが、すぐいつもの笑顔に戻る。

「…余裕だな」

「いえ、結構テンパってます」

これは事実だ。実は試合中から既にテンパツていたりもする。顔には出ていないが。

「…次に、お前の訓練に関する事だ」

そう言うと、真那が一人の生徒を連れてきた。リボンの色からして二年生だろうか。青い髪と赤い瞳、そしてどこか神秘的な印象がある。その顔には、柔らかい笑みを浮かべていた。

真那は神楽に目を向けると、隣にいる少女の紹介を始めた。

「彼女は“更識さらしき楯無たてなし”さん。この学園の二年生で、なんと生徒会長さんです！」

真那に紹介された楯無はゆっくりと歩を進める。そのまま神楽の目の前で停止し、突然扇子を開いた。何故かその扇子には「天晴」の文字が浮かんでいる。

「更識には当面、お前のコーチを務めてもらう。安心しろ。現段階でこいつより高い技量を持つES操縦者は、この学園に存在しない」

「そついで事〜」

神楽の前にいる少女、更識楯無はそう言つと、神楽の眼前へと顔を近づける。甘い香りが神楽の鼻をつくぐ、神楽は苦笑のままそれを流していた。

「更識楯無だよ。よろしくね、時入神楽“副生徒会長”」

ちよつと待て。今この人はなんて言つた？

時入の首がまるで油の足りていない機械の如くギギギツと音を立てて旋回し、神楽の横に来ていた千冬へと顔を向けた。その表情は笑顔だが、かなりの量の汗が流れている。

「言い忘れたが、お前は本日付けで生徒会に所属してもらつ。役職は副生徒会長。お前なら余裕だろう？」

「いえ、何と言いましようか……。というか、相談も無しですか？」

「必要の無い事はしない。面倒だ」

「教師の言つ事ですか、それ」

「黙れ」

「…はい」

以上、教師と生徒の会話。

とてもそうは聞こえない会話だが、気にしてはいけない。これこそISS学園クオリティなのだから。

千冬と会話を終えた神楽は目の前にいる楯無へと目を向ける。楯無もいつの間にか顔を引っ込めており、開いた扇子で口元を隠している。笑っている事はまる分かりだが。

「君も知っているように、この学園の生徒は部活動か生徒会、どちらかに必ず所属しなきゃいけない。私としては、君の過去の経歴から生徒会に所属してもらえると助かるなーってね。生徒会権限万歳」

「私の意見は」

「無視」

「ですよねー」

ハツハツハと泣き笑いしながら頂垂れる神楽。そんな神楽を尻目に、楯無は説明を続けた。

「時入神楽。中学では二年より生徒会に所属し、三年時には生徒会長に就任」

いや、説明ではない。それは神楽の経歴だ。

「当時君のいた中学の生徒会は、結構荒れちゃってたみたいだね。男子と女子の対立？」

「ええ、まあ…そんな感じでしょうか」

いつの間にか復活していた神楽は、楯無の質問に答える。楯無はそれを訊いて「ふ〜ん」と、どこか含みのある笑みを浮かべた。だがそのまま話を続ける。

「君が一年生の時、生徒会長と副生徒会長の仲は最悪だった。文化祭などの学校行事に影響が出てしまう程にね。でも君が二年生で副会長になった途端、生徒会の機能が回復した。なんでかな？」

「なんででしょう？」

華麗なスルー。それを見た楯無は笑いながら扇子を閉じ、そのまま続ける。

「そんで君が三年に進級して、そのまま生徒会長に就任。その年の文化祭は大成功！。めでたしめでたし」

その年の文化祭、それは神楽もすっかり覚えていた。教師たち曰く、ここ数年で一番盛り上がった文化祭だったそうだ。神楽自身、色々と貴重な経験を積めたと思っている。特に演劇は楽しかった。

「ですが、私ではち

「ちなみに『力不足です』って言い訳は無しね〜」

「はあ〜」

降参、という事だろう。両手を挙げて溜息をついた。それを見た楯無は「よしよし」と頷いている。これで放課後の読書タイムは完璧に駆逐された。さらば我が至福の時。

「しばらくは訓練を優先するから、それまでは生徒会室に顔を出さ

なくてもいいよ。落ち着いたら他のメンバーも紹介するし、仕事もお願いするから」

相変わらず、その顔には人懐っこい笑み。扇子を右手で閉じたり開いたりを繰り返しているが、扇子が開く度に「紹介」や「仕事」などの文字が浮かんでいる。不思議な扇子だ。

「更識、話は終わったか？」

「はい。ひと通り」

「そうか」

無銘の脇で楯無と神楽の会話を聞いていた千冬が二人に近づく。楯無はそれを察知すると、神楽の前から一步引いた。神楽も後ろから近づいてくる千冬に体を向ける。

「これから無銘の『フォーマット初期化』と『フィッティング最適化』を行う。それで今日は終了だ。部屋に戻って休め」

千冬は言い切ると、隣に控えていた真那に目をやる。それを見た真那は頷くと、手に持っていた分厚い本を神楽に手渡す。そこには『IS起動におけるルールブック』と書かれていた。

「これをしっかり読んでおいてくださいね。面倒だとは思いますが
ど
」

「おおおおおおう」

「えっと…時入くん？」

真那に本を手渡された神楽は、目を輝かせながらその本を見つめていた。このIS学園には数名の専用機持ちが在籍しているが、これを手渡されてこの反応をしたのは神楽が初めてだろう。楯無はそれを見て「ふふっ」と笑っている。

「山田先生、あまり気にするな。いつもの事だ」

「は、はあ」

千冬は真那にそう告げると、目を輝かせたままの神楽に近づき、端末で頭を叩く。

“端末”で頭を叩く。大事な事なので二回言っておこう。

「…今、ゴスつていいましたよ。織斑先生」

「呆けているお前が悪い。とつとと準備をしろ、馬鹿者が」

叩かれた神楽は余程痛かったのだろう。叩かれた瞬間、手に持っていた本を落としてしまっている。下手をすれば流血ものだ。

千冬は神楽の悲痛な叫びを切り伏せ、無銘を装着するよう指示を出す。神楽は落としてしまった本を拾い上げ、それをピットの脇へと置きに向かう。

「装着方法はリヴァイヴと変わらん。とつとと済ませるぞ」

「了解です」

神楽は装甲を開いている無銘に背中を預けるようにして座る。それを感知した無銘が装甲を閉じ、早速フォーマットが始まる。

フォーマットそのものは短時間で終わったらしく、次にフィッティングが始まった。この二つが終了する事で、無銘は神楽の専用機として機能する。

ズキン！

「　っ！！」

だが突然、神楽の頭に激痛が走った。それは神楽が今まで感じたことがない程の痛みであり、思わず顔をしかめる。まるで頭の中を掻き乱されているような、そして欲しくもない情報が一気に流れてくるような、そんな不快感すら覚える。

拒絶反応？

そんな考えが神楽の頭に浮かぶが、痛みで考えが纏まらない。

だがしばらくして、その痛みが少しずつ引いていくのを感じた。痛みのでいで歪んでいた視界も安定してきている。

『どうした時入。何か問題があったか？』

管制室に戻った千冬から通信が入る。だがその頃には痛みも失せており、フィッティングは恙無く進行していた。

「いえ、問題ありません」

『そうか。なら作業を続行しろ』

痛みが引いた後、神楽はその不思議な感覚に戸惑っていた。

リヴァイヴの時には感じなかった、爽快感に似た何か。

体が軽い。視界が広い。機体が違和感なく、自分の考えていた以上に動く。

「これが……無銘」

自身が纏う、白銀の装甲。

それを見た神楽は、何故か心から笑うことが出来た。

本当に、久しぶりの“笑み”だった。

「ふあゝ……眠みい」

朝ほSHRが終わった瞬間、織斑一夏は大きな欠伸をした。最近
は幕と同じ部屋で眠る事にも慣れてきた一夏だが、数日先まで迫っ
てしまっているイギリス代表候補生セシリア・オルコットとの試合
が気になりすぎて、なかなか寝付けないでいる。その結果が、この

大きな欠伸だ。

「おはようございます、一夏」

「ああ、おはよう神楽」

そんな一夏の席にやってきたのは、同じ男性の神楽だった。一夏の眠そうな表情を見て、呆れたような笑みを浮かべている。

「そんな顔で一時間目を受けないで下さいね。織斑先生の授業ですから」

「うげえ。そうだった……」

机に垂れる一夏。神楽はそれを見て可笑しそうに笑っている。そして、その光景を教室後方の席から見ていた少女たちがいた。

「織斑さんと時入くんって、仲良いよね」

「ホントホント。絵になるな」

「写真写真！ 売りまくるぞ〜！」

「ま〜だ商売してるよこの子は……」

「でもホント、仲良いよね」

「うんうんっ！ なんかこう…禁断の関係になっちゃいそう？？」

「……それは無い無い」「……」

変な方向へと妄想機関が暴走を始めた一人の少女。その周りの少女たちは呆れ顔でそれを見ている。

その少女たちを遠くから見ている人物がいた。篠ノ之箒だ。

「……駄目だ。分からん」

一夏の席で楽しそうに会話をしている一夏と神楽。この二人が数年前まで絶交状態だったとは思えない。そして、そんな関係からどうやってここまで回復したのか、その謎ばかりが大きくなる。

箒は窓の外を見る。青い空が広がっているが、箒の心の中は曇天だった。

「ええい！ 考える私！ 考える！」

「し、篠ノ之さん…？」

自分の席で突然唸りだした筈。それを見ていた隣の席の女子は、いつもの冷静な筈とのギャップに驚き硬直している。それに筈は気付いていないようだ。

視線のみを動かしその様子を見ていた神楽は、目の前でぐったりしている一夏と見比べる。そして、再び笑みを浮かべた。

「一夏、彼女と同室だそうですね？」

「あ？ ああ、まあな」

そう発言するものの、一夏はやはりぐったりしていた。やる気が微塵も感じられないとはこの事だろう。

「私と君が同室になると思っていたのですが…不思議な組み合わせになりましたね」

「千冬姉曰く、お前と俺を組ませると、便利な事より面倒な事が多くなるんだと」

「ふむ……。 “宝物” は分散させておく……という感じなのでしょうか？」

「さあな。そこら辺は千冬姉に直接訊いてくれ。俺はよく分からん顔をこちらに向け、少し乾いた笑みを浮かべる一夏。神楽は呆れているようで、右手で頭を押さえている。

一夏と神楽のやり取りは中学の頃から変わらない。ずっとこんな感じだ。

「あら、ご機嫌よう、時入神楽さん？」

「ああ、おはようございます。オルコットさん」

一夏の席まで寄ってきたのは、セシリア・オルコットだ。その顔は勝ち誇ったような笑みが浮かんでおり、昨日の勝敗がこの表情一つでまる分かりである。

「昨日は残念でしたわね。まあ代表候補生相手にあれだけ粘った

のですから、善戦した方ではなくて？」

「こちらこそ、オルコットさんの戦いぶりには感服しました。流石は代表候補生ですね」

「……皮肉ですね？」

「いえいえ、滅相もない」

セシリアの表情が少し厳しいもの変わるが、神楽はいつも通りの笑顔。実際、神楽は皮肉っている訳ではなく、ただ単純な感想を述べているにすぎない。が、セシリアにはそれがどうしても皮肉に聞こえてしまうのだろう。

厳しい表情だったセシリアは咳払いを一つすると、またいつもの偉そうな笑みを浮かべ、手を腰に当てている。そして、その視線を一夏へと向けた。

「なんなら、私の戦闘データを彼に見せて差し上げたら？ 参考になると思いますわよ？」

机にへたっていた一夏は、その一言で起き上がる。そして、そのままセシリアの睨みつけた。

「必要ねえよ、そんなの」

「あら、強がりですか？」

「強がりでも何でもなく、ただ必要ないだけだ」

セシリアと一夏の睨み合い。クラスメイトたちには、その間に火花が見えている事だろう。

その最中に動く人物がいた。神楽だ。

「まあまあ二人とも。数日後には試合なので、今戦わなくてもいいでしょう？ そろそろ一時間目も始まりますし……」

神楽が言い切った瞬間、一時間目の予鈴が鳴り響く。その音を聞いたセシリアは「ふんっ！」と言って回れ右、自分の席へと戻っていった。

一夏はその背中をしばらく睨んでいたが、神楽に名前を呼ばれて席に着いた。

「オルコットさんとの試合、頑張ってくださいね」

「おう、任せとけ。箒にISの事、教えてもらえる事になったしな」
「……………そうですね」

話し終えると、神楽も自分の席へと戻っていった。その顔には少し複雑な笑みが浮かんでいるようだが、それが分かる人物はこのクラスにいないだろう。

神楽が席に着く。それとほぼ同時に教室のドアが開き、黒いスーツ姿の千冬が入ってきた。

さあ、今日も一日頑張ろうか。

自分の胸元で光る菱形のロケットペンダント。待機状態である“無銘”に視線を一瞬向け、すぐテキストに戻る。

今日の放課後から本格的な訓練が始まる。

篠ノ之箒の対応よりも今はそちらを優先したい。そう考えた神楽は、処理すべき事項の優先順位を切り換え、学習に集中した。

パァン！

「痛っ!!」

今日も朝から、千冬の出席簿が火を噴いていた。

第六話 新しい日常

『俺は世界で最高の姉さんを持つたよ』

アリーナの中に、織斑一夏の声が響き渡る。

一夏の専用IS“白式”。ファーストシフト一次移行が完了し、今までただの近接戦用実体ブレードだった白式唯一の武装が、今はその刀身に青白いエネルギーを纏う剣へと変貌していた。

イギリス代表候補生“セシリア・オルコット”と、男でISを使える稀有な存在“織斑一夏”。この二人が今、アリーナで死闘を繰り広げている。

一年一年のクラス代表を決める為に催されたこの試合。開始当初はセシリア・オルコットの圧倒的優位であったが、それは一夏の白式が一次移行も済んでいない、初期設定の機体で戦っていたからだ。

今の白式は一次移行を終え、その性能は数分前と比べて飛躍的に向上している。それこそ、セシリアの優位性を覆してしまいかねない程に。

「へえー」

女子たちが歓声を上げ、セシリアと一夏を応援するアリーナの観客席。その最後列の席で、神楽は足を組みながら試合を観戦していた。本来なら彼の周りに女子たちが砂糖に群がる蟻の如く集まってくるのだが、神楽は今回、試合が始まってからこの席に着いていた。その為、殆どの女子が神楽がそこにいる事を認識していない。皆試合に夢中になっているようだ。

「出力はオルコットさんのブルー・ティアーズより上。でも装備は手持ちの刀“雪片式型”だけ……」

肉眼で見ただけで白式の出力が分かるかといえば、それは否だ。

神楽はこの試合中、自分の専用機である“無銘”のハイパーセンサーのみを部分展開していた。

無銘を使用するようになって数日が経過した今、神楽は訓練を兼ねて、暇があればこうしてISを展開している。殆どは部分展開だが、それだけでもいい練習になるようだ。実際、神楽が無銘を呼び出すのに掛かる時間は一秒以下、一瞬と言っても過言ではないレベルまで来ている。

「…あの刀、なんだ？」

白式を見ていた神楽は、その特異性に気付く。

先程の一次移行、その変化は機体だけでなく、白式唯一の兵装で

ある近接戦用ブレードにまで及んでいた。今まで実体剣だったそれが、今ではエネルギー剣へと変化している。おそらく実体とエネルギーの切り換えが出来るようになったのだろう。

だが、それとは違う変化を無銘のハイパーセンサーは捉えていた。

「雪片式型へのエネルギー出力確認。シールド残量低下……。そして識別名“零落^{れいらくびやく}白夜”……。まさか、第一形態で単一仕様能力を？」

ハイパーセンサーが捉えたその変化、それは白式の“ある機能”が目覚めた事を示していた。

ワン・オフ・アビリティ
“単一仕様能力”

ISが個々に持つ固有能力であり、操縦者との相性が最高潮になった際に発動する特殊能力の事である。本来は第二形態から発現するとされているが、例え第二形態に移行^{シフト}したとしても、発現する確率は極めて低い。

そんな能力を、白式は第一形態から使用している。発現確率が只でさえ低いその能力を。

だが、そんなデータを表示する無銘のハイパーセンサーも相当なものだ。

今までの訓練で分かった事だが、神楽の専用機である無銘はデー

タの収集や分析に長けているらしい。ハイパーセンサーで該当ISを“見る”だけでそのISのデータを入手し、武装データまで分かっってしまう。学園技術部門と製造元である倉持技研の見解では、この無銘はともISの“コア・ネットワーク”に何らかの干渉が出来るらしい。

相手のデータが分かるだけでなく、そのISの動作を収集蓄積、それを分析し、予備動作を把握する事で相手の動きを読む事も理論上は可能。操縦者の洞察力や判断力が高ければ“未来予知”に近い事すら可能だという。技術者たちは、そんな事が出来るのは“ブリュンヒルデ”や“ヴァルキリー”ぐらいだろうとも言っていた。

「報告項目が一つ増えたか。まあ楯無さんの事だから、この試合も観ていると思うのだけど…」

更識楯無。つい先日出会ったその少女の柔らかい笑みが脳裏に浮かぶ。その笑みの奥にどんな感情が潜んでいるか分かったものではないが。

当初神楽は彼女の事を「更識先輩」、もしくは「更識会長」と呼んでいた。だが本人たつての希望により「楯無さん」に変わった。楯無曰く、更識だと妹も含まれてしまつて紛らわしいとの事。

そういえば……その妹さんつて、どんな人なんだろう。

神楽がそんな事を考えていた時、白式が動き出した。セシリア・オルコットのブルー・ティアーズが放つていたビット型兵器“ブル

「I・ティアーズ」、その弾頭型ミサイルの攻撃を避けるどころか切り落とす。反応速度が一次移行前に比べて格段に向上している。

だが、そのミサイルが切られる瞬間、白式の残り少ないシールドエネルギーが減少した。先程無銘が送ってきてくれたデータ通り、あの刃は自身のシールドエネルギーを攻撃に転用しているのだろう。

『おおおおっ！』

セシリアに肉薄した一夏が、その刀を全力で振るわんと構える。これが当たれば勝てる、そんな確信めいた何かが、一夏の中にあっただろう。セシリアも本能的にそれを察知したのか、その頬には汗が流れていた。

だが、その攻撃がセシリアのブルー・ティアーズに当たる事は無かった。

『試合終了。勝者　セシリア・オルコット』

その前に、勝敗が決まってしまったのだから。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果が、大馬鹿者」

ピットに戻った一夏を待っていたのは、仁王立ちした千冬だった。

一夏は自分が何故負けたのか理解出来ていないようだが、目の前にいる千冬という存在がその疑問を思考の奥深くへと一時的に引っ込ませる。

今ピットにいるのは一夏と千冬、箒と神楽、そして真那の五名だ。真那の手にはかなり厚みのある本　神楽にも渡した例の電話帳を持っている。

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身をもつて分かっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

「……はい」

啖呵切つて大敗したのだ。一夏もさぞ居心地が悪い事だろう。白式ガントレットを待機状態にして頂垂れる一夏を見て、箒は大きな溜息をつき、神楽はクスクスと笑っていた。

そんな中、真那は分厚い本を抱えて一夏に駆け寄った。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んで

おいてくださいね。はい、これ」

その分厚い本を手渡された一夏。受け取った瞬間に落としそうになるが、どうにか姿勢を正す。それだけの質量を誇るのだ、あの本は。

神楽もその本を持っているが、既に読み終わっている。内容はごく当たり前の事が多かった為、読み終えるのにさほど時間は掛からなかった。掛かってくれた方が神楽は嬉しいのだが。

そしてなんとなく、自分の胸元で光る銀色のロケットへと視線を落とす。待機状態になっている無銘、実はまだ誰にもその存在を明かしていない。これは楯無の指示だ。何故そんな措置を取るのか分からないが、神楽は楯無の指示に従っている。特に問題はないと判断した為だ。

今日の試合中も無銘のハイパーセンサーのみを展開していたが、先程も言ったように、最近はこうした芸当も難なくこなせるようになってきた。楯無の特訓の成果か、はてまた神楽自身の才能なのか、それは定かではない。

「何にしても今日はこれでお終いだ。帰って休め」

そう言われた一夏はトボトボと動き出す。神楽の隣にいた筈に「帰るぞ」と急かされ、二人は歩き出す。

「あれ、神楽はどうするんだ？」

帰ろうと荷物をまとめている一夏が、一步も動いていない神楽へと声を掛けた。神楽も一緒に帰るものだと思っていたのだろう。

「私は織斑先生にお話がありますので。一夏、今日はお疲れ様でした」

話しというのは、この後にある訓練の事だ。そして、今日の試合での報告もある。何とも忙しい事だ。

「マジで疲れた……。んじゃ、また明日な」

「ええ、また明日」

手を振る一夏に対して、笑みを返す神楽。その一夏の隣にいる筈はどこか複雑な表情を浮かべていたが、神楽は全く見ようともしない。ただ、ひたすらに無視を続けている。

その対応を見た一夏と千冬は神楽の過去、中学に入学したばかりの頃の神楽を思い出していた。あの時もまた、こうした対応をとっていたのだ。それも、クラスのほぼ全ての人間に対して。

「……一夏、行くぞ」

「あ、ああ」

篤と一夏がピットから出て行く。それを確認すると、神楽は千冬へと体を向けた。千冬もまた、神楽へと体を向けている。

「時人。どうだった？」

千冬の鋭い視線を受け、神楽は頷き、報告を始める。

「はい。無銘のハイパーセンサーで試合を観戦していましたが、間違いありません」

「そうか……」

今回確認したかった点、それは白式の事もそうだが、それ以上に無銘の“特性”である驚異的な分析能力を把握したかったというのがある。そして、この試合観戦でそれは確認できた。

千冬は神楽の返答を聞き、想定していた事を確信へと変えた。

「…今日の訓練は回避機動だったか」

「はい」

だが、その思考は今すべきではない。まだ無銘の全てを知る事は出来ていないのだから。

そして、一夏の専用機である“白式”の事も、何も分かっていない。

最近は何からない事だらけだ。

「やあやあ、ちゃんと来てるねー」

千冬が考えに耽っていると、ピットのドアが開く。そこにいたのはIS学園生徒会長である楯無だ。いつもの扇子を右手に、相変わらず人懐っこいような、そしてどこか無邪気な子供のような笑顔を浮かべている。

「PICのマニュアル制御にも慣れてきたかな？」

「まだ完璧という訳ではありませんけど、それなり、とは言えるかと」

「そか。まあ現段階では十分だよ」

楯無はそう告げ、神楽の前に立つ。背の高い神楽が見下ろす形となつてはいるが、実際の主導権は楯無が握っている。まあ、その主導権が行使されるような事は今のところないのだが。

「更識。今日の試合は観たな」

「はい、バッチリです」

やっぱり、と神楽は心の中で呟く。当初の話では彼女は生徒会の仕事で忙しいから見れないと言っていたが、彼女がこうした「楽しい見せ物」を見逃す筈はないのだ。どうせ仕事をほっぽってきたのだろう。後で処理する他の生徒会メンバーが可哀想だ。

「織斑一夏と白式の事を後々任せるかもしれん。時入を早めに仕上げてください」

「分かってます。というか」

千冬と話していた楯無は、自分の前から移動してピットの中央に行き、ISを展開しようとしている神楽へと目を向ける。その格好

はいつもの制服だが、最適化を行つた専用機にはISスーツも粒子化して保存されている。その為、着替えるという“手間”がないのだ。授業では普通にロッカーで着替えているのだが。

「彼の覚えの早さは驚異的です。身体能力も高い。肉体的なハンデはありますけど」

肉体的なハンデとは視力などを指しているのだろう。常人に比べて若干劣る程度ではあるが、それが勝敗を分ける事もある。だが神楽の場合、対象の“色”や“形”、そして“音”である程度の距離や動きは判断できる。そこにハイパーセンサーによる補助が加わる為、ISを装着すればそのハンデも消えてなくなる。というよりも、常人より優れている筈だ。

そんな事を話している内に、神楽は無銘を展開してピットを文字通り飛び出し、アリーナの中央部で着地した。いや、正確に言えば浮いている。ほんの少しだけではあるが。

神楽が右足を動かす。浮いていた右足が大地に触れ、土埃をあげる。そのまま自身を中心とした円運動を行い、地面に直径一メートル程度の円を描いた。その仕草からすると、この訓練も初めてではないらしい。

そうして描かれた円。その中央で神楽は一息つくつと、管制室と楯無に向かつて声を掛ける。

『準備完了しました。いつでもどうぞ』

神楽の言葉を確認すると、千冬はアリーナ上に自動射撃型のオート・ターゲットを展開した。宙に浮く球体型ターゲットの数は五十。それらは全て自ら描いた円の中心にいる神楽を包囲するような位置へと移動し、照準を神楽に固定する。

それを確認した神楽は気を引き締める為に深呼吸を一つ。それが終わる頃には、神楽の顔から笑顔は消えていた。その目が見つめているのは、自分を包囲するように展開されているターゲットに注がれている。

「それじゃあ

始め！」

楯無の声と連動し、オート・ターゲットが攻撃を開始した。全方位からの不規則攻撃、これを五分間避け続けるのが今回の訓練内容。しかも地面に描いた円、その中のみを行動可能範囲とし、円から出た時点でこの訓練は強制的に終了となる。

「
」

神楽はハイパーセンサーの送ってくるデータに意識を集中、ほんの少しだけ体を動かす。

ヒュンッ！

先程まで右肩のあった場所にレーザーが飛び込み、何にも触れることなく地面に着弾する。

それを確認する事なく、神楽はまた少しだけ体を動かす。

ヒュンッ！

レーザーが神楽の頭部を穿つ　事はなかった。レーザーはその残滓を残し、地面に着弾。

少しだけ、右足を内側にずらす。

ヒュンッ！

今度は体を右に少しずらし、頭を左に傾ける。

ヒュンッ！　ヒュンッ！！

神楽の視界は三百六十度。つまり全方位だ。これはハイパーセンサーの補助によるものだが、神楽自身、最初は少し気持ち悪かった。まるで自分が“人間でなくなってしまう”ような錯覚すら覚えた。

その感覚に襲われたのが数日前、初めて無銘を装着した時だった。今ではそんな感覚もなくなり、ハイパーセンサーが自分の目であるという感覚を認識していた。

ヒュンッ！ ヒュンッ！ ヒュンッ！

自分でも不思議だと思う。ハイパーセンサーの情報もすごいとは思うが、それに従って体が勝手に動く。それは訓練を重ねる事に繊細かつ正確なものへと変化しており、直径四メートルの円で訓練していた数日前が懐かしい。

「更識。あいつがP.I.Cのマニュアル制御を覚えたのはいつだ？」

管制室でモニター越しに訓練を眺めていた千冬が、神妙な顔をしながら隣にいる楯無に質問を投げかける。その目はモニターを睨んだままだ。

楯無も目は千冬に向ける事なく、口の前で広げていた扇子を閉じた。その口は笑っている。

「最初に知識を教えたのは三日前。彼が勝手にやり始めたのは二日前です」

モニターに映される無銘とオート・ターゲット、そして直径メートルの円。

その円の中で神楽は舞い、円の内側、その地面はレーザーが着弾した際につける弾痕で色が変わっている。絶え間なくレーザーの攻撃に晒されているのだから当然だろう。

神楽の動きは繊細過ぎた。四日前の訓練でそれを認識した楯無は、三日前、神楽にPICマニユアル制御を教えた。オートだとどうしても機械の補助が入り、それが神楽本来の動きを阻害していると判断したからだ。だが、教えたと言っても「こんなのもあるんだよ」とその存在を少し明かしただけ。その制御方法は何も教えていない。

だが、神楽はその制御を二日前の訓練から実践し始めた。その日は円の大きさを三メートルに狭め、ターゲットの数を十から三十に引き上げた。

神楽はそれを、難なくクリアしてしまった。

そして今日、円の大きさを一メートルまで狭め、ターゲットを五十まで増やした。神楽には言っていない事だが、ターゲットの射撃間隔も狭め、弾幕を濃くしている。

その結果は、見ての通りだ。

「四分経過。でも被弾はゼロ。あの子には私もビックリです。国家代表にでもなるつもりでしょうか？」

楯無が口元を緩めたまま、隣で腕を組んで立っている千冬へと目を向けた。だが千冬は楯無を見ることなく、鼻で笑うだけだった。

「アイツの事だ。ただ目の前に“壁”があるから崩して前に進んでいるだけだろう」

そんな中、神楽の右肩にレーザーが着弾した。かのように見えた。だが神楽は右肩装甲を部分的に格納してそれを避ける。レーザーを避けきった事を確認すると、再び右肩装甲を展開する。この回避方法は誰も神楽に教えていない。

「だが、一つ気がかりな事がある」

「奇遇ですね。私もです」

二人が持つ疑問。それは彼のIS“無銘”の事だった。

訓練を開始したのは先週の木曜から。だというのに、無銘は変化していない。

そう、未だ一次移行すら起こっていない。

「初期化も最適化も、初日に終わってる筈。なのに彼の機体は初期設定のまま。本来起きる一次移行が起きていない」

神楽が手足のように扱う無銘。それはこの学園に届けられた状態のまま、無骨な金属の固まりだった。神楽曰く「しっかり動くのですから、別にいいのでは？」だそう。

千冬も開発元とされている倉持技研に問い合せてみたものの、その回答は一切ない。いや、正確には彼らも分からないのだ。倉持技研はおそらく、無銘の“開発元”ではない。

『 織斑先生、楯無さん。終わりました』

そんな声が管制室に響く。二人が考え込んでいる内に五分が経過してしまっただようで、神楽が弾痕だらけの円の中で立っていた。

結果は被弾ゼロ。円から逸脱した形跡もない。完璧である。

「なら次の訓練に入る。更識」

「はいはい。いってきます」

楯無は笑いながら言うと、管制室を出てピットへと向かう。次は近接戦闘における回避訓練、つまり楯無が必要なのだ。

何故ここまで回避訓練ばかりなのか、という疑問が浮かぶ人もい

るだろう。

その理由は簡単。今の無銘に、攻撃兵装は一切装備されていない。

「やれやれ…とんだ欠陥機だな、アレは」

千冬が溜息と共に呟く。

装備させたくてもISが拒絶して量子変換^{インストール}出来ない。仕方ないので他のISの装備を使用^{アンロック}許諾させて使わせようとした時もあったが、持たせた瞬間にハイパーセンサーが“死んだ”。

一次移行すれば何か変わるのかもしれないが、現状はこの有様だ。

「白式といい無銘といい、お前が関わった機体は全て癖が強い」

アリーナの上では楯無が既に自身のISを展開、その槍先を無銘へと向けている。

「次会った時には一撃食らわせてやる。覚悟しておけよ 束」

白式や無銘の開発者の欄にはない“天才”の名前を呟き、千冬は訓練開始の号令を放った。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一撃がりでいい感じですね！」

そんな発言が教室に響き渡ったのが、今日の朝。

それを聞いた一夏は当然硬直し、神楽はクスクスと笑っていた。

クラス代表。それは本来、昨日の試合で勝った方がなるべきものであった筈。それが何故か、負けた一夏が務める事になっていた。硬直もするだろう。

「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

しばらく硬直していた一夏がようやく動き出し、真那に手を挙げて質問する。

「それは」

「それは、わたくしが辞退したからですわ！」

一夏の質問に笑顔で答えようとした真那だが、突然の横槍で出鼻を挫かれる。一夏は真那の声を打ち消した張本人へと目を向けた。そこにいたのはイギリス代表候補生セシリア・オルコット、手を腰に添えたその姿はまるでモデルのようだ。実際、彼女のスタイルはそれだけのレベルであり、本国で似たような事をしていたのかもしれない。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のない事ですわ」

セシリアは満面の笑みで話しているが、彼女の言い放った“負け”という言葉聞いて一夏は頂垂れる。本人も気にしているようだ。あれだけ派手に負けてしまえば当然ではあるが。

その様子を見ていたセシリアは少し頬を赤くし、口を動かす。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒った事を反省しまして……。“一夏さん”にクラス代表を譲る事にしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

言い切ったセシリアをクラスの女子たちが褒め称える。彼女たちは一夏がクラス代表になる事を望んでいたのだ。この学園に二人しかいない男性が自分のクラスにいるのだから、そういった“希少存

在”を前に出したいと思う気持ちは分からないでもない。

しかし、まあアレだ。

「私は“専用機持ちの代表候補生”相手に“第二世代の訓練機”で戦わされたんですが……。どうなんでしょうね〜」

「どうなんだろうーねー」

近くにいた女子、通称“のほほんさん”が神楽の呟きに応える。それを聞いた神楽は苦笑し、一夏の方を見た。大きな溜息をつき、机に突っ伏している。

セシリアは未だ赤い頬を隠しつつ、何やら「わたくしがコーチになって差し上げて〜」と言っているが、それに反応した篤と視線と言葉による戦争を始めている。

平和な光景。

一夏の周りは、こうしていつも賑やかだった。

彼の人柄に吸い寄せられ、いつの間にかこうした空間が出来上がる。

セシリア・オルコットも、篠ノ之篤もその空間の住人となり、教室の中は一段と騒がしくなっていた。

だが一つだけ、忘れてはいけない事がある。

「黙れ馬鹿共」

バシンッ！

バシンッ！

バシンッ！

バシンッ！

この時間は、織斑千冬の管轄だと言つ事を。

バシンッ！

「あ痛」

何故だろう。何故かいきなり叩かれた。あ、五七五。

世の中理不尽である。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

異存はないだろう。なにせクラスの全員　一夏を除く　がそれを望んでいたのだから。当然、神楽もである。

神楽は叩かれた部分を軽く摩りながらテキストを鞆から取り出す。千冬がテキストを開いたという事は授業を開始するという事なのだから。

一夏は魂が半分ほど抜けてしまっているかのようにぼーっとしている。あと数秒あのみまだったら、また千冬の出席簿が火を噴く事だろう。それで復活するかは分からないが。

パンツ！

案の定、一夏の頭に出席簿が振り下ろされる。かなり痛かったらしく、無防備な状態で攻撃を受けた一夏は唸りながらテキストを開く。ちなみに涙目だ。

それを見ていた神楽は口元で小さな笑みを浮かべる。だがその後、視線を篠ノ之箒へと向ける。彼女も少し嬉しいのだろうか、口元が緩んでいる。

次に視線を右斜め前へと向ける。その席にいるのはイギリス代表候補生であるセシリアだ。その顔はうつすら赤く、口に右手を添えているが、その手の奥にある口は大いに緩んでいる事だろう。

「愁傷さま、一夏。」

神楽はそう心の中で呟くと、意識を授業へと向けた。

そういえば、今日の放課後は生徒会室に呼ばれていたな。

脳裏に浮かぶ楯無の顔。

その顔には、相変わらずの笑みを浮かべていた。

「ほい…ほい…ほい…ほい…」

放課後の生徒会室。そこで黙々と書類にハンコを押している一人の人物がいた。神楽だ。本来なら今日、この生徒会室で他のメンバーと顔合わせをする予定だったのだが、神楽が生徒会室に着いた時、室内にいたのは楯無だけだった。他のメンバーは私用で少し遅れるらしい。

他のメンバーを待つべく、最初は内ポケットから本を取り出した神楽だが、その目にあるモノが飛び込んできた。それがこの未承認の書類たちだ。

「ごめんね。初日にこんな仕事を押し付けちゃって」

「いえ、慣れてますから」

神楽の隣で書類を分別している楯無が少し申し訳なさそうに言葉を発する。だが神楽はそれを笑顔で返し、手をひたすら動かし続けた。こうした仕事は中学の時にも経験している為、そこまで苦痛ではない。

神楽が中学の生徒会に入ったのは二年の時だった。担任教師の推薦で選挙に立候補し、生徒会書記として学校行事へと関わるようになった。

だが当時、中学の生徒会は内紛状態だった。ISの登場による“女尊男卑”が原因だ。当時の生徒会長はその風を背に受けて女子が務めていたが、副会長の男子とよく言い合っていた。その火の粉が他のメンバーにまで及んだ事もある。そして、そんな生徒会が正常に動作する筈もなく、その影響が学校行事まで及んでしまった。

特に酷かったのが、二年の時にあつた学園祭だ。神楽や一夏が通っていた中学の学園祭は近隣からの評判もよく、演劇などは一般客にも公開されていた。

だがその年、演劇は出来なかった。生徒会が原因だ。

時間管理、備品の振り分け、会場の調整。それらを一括管理して

いた生徒会が内部分裂を起こし、仕事を拒否してしまったのだ。教師たちも途中から介入してきたが、それでも間に合わなかった。その年の学園祭に来てくれた一般客は、前年度の半分程度にまで落ち込んだ。

そして、それを一番悔しく思っていたのが演劇部員たちだった。皆その日の為に一生懸命練習し、セリフを覚え、絶対に成功させようと必死だった。だというのに、その集大成である学園祭での演劇発表がなくなってしまった。

学園祭自体は何とか終えたものの、その年の三年生は悔しかっただろう。演劇だけではなく、他の部活に所属していた三年も同じ気持だった。

だが、この年の学園祭にはちょっとした裏話がある。

この学園祭、実は二日間ある内の一日を取りやめ、一般客への開放を中止しようとした動きが教師たちの中で起こっていた。こんな無様な学園祭を見られたくないというプライドの問題もあったのだろう。

その案を取り下げさせ、二日間の学園祭を継続させたのが、当時生徒会書記であった神楽である。

生徒会は何も会長と副会長だけで成り立っている訳ではない。他のメンバーにはやる気もあつたし、絶対にやり遂げるといふ熱意もあつた。それを確認した神楽が、会長と副会長がするべき仕事を全て引き受け、生徒会をなんとか持ちこたえさせていたのである。

体育館での発表関係が出来なくなってしまうた分は、美術部など

に頑張ってもらい小規模の美術館を作り、一般客に開放した。

料理研究部には様々な料理のレシピを一覧にしてもらい、生徒会製のレシピ本を作成。それを一般客に配り、それだけでは駄目と判断した生徒会会計の発案で、様々な国の料理のレシピを入手、一つの教室にそうした料理の写真を飾り、レシピも共に貼りつけた。本当なら料理を振る舞いたかったのだが、それは止めておいた。中学は衛生管理などに厳しく、高等学校ほど自由に出来ないのだ。

そして野球部には近隣の中学にお願いしてもらい、公開試合を行った。地元の小学生が楽しそうに見ていたのを神楽は覚えている。そうした小学生には、先輩からのちよつとした指導も行った。

時入神楽“臨時”生徒会長率いる“臨時”生徒会によって、学園祭はこうして幕を閉じた。

三年になった神楽はその時に得た信頼によって正式に生徒会長に任命され、彼率いる新生徒会の活躍によって三年の学園祭は大成。一般客の入場数も過去最高を記録した。

「生徒会長と副会長、書記の三役を一人でこなした感想は？」

楯無が「んふふ」と含んだ笑いを顔に浮かべながら神楽に顔を向ける。神楽は手を動かしながら考え、そして苦笑した。

「いい経験ではありませんが、二度とやりたくありませんね」

「でしようね。私だったらグレちゃう」

「あははは…」

自分でも思う。よくグレなかったものだ。

だが神楽にとって、あの時の時間はひどく愛おしいものでもあったのだ。何せ自分は空っぽの存在、本来誰もが持っている“記憶”という名の“パーツ”が欠けていた。それをあの時間は一部でも補ってくれたのだから。

神楽の手が動き、楯無から流れ作業方式で送られてくる書類にハシコをポンポンと押していく。どちらも無言ではあるが、しっかりと仕事はこなしている。さすがは生徒会長と副生徒会長といったところだろうか。

「申し訳ありません。遅れてしまいました」

「遅れたよー。ごめんなさーい」

未承認書類の富士山が小山程度になった頃、生徒会室のドアが開いた。そこに立っていた一人は、赤いリボンをした少女。赤い、という事は三年だろう。この学園の最上級生である。眼鏡を掛け、髪型は三つ編み。どこぞの会社で社長秘書をやっているような立ち姿だ。

だが纏っている空気はそれほど固くなく、どちらかと言えば楯無に近い。

そしてもう一人、三年生の後ろから入ってきた少女は青いリボンをしていた。髪色は前にいる三年の少女と同じ栗色に少しピンクが混じったような色で、両サイドで髪を束ねている。眠たそうな顔をしているが、これが彼女のデフォルトなのだろうか。どこか動きもゆったりとしている。そして制服の袖丈が異常に長く、手がすっぽり隠れてしまっていた。

「あれ？ 貴女は私のクラスにいた……え……と……」
「のほとけほんね布仏本音”さん？」

「いえーい。かぐつちおひさー。ていうかよく私の本名知っているねー」

そう。後から入ってきた人物 “のほほんさん” こと “布仏本音” は、神楽のクラスメイトの一人だ。今日の朝も少し話した記憶がある。

彼女のあだ名である “のほほんさん” とは、一夏がいつの間にか口に使っていたあだ名だ。彼女の雰囲気によく合うあだ名だが、実のところ、一夏は彼女の本名を知らないだけなのだ。何せ入学当日の自己紹介は途中で止まってしまった。一夏と神楽で強制終了し、後は名簿か何かで名前を調べるしかない。一夏にはそんな暇などなかったのだ。

神楽の場合は、女子の会話から偶然彼女の名前を知った。一夏に教えようとも思ったのだが、小難しい単語に頭を抱えている一夏にそれを教えても覚えるか分からなかった為、とりあえず保留にしておいた。また機会があったら教えようとは考えているのだが。

「かぐつち？ ああ、私のあだ名か何かですか」

「そーだよ、いいでしょー？ ちなみに織斑くんは“おりむー”って名付けたー」

「おりむーですか。では織斑先生は“おりむー先生”ですね」

「おー、いいねー。言ったらどうなるか分からないけどー」

神楽が座っている席の隣に座り、笑顔でそんな雑談を始める神楽と本音。だが神楽の手はバツチリ働いていたりもする。中学で覚えた特殊能力だ。聖徳太子の如く、複数の人間から発せられた意見を一気に聞く事も出来る。

そんな神楽の前に一人の少女が歩いてきた。先程入室してきた三年の少女だ。その顔には笑顔が浮かんでおり、全身に纏うオーラもどこか優しい印象がある。

「貴方が時入神楽くんですね？ 私はこの子の姉で生徒会会計を務

めます“布^{のほとけうつほ}仏^{ぼつ}虚”といひます。これからよろしくお願いします」

丁寧なお辞儀をしてくる三年の少女“布^{のほとけうつほ}仏^{ぼつ}虚”は、どうやら神楽の隣で笑っている本音の姉らしい。確かに髪色も同じだし、どこか秀^{ひでり}囲^い気^きも似ている。性格は違つようだが。

神楽はそんな虚に対して、立ち上がつて「こちらこそ、よろしくお願ひします」と丁寧なお辞儀で返す。本音は嬉しそつに笑ひ、虚も笑顔を浮かべていた。

その光景を座つて見ていた楯無はポンポンと手を叩く。どうやら自分に注目して欲しいようだ。その思惑通り、全員が楯無の方へと顔を向ける。

「はいはい。自己紹介も恙無く終わつたわね？ そいじゃ虚ちゃん、お茶とケーキを用意してくれる？ ささやかだけど歓迎パーティーでもやりましょう」

「はい、お嬢様」

「ほらまた。その“お嬢様”つてのはやめてよー」

「あら、失礼しました」

歓迎パーティーの準備に入った神楽は、処理の終わった書類と未処理の書類を分けて机の上に詰め、椅子の配置を変える。それを本音が手伝い、虚は備え付けの冷蔵庫からケーキを取り出し、棚に置かれていたティーセットを準備する。随分本格的だ。

本音の話では、三人は幼なじみらしい。更識家に仕えているのが布仏家であり、虚と本音なのだそうだ。だから虚は楯無の事をよく“お嬢様”と呼ぶ。

「ほらほら主役。そんなところで話してないで、早く座りなさいな。私の紅茶が冷めちゃう」

会長席に足を組んで座っている楯無が手招きをしてくる。神楽はそれに応じて席へ座ると、虚が神楽の前に置かれたカップに紅茶を注いでいく。その香りだけでも気持ち安らぐ。

神楽の隣に座った本音はケーキを食べ始めていた。このケーキは本音のお気に入りらしく、先程から「うまうまー」と言って頬張っている。フィルムに付いたクリームを舐めようとしたら、机を挟んで反対側に座っている虚から書類の入ったファイルが飛んできたのは「愛嬌だ」。

「どうやらこの学園の生徒会はうまく回っているらしい。中学の頃のような生徒会もそれなりに刺激的ではあったが、やはりこうした生徒会の方が良いに決まっている。」

「うん…。この紅茶、とても美味しいです」

「でしょでしょー。さっすが虚ちゃん」

「ありがとうございます」

「ふえ〜ん。おでこにファイルが直撃だよ」

そんなのんびりとしたお茶会。その最中、楯無が紅茶の入ったカップを揺らしながら、ケーキにフォークを入れている神楽に話しかけてきた。細められたその目は、何か気になる事を神楽から聞き出すようとしている証拠だ。

「ねえ神楽くん。君は何故、織斑一夏くと仲が良いの？」

楯無は神楽の過去、記憶を失ったという事を知っており、中学で神楽がクラスメイトにした“拒絶”の事も知っている。だからこそ、この疑問に行き着いたのだろう。

「君は自分の過去を知っている人物を嫌う習性があるようだけど、織斑くんもその一人でしょ？　なのに君たちはああも仲が良い。それは何故？」

楯無の発言に神楽は苦笑すると、フォークで切り分けたケーキの一片を口へと運ぶ。そしてそれを全て食べ終えた後に紅茶を一口飲むと、楯無へと顔を向けた。

「私も最初は彼を嫌っていました。病院にいた時から、一夏は“昔”の時入神楽を求めていたましたから」

そう言っつて、紅茶をもう一口飲む。

そして神楽は語り始めた。

何もかも信じられなかった自分。自分の過去を必死に否定してきた自分。そこに現れた一人の少年、織斑一夏。

そんな一夏と神楽の、仲直りの物語を。

いや

友達になった時の、物語を…。

第七話 カゲラ

人の“存在”は、何に縛られるのだろうか。

“存在”とは、一体なんなのだろうか。

人の“存在”とは、何によって定められているのだろうか。

身体か。

脳か。

心か。

記憶か。

もしくは、それら全てか。

ならば、その内の一つでも欠落すれば、その“存在”はどうなるのか。

その“存在”は“人”ではなくなるのか。

“人”でないとすれば、その“存在”はなんなのだろうか。

“人形”か“器”か“化物”か。

そのどれでもないとすれば、その“存在”は“存在”と呼べるのだろうか。

“存在”でないとすれば、一体“私”とはなんなのだろうか。

生きているのか、死んでいるのか。

そもそも、この世界に居ていいのか。

もう嫌だ。

誰でもいい。

“僕”を消してくれ。

“僕”を殺してくれ。

“僕”は、もう生きていたくない。

何故あの時、“僕”だけが残ってしまったのか。

全てを終わらせるつもりだったのに。

その為に、“僕”は全ての“ ”を葬ったというのに。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

“僕”だけが残って、ごめんなさい。

ごめんなさい。ごめんなさい。

ゴメンナサイ。

「……………むにゃ？」

そんな奇妙な声を発して清潔感溢れる白いシートで整えられたベッド、その上の布団が動く。いや、そのベッドの中で睡眠をとっていた“少年”が動き出す。モゾモゾと動いている白い掛け布団からひよっこりと顔を出した少年こと“時入神楽”は、まだ思考が完全に起きていないのかボーツとした顔をして硬直している。

掛け布団から出たのは頭だけ。まだ身体はしっかりと布団に包まれている。季節はもう八月だが、神楽のいるこの個室は冷房により温度が二〇度に設定されており、布団を掛けてなければ風邪をひきかねない。

「……………かにゃ……………」

何故か猫化している。

朝が弱いという訳ではないのだが、頭が中々起きてくれない。先程まで見ていた“夢”のせいなのだろうか。不思議な夢だった気がするのだが、内容は全く覚えていない。夢とはそういうものらしいが、神楽にとってはまだ慣れない事だった。見ていた事は覚えていないのに、内容は覚えていない。都合が良すぎる。

まだ完全には起きていない神楽だが、その右手は枕元ある置き時計へ自然と動く。天井を向いている顔の正面にそれを持ってくると神楽は眠たそうな顔でその時計にデジタル方式で表示されている時間を見る。

午前五時。

時計が表示している時間は、いつも神楽が起きる時間だった。目覚ましを掛けた事がない神楽は、いつもこうして自然と起きる。本人は便利だと思っっているようだが、周りから見れば年寄りの行動だ。少なくとも、今年の春に小学六年へと進級した十一歳のそれには見えない。

時間を確認した神楽は、時計を元の位置へと戻し、目を両手で擦って眠気を飛ばそうと努力する。いつもはすぐに目が覚めるのに、と心の中で呟きながら上半身を起こし、大きく背伸びをした。

「ふあゝあ …」

本当に眠い。

だが身体は勝手に動き出した。背伸びをした後、下半身を動かしてベッドから出る。ベッドの脇に置かれていたスリッパを履き、部屋に備え付けられていた洗面台へと向かう。この部屋には洗面台だけでなくキッチンもあるが、病院食がある為、お茶を入れる程度にしか使っていない。故にその棚にはティーセットなどが置かれているだけで、食器は置かれていない。

洗面台に着いた神楽はお湯を出して顔を洗う。邪魔な前髪を髪留めで抑え、売店で買ってきた洗顔料を使って泡立てたそれを顔に押し付ける。それを全てお湯で取り除いた時、眠気は完全に消えていた。

神楽は洗面台の鏡に顔を向ける。未だ水の滴る自分の顔。その双眸は赤く、どこまでも深い。そしてこの瞳は、他者の心を映す鏡。

だというのに。

「なんで、私自身の心は見えない……」

今まで何人もの“心”を見てきた。その殆どがどす黒い何かに埋め尽くされており、それを本人たちに告げると「化物」と怒声を飛ばしてきた。人間とは何とも難しい存在だ。

そして、神楽はこの瞳が嫌いだった。一度本気で取り除きたいと思ったが、それを担当医に話したら怒られてしまった。自分の身体

は大切にしろとの事だったが、正直、この身体が自分の身体だという認識が薄い。何せこの身体との付き合いは、まだ数ヶ月なのだから。

瞳を見て顔を顰めると、洗面台の側面にあるフック、そこに掛かっていたタオルを取って顔を拭く。それから鏡を見ることなく、洗面台から遠ざかる。自分の瞳を見るほど気分が悪い事はない、それが神楽の考えだ。

顔を洗い終えた神楽はクローゼットへと近づき、それを開ける。中には服が数着のみ入っているようだが、本当にそれだけしかない。その中から黒いジャージを取り出すと、着ていた寝間着からそれに着替える。これから一時間、朝の運動をするのが神楽の日課だ。

ふと、壁に掛けられているカレンダーに目をやる。今日の日付、その下には小さく「午前のみ」と記入されていた。いつも部屋に来る担当医が書いてくれたものだろう。少なくとも神楽の字ではない。神楽の字は、これほど汚くはない。

「あ、今日の検査って午前中だけなのか… 本、読めるかな」

それが嬉しいのか、先程まで厳しい顔をしていた神楽の頬が緩む。本を読んでも、そこに書いてある文字以外は何も見えてこない。それが嬉しく、気分も楽だ。

カレンダーで予定を確認した神楽は着替えを始める。首の後ろを刺激する長い髪は本を読むときには縛ったりするのだが、今から行うのは日課にしている“運動”だ。縛る必要もない。何より、あの

髪を引っ張られるような感覚はまだ慣れない。

身支度が終わった神楽は、最後に眼鏡を掛ける。

「さて、行こうかな」

病室のドアを開け、未だ人気のない廊下をリハビリルームに向かって歩く。

その背中は、酷く淋しげに見えた。

昼下がり。

一人の医師が、院内の廊下を歩いていた。

その行為は決して珍しいものではなく、むしろ医師として当然と言える。此処のような大規模な病院なら尚更だ。

「……………」

だが、その男性の医師は何故か異常に浮いていた。先程から廊下

ですれ違つ患者や、同僚である医師たちも何故か視線を逸らしたり道を開けたりと、周りの行動も不自然である。

その原因は簡単。この男の服装だ。

医者の象徴たる白衣は前を閉める事なく、その下はどこのリゾート帰りだと思わせるようなアロハシャツ。そしてジーンズ。髪はワックスで固められ、かなりツンツンと尖っている。しかも染めているのか、本来黒い髪はその男性、今は金髪である。

始めてこの病院に来て、この医師を見た人物はこう思うことだろう。

どこの不良だ、と。

だが避けられている本人はそれを微塵にも気にしていないようで、現在進行形で下手な鼻歌を披露している。

「あ、先生。ご苦労様です！」

「おう」

どうやら全職員に嫌われている訳ではないらしい。二十代前半の若い女性の看護師が男に声を掛け、男もそれに反応する。話しかけた女性の顔は何故か赤く、話しかけた後に「キャー！」と一人でヘヴン状態だ。この女性は、少し周りの目を気にした方がいいだろう。

男は右手に持ったカルテで右肩を叩きながら、長い通路をひたすら歩く。

「……遠いつてんだよ」

そんな愚痴を零すのも無理はない。基本どの病院にもナースセンターは存在するが、この男性は別段そこにいる訳ではない。ナースセンターなら病院の中央部分、そして重体患者の多く集まる病棟に点在しているのだが、彼の待機室はこの病院の端。そして、今向かっているのは、その真逆の端である。既に十分以上は歩いている。

そして、男の足がようやく止まる。目的の場所に着いたのだろう。

そこは個人病室であり、その広いスペースにただ一人の患者がいるだけ。何とも豪勢な事である。

「入るぞー」

ノックをする事もなく、男は病室のドアを開けた。病室は案の定広く、一人の患者には勿体無い。後三つはベッドが入るだろう。

だが、そんな豪華な部屋造りであるにも関わらず、その部屋の雰囲気は質素だった。家具は備え付けのものだが、その棚に収まっているのは数冊の本のみ。テレビは一応あるのだが、これも備え付け。パソコンも同様だった。

壁に埋めこまれているクローゼットの中身も、おそらく殆どが空だろう。部屋を一瞬見渡した男は、刹那にそんな事を考えた。

そして男は部屋に入ると、大きな窓の近くにあるベッドへと目を向けた。大型とも言えるベッド、その上に上半身を起こして本を読む人物こそ、この部屋の主。そして、今自分が持っているカルテ、そこに記載された患者でもある。

「ノックはした方がいいですよ？ 私は別に構いませんが、人によっては嫌がると思います」

本に視線を向けている人物が、こちらに目を向ける事なく話しかけてきた。その声はまだ幼く、その発生源が未だ子供であるという事を証明している。

「うつせえよ、クソガキ」

本を読む一人の少年“時入神楽”に向かって、男は吐き捨てる。だがその顔には無邪気な笑みがあり、そのコメントを聞いた神楽の顔にも笑顔が浮かぶ。

このやり取りが彼らの日常だった。今更気分を害する事はない。

神楽は今、私服を着用していた。基本、神楽は病室でも検査が終わればジャージか私服に着替えている。本人曰く、寝間着だと本物の病人みたいで嫌だから、だそうだ。

「あー疲れた。てかよ、マジで遠いわこの部屋。つーわけで部屋移れ」

「それは他の先生に言ってください。私がこの部屋を指定した訳ではありません」

「めんどくせー」

この医師の名は“むらかみかき叢上御嵩”。この病院で一番の問題児であり、そして一番の腕を持つ医師である。現在は神楽の担当医であり、ほぼ毎日、こうしたやり取りが繰り返り広げられていた。

年齢は既に三十を越えている。だがその見た目は二十代前半とも見て取れ、かなり若々しい。

御嵩はベッドへと近づき、その脇に置かれていた椅子の背もたれに左手を置き、そのまま椅子を持ち上げる。何処に持っていくのかと思えば、ベッドを通り過ぎて、その先にある窓の近くに椅子を置いた。そして窓を開ける。

「あー、いい風だ。暑いけど」

神楽の部屋は冷暖房完備の為、今こうして窓を開けるまで真夏に

反した涼しさがあつた。だが窓を開けた事で冷房は自動的に停止し、窓から入る生暖かい風が病室を支配し始める。

神楽はその風を感じると、読んでいた本を閉じる。そのまま視線を御嵩に向けた。

その視線の先にいる御嵩は、白衣のポケットから取り出した煙草を口に咥えて火をつけていた。椅子の使い方も間違えており、背もたれに腹部を押し付け、体重をそちらに傾けている。

「御嵩さん、ここ病院です」

「知ってる。俺の職場だからな」

「更に言えば、病室です」

「だろうな。お前居るし」

「それ、煙草ですよね？」

「おう、マイフェイバリットアイテム」

神楽のジト目を受けても、御嵩は煙草を吸い続ける。その顔は至

極満足そうで、煙を吐き出す瞬間の顔はかなり幸せそうだった。だが、病室でその顔はしてほしくない。

神楽は御嵩を信頼していた。

御嵩のこの性格はどうしよもないが、その行為一つ一つに嘘はない。神楽が御嵩の瞳を見ても、その瞳に嘘は映っていない。神楽にとって、それは喜ばしい事だった。彼の前に神楽の担当医をしていた医師は、瞳を覗くだけで気持ち悪くなる程の“嘘つき”だった。

御嵩という人物は、全てが“正直”。こうした行動も、そして言葉遣いも。だからこそ神楽は御嵩を信じ、御嵩もそんな神楽に込えている。

「いいじゃねえか。別に減るもんでもねえし」

「減りますよ、私と貴方の寿命が」

神楽のそんな言葉を聞き、驚いたような顔を御嵩は浮かべた。その哀れむような顔のまま、御嵩は神楽へと視線を向けた。

「何お前、長生きしたいの？ 意味ないよ長生きしても」

「 医者の言葉ではありませんね」

誰でもいい、コイツから医師免許を剥奪しろ。

以前神楽の知り合いが言っていた言葉だ。今ならその言葉に全力で頷ける気がした。

神楽は溜息をつくとき、窓から顔を突き出している御嵩に一度顔を向け、そして丁度反対側にある出入り口へと顔を向けた。そして、言葉を紡ぐ。

「あ、蒼衣^{あおい}さん。こんにちは」

「ぶほおあっ!?!?!?」

ガタガタという音を立てて、御嵩の座っていた椅子が揺らぐ。御嵩が盛大に驚いたのだ。口に啜っていた煙草は四階の窓から投下され、御嵩はゴホゴホと自分の中に入った煙と格闘している。

「いや蒼衣これには海よりも深くお前の胸よりもデカイ事情があつてだなイヤホントすまん悪かった謝るだからそんな目で俺を見ないで
あ?」

背筋をしつかり伸ばした状態で入り口へと振り返り、直立不動のまま言い訳を始める御嵩だが、入り口に誰もいない事にしばらくし

て気付く。そしてその態勢のまま、恨めしそうな視線を神楽へと向ける。

「ガキ……てめえ　ハメたな？」

「さあ？」

十一歳の少年に遊ばれた三十歳の大人の凶。

御嵩は大きな溜息を一つすると、ポケットから新しい煙草を取り出そうとする。だが手にとった箱の中身は既に空であり、御嵩は窓縁に寄りかかり、再び溜息をついた。舌打ち付きではあったが。

「あゝくそ。最後の一本が飛び降りちまった……」

悪態をつく御嵩に神楽は笑顔で「ご愁傷さまです」と話しかける。御嵩は不機嫌全開でそれを無言で受け取ると、手に持っていたカルテを開いた。今日の検査結果だろう。

「異常なし。終わり」

いつもの事だが、これが御嵩の検査報告だった。何もなければ「異常なし」、何かあれば「異常あり」だ。至極簡単に理解しやすい

のだが、医者としてはあまり褒められるものではなかった。

御嵩はそのカルテを神楽へと投げる。患者にカルテを渡してしま
うのもアレではあるのだが、神楽も既に慣れきっているようで、そ
のカルテを開いて検査結果へ視線を向ける。

「
ありがとうございます。でも、もう少し綺麗な字で書い
てください。読み難いです」

「うるせ。俺の字なんだから、俺が読めればいいんだよ」

まだ機嫌が治りきっていないのか、今度はガムを取り出して噛ん
でいる。口が寂しいのだろう。彼にとって煙草はそれだけ重要な物
らしい。

「本当に怒られますよ、朱音^{あかね}」

神楽が御嵩に言葉を投げかけた時、彼らの居る病室のドアが勢い
よく開いた。御嵩は再び背筋を伸ばし、先程の“蒼衣”という人物
ではないかと警戒している。だが神楽はその来訪者が何者なのか既
に気付いているようで、その顔から笑顔が消えていた。

「お、いたいた」

入り口に立っていたのは、少年だった。

神楽と同年代らしきその少年は、神楽が居ることを確認するやいなやベッドへと近づいてくる。その右手には大きな紙袋を持っており、中には数冊の本が入っていた。

御嵩はその少年を知っていた。毎日と言っていいほど、その少年は神楽の元を訪れている。そして毎回と言っていいほど、神楽の顔から笑顔が消え失せる。

「じゃあな。喧嘩すんなよ」

御嵩は神楽の右手に握られていたカルテを引っ手繰ると、それを片手に病室を後にする。御嵩なりの気遣いではあるのだが、この気遣いが成就した事は今まで一度もない。

「今日はさ、お前の家からアルバムとか持ってきた」

「帰ってください」

何故なら、神楽はその少年こと“織斑一夏”を異常ともいえる程に拒絶するからだった。

紙袋からアルバムを取り出した一夏だが、神楽の冷たい声でその

手が止まる。帰れ。それは毎日言われる、一夏への言葉だった。

「帰らない。お前がコレを見るまでな」

一夏はアルバムを袋から取り出し続ける。数冊あるアルバムはどれも大きく、分厚い。これだけの量をここまで運んでくるのは、未だ小学生の一夏にとってかなりの重労働だっただろう。

だが、神楽にとってそれはどうでも良かった。そう、どうでも良いのだ。

「帰りなさい。あと、その“ゴミ”も忘れずに」

“ゴミ”

それは、一夏の持ってきたアルバムたちの事だった。神楽の、時入家の歴史とも言えるそのアルバムには、かつて神楽の両親が撮影した写真が所狭しと保管されている。神楽だけではない。神楽の両親も、姉と妹の写真も入っている。

それを神楽は“ゴミ”と吐き捨てた。ただ無表情で、一夏を見つめたまま。

「ゴミじゃない。これはお前の記憶だ」

一夏は少し怒ったような顔と口調でそう言うと、一冊のアルバムを開き出す。

だがここで、神楽が動き出した。

「

っ！ おい！ 何処行くんだよ！？」

無言で靴を履き、病室のドアへと歩き出す神楽。それを一夏が追おうとするが、振り返った神楽の睨みに反応して歩みが止まる。

神楽のその顔は、本当に何も無い表情だった。

「早く帰りなさい。いいですね」

そう告げて、神楽は病室を出て行った。

今にも泣きそうな顔をしている、一人の少年を残して。

いつもの事だった。

あの“織斑一夏”という少年が来ては、こうして病室を抜け出す。そして今日は、病院すら飛び出している。

「馬鹿みたいだ」

そう呟きながら、神楽は街中を一人で散策していた。外出自体は特に問題はない。御嵩も「出たけりや勝手にどうぞ」と言っていたし、街に出るのも既に三回目だった。

だが神楽にとって、この“街”という場所は極めて異彩だった。

街中には多くの人があり、年代もバラバラ。着ている服、話している言葉、表情、行動、その全てが一人一人異なり、だがその全てが“人間”であるという。とても不思議で、面白い。

歩きながら、神楽は周りをキョロキョロと見ていた。最初は周りの建物や店などを見て驚いたものだったが、今は違う。今彼が見ているのは“人”であり、その“瞳”だった。

「どうしてみんな“嘘つき”なんだろう…」

歩きながら、丁度すれ違った若い男に瞳を向ける。そして、その

男性も神楽に気付いたのか、瞳を向けてきた。

そして見えるのは、男性の瞳の中、その濁りきった色。

「……………」

男性は神楽の行動を不思議に思うが、すぐ視線を逸らして自らの進行方向へと向けた。神楽も男性の瞳の奥を覗き終えると、進行方向へと意識と視線を向け直す。

すれ違う神楽と男性。

男性は思うまい。瞳を合わせた刹那、自分の“心”が覗かれているなど。

「嘘つき嘘つき嘘つき……。でも、それでも“ヒト”は生きている。じゃあ、やっぱり“嘘”をつく人間が“普通”なんだ」

なら、御言はどうなのだろうか。そして、自分の保護責任者であるあの女性、“織斑千冬”はどうなのだろうか。

そして、“織斑一夏”はどうなのだろうか。

「みんな、嘘はついていない。じゃあ、あの人たちは“異常”なのか？」

そして、こうして人の心を覗ける自分も、異常なのだろうか。

「異常、なんだろうな」

そう、異常なのだ。それは分かっている。

入院して一月が経った頃だろうか。神楽の元に、様々な人物が見舞いに来た。

その瞳に、大きな“嘘”を秘めて。

「でも、彼は… 織斑一夏は違った」

あの少年とその姉、その二人の瞳に“嘘”はなかった。だから千冬を信じる事が出来たし、出来れば一夏という少年も信じたい。

だが、それは無理だった。

「彼が求めているのは、昔の私^{カゲラ}。私が私でない頃の私。そして、それは私ではない」

そう、昔の“時入神楽”は死んでいる。あの日の事故で、死んで

しまっている。今此処にいる“時入神楽”は別人。

かつて一夏が持ってきたビデオ、そこに映っていたのは、一人の少年と二人の女性。

一夏はその女性たちを神楽の姉と妹だと説明した。笑いながら、そのビデオをとっているのは神楽の父親であるとも告げた。

だが、神楽は何も分からなかった。

だからこそ、気味悪くなった。

自分の知らない“自分”が、ビデオの中で笑っている。女性たちと仲良く話し、遊んでいる。

それが恐ろしくもなった。

「
違つな」

今までの思考を一度止め、神楽は自嘲した。

「やっぱり、私だけが“異常”なんだ」

そう。

こんな事を考えている自分こそ、一番“異常”であり、自分の知

るちっぽけな世界の中で、唯一“異常”だと認識出来る。それが可笑しくもあり、悲しくもあった。

いや、少年はまだ感情の全てを理解している訳ではない。

嬉しいや悲しいという感情。怒り、憎しみという激情。それら全てを、少年はまだ十分に感じた事がない。

「駄目だなあ。まだ私は“人”にすら成れていない」

顔を空へと向け、その青い空を見上げる。美しいとは思う。だが、それだけに、今の自分が酷く醜く見えてしまう。この空の下に存在しているのかとすら思う。

「？」

そんな事を考えていた時、ふと神楽の視界に入るものがあった。それは建設途中のビルで、完成すれば三十階程度にはなるだろう。鉄骨だけの仮組み状態だが、その所々には青いビニールシートが掛かっており、仮組みの内部、その全容を見る事は出来ない。

だが、神楽が気になったのはそれではない。神楽自身も何に反応したのか分かっていないようで、小首を傾げていた。

視力が常人より弱い自分。故に眼鏡を掛けてそれを補っている。

その眼鏡の奥にある瞳が、神楽に何かを訴えていた。

「　　っ！」

そして気付く。

未だ仮組みで鉄骨丸出しのビル、その中腹より少し上の辺り。建設に使われている鉄骨が無造作に置かれ、内一本が外側へと飛び出している。

その上に、一人の人間がいた。

良くは見えない。まだ距離もあり、目が良い人間でも分かりづら
いだろう。

だが、神楽には見えてしまった。

鉄骨の上で立っているのは、一人の少女。

そしてその瞳は、何も映していない。

“生”すら、映していない。

「　　」

神楽は無言で走りだしていた。昼間の街中、人がごった返すその

街道を。

今まで考えていた“自分自身”の事。それは後でも考える事ができる。

だが、もしあの少女が自分の考えている行動に走った場合、彼女の命が消えてしまう。

それは、多分、絶対に駄目な事だ。

そう心の中で呟いた少年は、ひたすらに走る。

あの瞳を目指して、走り続ける。

守りたいと、そう思えたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346q/>

Infinite Stratos Re//memories

2011年6月18日21時42分発行